育兒法心得

精神分析

★第8卷・第9號★昭和15年・9月★

御前サマの冷水摩擦（中根ガン坊氏作漫畫）

（本文九〇頁參照）

東京精神分析學研究所出版部

育兒法心得號・內容目次

表紙　卷頭言　研究　文藝　資料

『精神分析』第八巻・第九號

La Problemo de Japana Kulturo

Nobuhiro Cuĉija

Oni ĝenerale scias, ke la karakterizaĵo de la orienta kulturo sin trovas en simbola sintezo el sentema intuicipovo, kaj tiu de la okcidenta kulturo sin trovas en koncepta analizo el scienca logikopovo, kaj laŭ tiu plua psikoanaliza klarigo oni komprenas, ke la okcidenta kulturo estas vira, vivoinstinkta kaj superegoa kontraste al la orienta kulturo, kiu estas virina, mortoinstinkta kaj esa. Tiu karakterizaĵo trovas konvenan esprimon en la kontrasto de kristanismo kaj budaismo. Nome Paradizo en kristanismo estas la edipokompleksa sublimo de patronfikso de la okcidentanoj, kaj kontraŭe Nirvano en budaismo estas uterfantazia sublimo de patrinonfikso de la orientanoj. Laŭ socialanalizo oni povas supozi, ke la patrinonfikso de la orientanoj estas la starado antaŭ komunumo de familio el parencoj de patrina flanko, kaj la patronfikso de la okcidentanoj estas la starado antaŭ patrofamiliestra sistemo.

Oni ankaŭ povas esprimi, ke la hinda kulturo estas la plej uterfantazia aŭ esa, kaj la ĉina kulturo estas malpermesa aŭ superegoa, kaj la japana estas senkonscie malferma (ekspozisma) aŭ egoa el la orientaj diversaj kulturoj. La suno, la monto Fuĵi, ĉerizfloroj, bano, luktado, harakiro, ktp. havas profundan interrilaton kun la senkonscio de la japanoj. Nome tiuj estas serena kaj naiva belo, en kiu estas sublimita mama (liperotika) patrinonfikso kaj patrineca naskovolo de la japanoj. La delikateco de la japana belo devenas de ilia virineco kaj tiu konstanteco devenas de ilia mortoinstinkto, sed tiu klareco devenas kredeble de ilia senkonscia malfermeco.

La kialo, ke Oriento estas konstanta en la punkto spirita kulturo, sed prokrastiĝas en la punkto materia civilizo, dume Okcidento estas inversa, estus pro ke Oriento estas patrinonfiksa, masokisma kaj psikoza, dum Okcidento estas patronfiksa, sadisma kaj neŭroza. Pro tio ni devas entute konvinkiĝi, ke la estonta kulturo estos en kunfandiĝo de ambaŭ kulturoj orienta kaj okcidenta; nome tiu estos en aŭfhebo de la ambaŭ kulturoj deveníntaj de konservado de la orienta senteco kaj la okcidenta scienco, kaj de abolicio de la orienta patrinonfikso kaj la okcidenta patronfikso.

Tio estos problemo de la kulturo ne nur en Japanujo, sed en la mondo.

(Esperantigita de Jukio Onoda)

The Psychological Effect of Punishment

(A Part of the Commencing Article)

Kenji Ohtski, Tokio

It is self-evident that some kinds of punishments are necessary in education. In the Japanese juridical world, it is fervently discussed whether the penal purpose of punishment is educational or compensatory. But the punishments for penal as well as for educational purpose can be educationally effective, I believe, only through its right compensatiability. Punishment, if inflicted wrong, is rather to evil effcct. To give it to good effect, there should be fulfilled three conditions:—— with the sufficient capacity of the punisher, in the adequate ways of punishment, for proper phase of development of children.

The punisher need mean a super-ego for the punished. If he ceased to mean it for the latter, he ought to give up the action, or the children will surely be rebellious, and the effect will prove rather contrary. As to the kinds of punishing ways several can de cited, i. e. scolding, menacing, striking, advising and, especially for women, imploring with tears. Which of these ways to take should be decided according to the relations between both sides, the kinds and natures of the wrong committed, and the stages of development of the punished. Bodily Punishment need be gradually begun at about 7, or 8 of age, as in these ages the boys' aggressive instnict begins to awake, and toward puberty non-bodily ways of punishment should be mainly resorted, for about this time the boys' super-ego is almost completely founded. So,the punishment of any kind should aim at the establishment of the doy's super-ego. Only in the name of this holy aim, man can claim the capacity of punishment. When your punishment, therefore, has begun to be rebelled, then yon must instantly quit your action, as the fact simply means that you are no longer for him the super-ego. Oedipal conflict in the souls of children can only be pulled down by the attack of proper punishment, and thus the remains of the fallen oedipus-complex are sublimated again into holy image of conscience deep in the souls of children.

育兒法講話

大槻憲二

一、分析育兒の懺悔

私は育兒の方法を講ずる柄でないかも知れません。育兒法はやはり女流分析者が幾多の經驗の後に語るべき事で、男子はどうしても育兒と云ふやうな細々した事を語るには不適當なものです。男の話はとかく理論倒れになり勝ちなのです。それに私は子供を二人育てましたが、二人とも男兒で、且つその子たちが極幼少頃には私はまだ分析を知らず、育兒の世話の大部分は母親に殆ど一任してしまつてゐました。時々私も乘出しましたが、今にして思へば怪我の功名で、あれでよかつたと思ふ點も多いが、少し失敗した點もありまして、やり過ぎた點もありました。それ等を懺悔し是正するやうな心持で後進の世の父母のために極めて通俗的に說いて見たいと思ひます。

私が分析を學び始めた頃には、長男は旣に四・五歲になつてゐましたし、次男は二・三歲になつてゐました。それでも分析のお蔭で大過なく育て、今では私の口から云ふのはをこがましいですが、大體に於いて順調に育つたと見てゐます。勿論、人間の精神的發展には種々の波瀾や消長がありますので、今後なほ幾多、親を手古摺らせるやうな段階に直面することもあらうと覺悟はしてゐますが、併し親が分析を學び、子を遇することが正しければ、子供の心身を健康に育て上げるに如何に大きな影響を有するものであるかと云ふことだけは身を以て體驗いたしました。それ故に、私はこゝで世の親たちに分析的育兒法の大要を說いたとて、必ずしも甚だしい罪惡であるとは考へてゐないと云ふことを敢て誓言致すことが出來ますし、ましてその後幾多の患者を扱つても見、また西洋先哲の分析學書を讀み、理論に實際に多少信ずるところが出來てをりますから、敢て試みる次第であります。

二、懐姙中の注意

育兒にはまづ受胎期間の心得から說き起すべきが順序でせう。受胎期間の母親の心の持樣とは、つまり所謂胎教と云ふことでせうが、胎教と云ふことには儒教的なものがつき纒つてゐるやうです。受胎中に母親が聖書に親んだり偉人の肖像を見なれてゐたりしたら、子供が偉人聖者になると云ふ考へ方の中には、分析學での所謂「念慮の全能」と云ふ分子が多く含まれてゐるやうです。何が聖者で何が偉人であるかと云ふやうなことは、旣成の、或は傳統的の考へ方だけで定めてしまふわけにも行かないと信じてゐる我々として、まして平凡人の偉大さを强調したい我々として、さう云ふ形式的な考へ方をとり入れることには躊躇いたします。心身を無意味に過勞させてはならないと云ふことだけは何人にも異存のないところであらうと思ひます。時期に應じて適度の運動の必要であることは申すまでもありませんが、過勞してはならないと共に、心持は平靜にして、激情に心を傷めることなどは勿論愼まねばなりません。子供が腹の中で生長し過ぎてはみつともないとか、お產の苦みが大きいとか云つて懐姙中粗食したり營養を控へたりする向きもあると云ふことですが、心得違ひと思ひます。

次に大切なのは分娩時の精神的及び肉體的の外傷をなるべく少く與へるやうに心掛けることであります。異常出產などが赤ん坊の心身に好結果のあるべき筈のないことは常識的にも分りませう。分娩に際して胎兒の苦痛を輕減する切開が「帝王切開」の名で呼ばれ、このやうにして生れたものは英雄視せられる傳說や習俗のあるに徵してもこの事はよく分ります。とにかく出產が胎兒にとつて驚くべき環境の大變化であることは云ふまでもないことでありまして、それは親しく分娩時の胎兒の變動を目擊せられた人々のよく知るところであります。それは彼等にとつて實に天地創造であり、大革命であります。その影響をなるべく少くしてやらうとの母親の介意は、母性愛の第一の表現でなければなりません。或る分析者はこの瞬間に於ける胎兒の印象の殘滓を「出產の外傷」と名付けて、それが後年の精神生活に於ける病源となり禍根となると云ふことを力說してゐるのであります。卽ちそれが後年の社會生活に於ける積極性の缺如や新たな環境に入る際の逡巡となつたりすると說いてゐます。

私自身はまださう云ふ實例に就いて多くの實驗を經てゐませんが、理論上正にあり得べきことゝして、世の母親たちの注意を促しておきたいと思ひます。

三、胎内から胎外への順應

このやうに、赤ん坊にとつては出産と云ふことは恐らく決して喜びではなく、非常な驚きと苦痛に滿ちたものでなければなりません。驚きと苦痛に滿ちてゐると云ふことは、つまり出産以前の狀態への憧憬と云ふことを當然の歸結として豫想せられねばなりません。赤ん坊が生れた瞬間に擧げる呱々の聲は彼等にとつて決して出産の喜びを謳ふ凱歌ではなく、苦痛に滿ちた現世に投り出されたことへの驚きと不快とに對する抗議でなければなりますまい。その抗議は元の胎内生活への復歸の願望と云ふことに外なりませんから、母親たちはその願望をせめて代償的にでも充足してやらうと思つて、彼等の環境を出來るだけ胎内生活の條件に近いものにしてやらうとして努力します。褥の柔かさ、溫度、感觸、動搖の具合、音響の調子などに於いてつとめて胎内生活を彷彿するものを作り出さうとしていろいろに骨折ります。さうしてその努力が成功した場合には、赤ん坊たちは元の胎内生活に還つたやうな錯覺を起して安心してをとなしくなります。

日本では赤ん坊を背中に負んぶして持運ぶと云ふ極めて原始的な方法を今日なほ用ゐてゐますが、この方法が不思議に赤ん坊たちにはお氣に召すと見えまして、泣き叫んでゐる赤ん坊も母親又は乳母、子守り女の背中にくゝりつけられると、成人には如何にも窮屈で苦しからうと思へるのに、忽ちをとなしくなつてしまふのであります。それはこの狀態が彼等の胎内生活の氣分を彷彿せしめるからに相違ないと考へられます。ところがこの方法は赤ん坊の脊骨や脚を曲げる心配があると云ふ人々があつて、これは尤な心配であると思はれます。所謂ガニ股の人間が日本に多いのはおんぶの習慣のせいだと云ふ說もありますが、それに就いては嘗て、(昭和十四年十一月一日)竹内茂代博士は都新聞家庭欄で次のやうに述べてゐましたから、こゝに紹介して見ませう。

「……普通健康に育つてゐる五十日位の子供であれば、さう云ふ心配はまづないものと見て差支へありません。子供をおんぶすることは何も木に支へをつけるやうに直接がんじがらめにくくりつけることではありません。おんぶしないと云ふ反面に見逃してならないことは、抱いてゐる爲に下の方、つまり足や腹の始末が惡くて冷やすことが大へん多いことです。子供は下半身を冷やした場合、何等の原因なしに下痢を起すものです。おむつがたとへぬれてもしつかりおんぶさへしてをれば、決して冷えるものではありません。この冷えから來る下痢は消化不良といふやうなものではありませんが、母親はすぐ消化不良の下痢と誤解して絕食又は減食させたりします。そのため子供の發育は著しく阻害されます。子供の健全な今日の發育は今日の食

物で養はれなければならないのです。で、さう云ふ下痢はたゞ溫めてやるだけで治癒しますのに、依然おんぶもせずに抱つこしてゐるためにますます冷やして行く結果になります。それで私はおんぶすることに何も弊害を認めません。むしろ推奬する者です。

おんぶすることの得點は、子供の下半身を冷やさないと云ふことの他、おんぶをすれば自然外に出る機會が多くなり、外氣に對する柢抗力も強くなつて健康になるといふことです。戶外の空氣に馴らしておくといふことは大へん必要で、かうしておけば寒中になつても風邪など引かないやうになります。ストーブで溫まつた室の中に閉ぢ込めておいたのでは大きくなつて少くとも兵士にはなれないでせう。

おんぶする時に、あまりきつく締めるのは禁物です。その爲に簡單なおんぶの帶を作つて欲しいものです。紐を相當太くすることで、それには木綿半幅の紐を半折して子供の背に當る部分に綿を入れます。そこから三本の紐を下げてその下にもう一つ綿を入れた幅廣い紐をつけてお尻に當てるやうにすれば理想的です。子供のお尻を幅廣く包むやうにすることが大切です。子守におんぶさせつ放しの危險なことはよく御承知のことゝ思ひます。要するに赤ん坊は小さくて弱いものですが、決して病人ではないといふ建前から、須らくおんぶして頭のぐら〳〵するやうな子供はおんぶして手拭で頭をしばつておくことです。子守におんぶさせつ放しの危險なことはよく御承知のことゝ思ひます。要するに赤ん坊は小さくて弱いものですが、決して病人ではないといふ建前から、須らくおんぶして育てるやうにして下さい。」

と殆どおんぶ絕讃の意見を洩してゐます。おんぶはわが國風俗の傳統では、今なほ東北の田舍地方では行はれてゐる藁製の大きな籠の中に入れておく習俗から由來してゐるものと思はれます。少くとも心理的には同じく胎內復歸願望を滿足させてやるに役立つものでありますが、併し、母の背中で相互の溫みが交流すると云ふ點は一層適切な胎內條件の復活であると云へませう。

四、保護と鍛錬

右の竹內女史の意見の中で、おんぶの利得の一つとして、子を外氣に觸れさせる機會が多いと云ふ點がありましたが、これは必ずしもおんぶに限るわけではありません。おんぶしてゐれば、外氣に觸れさせてやり易いと云ふ點は慥にありますが、それは併したゞ顏面と呼吸器だけであつて、實を云ふと全身を外氣に觸れさせてやるやうにすべきであると思ひます。とは云へ勿論、生れたての赤ん坊をいきなりさうするのは冒險であります。

赤ん坊は睡眠時間の非常に長いものでありますが、それが生長につれて短くなります。その長短に反比例して外氣にあてる時間を多くしてやるべきだと云つて大過ないかと考へます。外氣にあてる時間を多くすると共に、抱いたりおんぶしたりして運動させる時間も多くすべきだと云つてよいと思ひます。私は寒中でも風の來ない南向の椽側で、赤ん坊のお尻を丸出しにして日光浴をさせたことがありましたが、赤ん坊は元氣に脚をぴんぴんさせて非常に喜んでゐました。そのやうにして鍛錬したゝめか、風邪など殆どひくことなく頑健に育ちました。

竹内女史も云はれるやうに、赤ん坊は弱いものではあるが、決して病人ではないのですから、絶對安靜にしておくわけに行きません。要は胎内生活から現實生活への過渡期にあるもので、胎内生活を憧憬しつゝ、半面にはやはり現實に順應し適合して行くことに積極的（生の本能的）喜びを感じてゐる生物であると云ふことを忘れず、漸次に現實生活適應の喜びを敎へるやうに導かなければなりません。胎内復歸の喜びを敎へるばかりで、現實順應の喜びを敎へないと、成人の後に臆病者になるか精神病者になるかするより外には行き道がなくなるわけだと云ふことは常識的にも容易に理解の行くことでせう。醫學博士瀨川昌世氏は『健康增進叢書、育兒篇』の中で「小兒を育てる實際を見るに、大事にしすぎる家庭と、また夫れと反對に、構はず放任しておく人とがある。前者は消極的保護法で、後者は積極的な鍛錬法である。」と說いてゐますが、この表現は必ずしも適切でないかも知れません。併し大事にすることがとにかく一種の保護法であり、放任しておくことがこれまた一種の鍛錬法であることだけは確かです。保護法と鍛錬法とが兩々相俟つて育兒の上に必要な二つの方法であることは眞實です。けれども、保護法はとかく大事にし過ぎるやうになり勝ちであり、鍛錬法がとかく放任し勝ちになつたり叱り過ぎになつたりすることは人々の屢々見受ける通りであります。この兩者の釣合ひが適度に行はれ、春から夏に移るやうに進み行く場合は極めて稀であるかも知れません。これに就いては、大體に於いては、保護は母親の役割であり、鍛錬は大體に於いて父親の役割であることは人々の容易に首肯し得るところでせう。これが逆になつてゐる場合も少くはありませんが、私はそれは寧ろ變態的な場合であると申したいのであります。

五、授乳と盲愛

授乳は生後十時間乃至十二時間頃に始まり、約一ケ年前後を以て終るべきものとせられてゐます。それには授乳の方法、時間、量目を誤らぬやう、殊に乳兒の發育に應じて適宜に變更させて行くことが大切だと云ふ點を忘れないやうにせねばなりま

せん。

授乳時間の隔りは三時間乃至四時間がよいと云はれてゐます。赤兒の胃の中に滿ちた乳汁が完全に消化されるに三時間あまりの時間がかゝるからであります。生後一ヶ月乃至二ヶ月位までは三時間おきにし、それ以後は四時間おきが適當だと東京市技師森重靜夫博士は主張してゐます。お乳は吞み干させるやうにすると乳汁の分泌が盛んになるものです。併し夜中はなるべく與へないやうにしたいものです。健康兒でよい習慣をつければ、夜中の哺乳などはしなくて濟むものであります。從つておむつを濡らす率も少くなり母の手數が省けます。添寢もなるべく避けるやうにしたいものと私は考へてをります。添寢の惡癖がつきますと、少年期青年期になつてもまだ誰か側についてゐなければ寢られないと云ふやうな始末になり、やがて不良早熟の遠因を長養するやうになり勝ちであります。

哺乳は母親にとつても乳兒にとつても非常に大きな快樂でありますので、これは單なる營養としての意味以外に愛情そのものゝ、端的な表現となりますので、とかく濫授され勝ちになるものであります。やれ泣いたから、それむづかるからと云つて一々乳房を含ませて懷柔すると云ふ方法を世の多くの母親たちはとりたがるものでありますが、それが如何に恐るべき弊害の源となつてゐるかは、彼女等には分らないのであります。精神的弊害としては頑是ない乳兒ながらもこのやうにして彼等の我儘(全能感)は增長させられるからであります。肉體的原因としては、必要以上の營養をとることにより、胃腸の障碍を來たすことになるからであります。好んでかう云ふことをする母親がとかく離乳を遲らせ勝ちになり、また乳が涸れて授乳が出來なくなると、無暗矢鱈にお菓子をあてがうやうになるのであります。愛情が本能的になまで昇華力に乏しい母は、とかくかうなり勝ちです。更にまたこのやうな母が姑になり、憎い嫁から可愛い孫がやたらに生れるやうになりますと、嫁から孫を奪ひとる手段として、またもや菓子をふんだんに孫に喰べさせ、嫁が心配のあまり毒だからと注意すると、「祖母ちやんのやるものに毒は這入つてゐない」と不機嫌な顏で一蹴し、已むなく嫁を默らせしまふやうなことをするやうになるのであります。

六、離乳とその障碍

離乳は一體に日本では遲れ勝ちになるらしく、昭和十五年四月十二日、東京朝日新聞に厚生省宇田川博士の報告せられてゐたところに依りますと、千葉縣下では四歲未滿で離乳してゐない赤ちやんが三三・七二パーセントとありました。全國がみなこの比率とは云へますまいが、必ずしもこれと非常に相違してゐるとも考へられません。私の取扱つた患者の中には小學生の

二、三年になるまで離乳しなかつたものが少くありません。さうして彼等に於いては口唇性感が定着し、神經症的性格となつてゐるのであります。口唇性感に就いてはなほ後節に更めて說きます。

右の宇田川博士の報告によりますと、六ヶ月以前に離乳してゐるものもあつて、それが三・八八パーセントあると云ふことで、四歳未滿でまだ離乳せぬもの丶十分の一にしか達しませんが、この離乳はいさゝか早過ぎます。離乳の早過ぎるのは遲すぎるのと同樣、好結果あるものとは考へられません。離乳は原則としては、生後七ヶ月乃至十二ヶ月間に徐々に行ふのがよいと思はれます。生後一ヶ月乃至一ヶ年半を主張する醫家もあります。それは乳兒の體質や發育狀態如何を考慮して、必ずしも劃一的に考へたり處置したりするには及ばないと思ひます。その際、始めは（幸にして母乳があれば）全部母乳ばかりですがそれから漸次に母乳以外の食物を與へて、知らず識らずの內に母乳から他の食物に移つてゐると云ふ風にすべきであります。その際與へる食物の種類に就いては、厚生省の意見を紹介しますならば、「大體七ヶ月目頃から與へる食物としては、重湯、果物や野菜のしぼり汁、スープ、ボール、ウエファースなどの輕い菓子、おまじり、半熟の卵、裏濾にかけた野菜（ホーレン草など）魚肉（白味）などを順次に與へます。九ヶ月、十ヶ月になりますと、お粥、食パン、バター、半熟の卵、裏濾にかけた野菜、魚肉、豆腐、麩、菓子等色々とその數と量とを增やします。」と。とにかく漸次に他の固形食物に馴らしていつとはなしに母乳を卒業させるやうに鍛錬する心掛けが必要であります。

離乳が變態的に遲れますと、所謂病的な口唇性格を形成し、男子は女性的となり、女兒は幼兒的となります。少くとも精神發達の自然さを阻碍し、所謂昇華の機會を失して口唇本能がいつまでも生硬のまゝに殘り、口やかましかつたり嚙みついたりします。

前に七ヶ月頃から母乳以外の食物を與へると云ふ說を述べましたが、それは八ヶ月頃から乳齒が生えますので、さうして乳齒の生えると云ふことは、そろ／＼固形物を喰べる資格が出來て來たと云ふことを豫示する現象であるから、食物の方もそれに呼應する用意をしなければならないわけであります。乳齒が生えて來ますと、乳兒は所謂後期口唇性感期に入り、屢々乳房に嚙みつくやうになります。即ち加虐的（サディスティシュ）な性向が芽生えて來たことを意味するのであります。

離乳に際して苦いものや辛いものを乳房につけたり、乳兒を苛酷に膺懲したりすることは愼まねばなりません。乳兒の恨みが殘り、性格を歪曲する結果になることが多いからであります。乳房に執拗に執着する傾向を與へたことに就いては乳兒自身もさることながら、母親の方にも半分の責任のあることを思ふて、まづ母親自身の愛情の處置や昇華を考究してかゝることが

先決問題だと思はれます。何となれば、前にも申しました通り、母にとつて授乳は實に根深い本能的の歡びであるからであります。

七、なまの愛情の利害

こゝで特に世の母親たちに警告しておきたいことは、彼女等の愛情が本能的になまであることとの利害兩方面に就いて十分な自覺を持つてゐて貰ひたいと云ふことであります。恐らく母親として最も浄福であり得意であるのは、子供がまだ乳兒である間であらうと思ひます。その間には殆ど母親の專有時代でありまして、父親も姑もこの期間には何とも手の出しようがありません。子供も母親以外には誰も相手にしようとはせず、ひたすら母を慕ひます。これ一つには確に乳房と云ふ偉大な必要品が具はつてゐるせいにもよりますが、抱いたり擁えたり吸付いたりする生々しい愛情の表現こそは女性たちの最も本然の姿に外ならないからであります。どんなに知力（昇華力）の低い女でも、これだけは出來ないことはないのです。併し男だつてこれが出來ないわけではなく、得意な男もゐるにはゐますが、概して云ふとこれは女の方に適した役目であります。併しかう云ふ愛撫の方法は乳兒時代には最も適當し必要でありますが、その時代が過ぎると却つて不必要になつたり弊害を齎したりするものであります。換言すると、愛情の表現は子供の成長に應じて變更して行かなければならないのです。その變更（昇華）のうまく行かない場合には、子供から反逆せられたり、子供を不幸に陷れたり、從つて母子ともに大きな悲劇を作ることになり勝ちであります。

素質的に女はこのやうに愛情を昇華（知力化、精神化）することに不得意であり、男子はこれがやゝ容易なやうに出來てをります。勿論、個人によつてその差は區々でありまして、女子であつても昇華力の高度な人も少くはありませんし、男子であつてもそれの低い人も多いことです。併し概して云ふと、女子であると云ふことは愛情がなまであると云ふことでありますから、なまな愛情が生かされるに最も適當した幼兒時代の子供を愛し、子供が漸次に成長して行くことを好まぬ母親が多いのであります。子供の成長は母親のなまの愛情を必要としなくなると云ふことであり、それについて行くためには母親は自分の愛情をその程度に應じて昇華させて行かなければならないのであります。その昇華の出來ない母親を持つた子供は、自分の愛情をやはり幼兒期のまゝに保存し停滯させておくか（卽ち神經症的少年少女となるか）、或は母親を卒業し輕蔑して、親不幸の少年少女となるか、二つの内何れか一つの道を選ばなければならない次第となるのであります。

それ故に、子供が漸次に生長して行くと云ふことは母親をリビドー（愛情）的に離れて行く歴史的發展だと云つて過言でないのであります。これ故に、離れられるのがいやならば、母親は自分の愛情を昇華する修業なり工夫なりを娘時代から積んでおいて、十分にその用意がなければならないのであります。併しその用意を積みすぎると、女らしいリビドーの生々しさを失つて變態的な半男性的女性が出來上り姥捨山に葬られるやうなことにならぬとは限りませんので、女子のリビドー生活は誠に厄介なディレムマに充ち滿ちてゐると云はなければならないのであります。

それ故に、嫁姑問題の如きも、女（姑）の愛情がいつまでもなまであると云ふことを考慮に入れて見ることに依つて、その根柢を理解することも出來るし、またそれを回避すべき方策も樹て得ると云ふわけであります。

とにかく離乳は子供が母親を卒業する第一歩であります。それ故に、世の母親たちが、意識的にはともかく、無意識的には離乳を肯ぜず、いつまでも乳房の魅力で子供をリビドー的に自分の膝下につなぎとめておかうとすることは自然でありまして母親たちがその自分の心理病根に氣づかぬ以上、離乳精神衞生運動はいつまでも緒に就かないであらうと思はれます。

八、子を繞る愛情爭奪戰

それ故に子供の養育は、幼少年期は母親に、青年期以後は父親に、主としてその任務が配分せられると云つて過言ではないと思ひます。勿論、さう云つたからとて、極めて大略の事でありまして、幼少年期にも男親が全然無關心であつてよいわけはありませんし、青年期以後にも母親が全然手をひくと云ふわけではありません。たゞ教育者としてのシテ、ワキ關係が轉倒すると云ふだけの事であります。この關係がよく兩親の間に諒解がついてゐないと二人の間に子供の愛情を繞つて地獄的な爭奪戰が展開せられることになり、それがひいては子供の不幸になる場合が極めて多いのである。トルストイの『クロイツェル・ソナタ』にはさう云ふ場面が多くて、嘗て本誌第七卷第十一號上に高水力太郎氏の詳論せられた通りであります。

女親のリビドーが比較的なまであり、男親のそれが比較的昇華せられてゐるがために、なまの愛情を必要とする幼少期が母親の主任に屬し、昇華せられた愛情を必要とする青年期以後が男親の主任に屬することに公平冷靜な理解のないための愛情爭奪戰もさることながら、また一つには、親子の間でも異性間には自然の牽引があり、同性間には自然の反撥があることをもまた公平冷靜に諒解してゐなくてはなりません。とは云へ、同性間と雖も反撥ばかりがあるわけではなく、異性間と雖も相互牽引ばかりがあるわけではありませんが、大體に於いてさうなるのが自然であります。勿論、それをカムフラーヂし是正し補償す

るさまざまの要素があつて、男女親子の心理關係を極めて複雜微妙なものにしてをりますが、大體に於いて異性親子間には本然の牽引關係があると云ふことを覺悟してゐることに依り、夫婦間の無用の葛藤を防止し回避することが出來るのであります。また兩親間の葛藤ばかり、子供の心理に惡い感化を及ぼすものはありません。何となれば僻みの強い夫又は妻が、自分よりも相手の方に娘又は息子の愛情が偏在してゐることを見たとき、到底平靜であり得るわけはないからであります。いろいろその子供に對して盡された自分の過去の好意や恩惠が想起せられて、その子の親不孝を難詰する氣持が勃然として起きて來ます。その場合の憤りの中には良心や道德の背景が裏付けられてをりますので、その攻擊は非常に猛烈となり易く、たゞ動物的な無邪氣な本能に依つて異性親に執着してゐる子供としては非常に面喰ひ却つて益々その同性親への好意を喪失するやうになるのであります。

子供としては兩親の愛情が全的に自分に注がれ、それに信賴することが出來る限りに於いて極めて幸福なのでありますが、自分の對同性親の所謂エディポス的反撥が如何に同性親を苦めてゐるかなどゝ云ふことには全く氣がつかない、蟲のいゝものであります。親はその點を大目に見ておかないと、育兒を誤り、自分等夫婦の生活をまでも不幸に陷れるのであります。分析者が患者の轉嫁（愛情的轉嫁にせよ、憎惡的轉嫁にせよ）に對して逆轉嫁を起してはならないやうに、親も子の轉嫁に對して逆轉嫁を起してはなりません。その愛情はもつと大きく深いものでなければなりません。併し子の愛憎の前にたじろがないと云ふことは、親として如何に骨の折れる事かと云ふことは、私にも重々同情のないことではないのですが……。

九、愛撫と叱責

幼少年時代の養育が母の主任に屬し、靑少年時代の敎育が父の主任に屬すると大體に於いて云ひ得るやうに、全體の時期を通じて愛撫することは母の主任に屬し叱責することは父の主任に屬さねばならないと云へませう。と云つたからとて、幼少時代には甘やかしてさへをればよいし、靑年時代以後は叱つてばかりをればよいと云ふわけでないことは今更申すまでもありません。併し如何なる時代に於いても愛撫の中に毅然たるものがあり、叱責の中に溫情が含まれてゐなければならないのであります。それは父又は母の態度の中に混融することも必要ですが、それぞれ分業的にしてもよいと思ひます。昔から嚴父慈母と申しまして、父は嚴しく、母は優しいと云ふのが通り相場になつてをり、またその相場はいつまでも殘しておくべきものと考へます。併し母が毅然として叱つてゐる場合には、父親は適宜に溫和な態度に出てやらなければ子は逃げ道はなくなります。併

しその際、注意すべきは子の前に兩親の意見が衝突して、夫婦喧嘩を始めたりすることであります。兩親の意見はなるべく、子の前で一致してゐるところを見せておかなければなりません。異見があれば、夫婦二人きりの時に談合しなければなりません。兩親の意見の相反不一致は子の兩親に對する輕侮の原因となり、ひいてはまた子の人格形成の障碍となります。

世には叱責と云ふことに絶對に反對する教育家がゐます。叱りさへしなければ子供はよくなると主張します。併し叱らないと云ふことは甘やかすと云ふことゝは同義語ではないとも辯解せられます。併し甘やかすのでなければ、やはり叱責には相違ありますまい。よしんば如何に聲をあらゝげたり、腕をふり上げたりするものでないにもせよ。恐い顏をして睨みつけてもそれは叱ることに外なりません。またヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』の中で、ミリエル僧正が自分の銀の燭臺を盜んで捕はれてたジャンバルジャンに對して憤らず、「それは友に與へたのだ」と答へて、警察官の手からジャンバルジャンを釋放した事もまたこれ一種の叱責でなくて何であらう。何となれば彼はこの經驗に依つて彼の良心を確立したのだから……。實はこのやうな行爲に依つて、愛撫と叱責とは一つに合する。それは旣になま〱しい愛撫ではないと共に、またなま〱しい叱責でもない。併しそれは他人と他人との間の事だからとそれでよいが、眞の親子の間に於いてはなま〱しい愛撫が必要であると共に、なま〱しい叱責が必要だと私は主張するものであります。不得要領で煮えきらぬ愛情や叱責が如何に親子の間の感情關係を空々しいものにするかは常識ある人々の容易に想像し得るところでせう。親子の間に於いては愛撫も叱責も痛切で鮮明でなくてはなりません。愛撫は陽春の花の如く、叱責は秋霜烈日の如くでなければなりません。この相互に反する二種類の糧を喰ふことに依り、子供の精神は健全に發育するのだと私は主張したいのであります。

叱るには恐ろしい顏をして睨みつけたり詢々と說いたりすることがその方法であるばかりでなく、怒鳴りつけたり腕力を振廻したりすることも必要であります。無暗に腕力を振廻し過ぎることの弊害もさることながら、絶對に腕力をふり振さないことの弊害は一層甚だしいものがあると私は信じてゐます。何となれば、私は多くの患者を扱つて見て、そのやうにして不得要領に甘やかされて來た男兒（女兒の事はこの場合別問題としておきます）が如何に性格の軟弱な青年となつてゐるかを具さに見てゐるからであります。腕力は男性の象徵でありますから、これの威力を經驗させることは男兒の男性的氣魄を誘發するに却つて不可缺の條件であると私は信じてゐるのであります。無論、無暗に毆ることを讃美するものではありませんが、良心と名譽の名に於いてさへも實力を發動させないことは絶對に弊害があります。それには理論的の根據があります。

十、攻撃欲の發動と純化

併しながら理論的根據をこゝで詳細に論證することはこの講話の目的に協ひません。理論的根據を知りたい方は私の他の論文や著書を參照して下さい。こゝではたゞざつとかう云ふだけに止めておきませう。人間に生の本能と死の本能とがあり、死の本能は生の本能と合體することに依り男性に於いては現實感覺化して攻擊慾となり、女子に於いてはリビドー（愛慾）化して誘惑願望（墮落願望）となります。攻擊慾はこれに攻擊を加へることに依つて誘發されて攻擊慾として現れ出て來るのであつて、これに攻擊を加へなかつたならば、リビドー化して女性的な誘惑願望となり、彼の性格を男性的でなくしてしまひます。私は性格軟弱を愬え來る多くの青年を分析的に扱つて見て、私のこの理論の正しいことを確信してゐます。性格の軟弱に惱む青年の或るものは末つ子として甘やかされた者でした。或るものは、早く父親に死に別れ、無氣力な併し生活には困らないキリスト教徒の家で、少しも叱られることなく育つたものでした。或るものは後妻の子として先妻の子や實父に對して遠慮しなければならず、從つて父や兄の方からも眞身になつてぶつつかることに差控へを感じ相互に一種の精神的隔てを置いて育つて來た者でした。或る者は父親が第二夫人を有し、そのひけ目のために子から批難せられることを恐れて、よそ〳〵しい威嚴を作つて（勿論眞身になつて怒ることなどなく）育つた者でした。

このやうな事情の下に於いては、男兒の攻擊慾は健全に伸長せられる機會がありません。攻擊慾はこれに攻擊を加へることによつて甫めて引出されものであることは、丁度ポンプ井戸の水がこれにさし水することによつて吸上げることが出來るのと同じであります。男兒の攻擊慾が最初に勃發するのは七、八歲の頃であります。それ故に、俗諺にも「七つ八つは憎まれざかり」と申しまして、丁度この頃を學齡と定めたのは偶然でありません。それ故この時期には相當に毆りつけたり怒鳴りつけたりすることが必要であります。さうされることに依つて、男兒の攻擊慾（素朴粗野な男性的氣魄）は伸長して來ます。それをしないと攻擊慾は內攻して女性（マゾヒスムス）化します。あまり毆つたり怒鳴つたりしないといら立つて來ていよ〳〵惡戯が昂じて來ます。それでも親がまだ叱らないと、如何にも愛想をつかしたかのやうに、輕蔑的な態度をとるか、或はひねくれて冷やかな子供らしくない子供が出來上つてしまひます。

次に、攻擊慾の出るのは思春期であります。この時期には併し、男兒の攻擊慾はずつと昇華せられて知識的なものとなつてゐます。それ故にこの頃には無暗に屁理屈を並べたり、惡口を云つたり、批評的になつたり、權威に反抗したり、或は哲學的

になつたりするやうになります。これみな攻撃慾が心理的な形態に變化したものに外なりません。

第三に、男兒攻撃慾の顯著に勃發するのは四十歳前後でありまして、この頃には青年時代に出來上つた病的に高い超自我は漸次に崩壞して漸く現實的に低調となり、變態的に鋭くなつてゐた知性や批評力は少しく鈍つて俗化し、いゝ意味でも現實的となり、自我中心の無遠慮な行動が出來るやうになりますので、「四十男は惡漢なり」と云ふ言葉が昔から存在するのでありませう。併し必ずしも惡いことをすると限つたものでは決してなく、最も健全に現實的に攻撃慾を昇華發動することが出來るのであります。併しさう云ふ事が出來るやうになるためには幼兒期（第一期）に於ける勃發當時に攻撃を加へこれを十分健康的に發動させておかなければならないのであります。その事を私は嘗て、「父親は男兒の最初の敵になつてやらなければならない」と云ふ風に表現したことがありましたが、或る人はその言葉尻を捕へて、（言葉の象徴性や寓意性を理解し得ずして）親子の間で敵になるとは何事ぞやと云ひ、他人との間でならば、例へば渡邊華山が少時に或る大名の行列の前を誤つて横切つて前驅の男に散々に打擲せられて、それ以後發憤して偉くなつたと云ふこともあるが、親子の間でそんなに敵對關係にならなければならないとはあまりになさけない教育法だと云ふやうな奇妙な批評を下してゐましたが、私は今こゝでそのやうな種類の批評に答へる必要を認めません。認めるのはたゞ子供を堂々として叱り得るにはそれだけの資格を父親として具へてゐなければならないが、その事の如何にむつかしいかと云ふこと、從つてそのやうな資格を具へてゐないならば、或は具へようとしないならば、寧ろ叱らぬ教育を提唱する方が遙に無難であると云ふことであります。實際、世の大部分の父親は子を叱る資格はありません。叱る資格のないものが子を叱つても、私の云ふやうな效果は擧りません。寧ろたゞ醫し難い憎惡と反感とが子の胸に鬱積するだけであります。かくては攻撃慾の昇華と云ふやうなことは望めません。それ故に、さう云ふ無資格な父親に對しては、私は寧ろ叱らぬ教育をすゝめます。併しその事はその種の父親をも含めて日本男兒一般に對する無上の侮辱ではないでせうか。それ故に、私は自分にさう云ふ資格の十分でないことを慶れつゝも叱ることの必要を高唱する所以でもあります。少くともその事は日本男兒を侮辱する所以にだけはならないのであります。

十一、叱る資格の問題

日本語には「睨みが利く」と云ふ俗語がありまして、これは別に叱らなくてもたゞ睨んだゞけで叱責に相當又はそれ以上の效果のあることを云ふのでありますが、人間も睨みが利くやうになれば、人格は確立したものと云はなければなりません。そ

の事は心理學的にはどう云ふことなのでせうか。その人が相手の超自我（良心的なもの）となり得ると云ふことであります。ところで、超自我と云ふものは、精神分析學の研究に依りますと、攻撃慾の昇華せられたものでありますから、このやうな形式の攻撃を受け入れることに依つて、相手の超自我も漸次に確立して行くやうになるのだと考へなければなりません。このやうに相手の超自我になり得るやうな人は睨んでも毆つても、その場合その機會にそれが適切な處置でさへあり得るならば、必ず相手の男性的氣魄に好い影響を與へずば已まないのです。その時相手は原則としては（卽ち多少の例外を容認すれば）反抗したり、憤激したり、ひねくれたりはしないものであります。もし正當な理由で、正當な機會に、正當な方法で叱つて見て、それで相手の反應が惡かつたならば、それは自分が相手の超自我にはなつてゐないと云ふことを意味するのであります。この事を從來の習俗は「不德の致すところ」と言葉で表現してゐます。このやうに自分の正當な叱責が正當な反應を相手に起さなくなつたならば、自分にはもう相手を叱る資格がないのだと云ふことを卒直に承認して、もう叱責はやめなければなりません。それでもなほ叱責を續けてゐたならば、愈々反應は面白くなくなることは申すまでもありませぬ。自ら省みて更めて德を積むことに努力するか、或は卒直に相手に謝つて、誰か別に相手の者の超自我となり得るやうな人を求めて、全權をその人に委讓するやうにしなければなりません。この時、自分が父親の資格のないことに就いて子供に陳謝することが、相當によい結果を相手に與へるに相違ありません。

女は大體に於いて男に比して叱る資格に乏しいものでありますが、さうしてまた女が人を叱つてゐるのを見るのはあまり適切な風景でもないし、彼女等自身も好みませんが、彼女等には泣いてたしなめると云ふ一手があります。泣かれることは子供には確に大きな打擊でありますが、この方法は男兒に向つてあまり用ゐてはなりません。罪障感を深くし、超自我が病的になつて男性的氣魄は却つて阻碍せられませう。叱らぬ敎育主義がこのやうな泣落し主義や甘やかし主義に大部分の母親たちを驅り立てることは非常にあり得べきことでありますから、特に叱らぬ敎育とか叱る敎育とか云ふ形式的名稱は立てない方が却つて弊害がないと私は主張したいのです。私は叱る必要は主張するが、叱る敎育と云ふやうなスローガンは特に揭げたことはありません。

叱る效果の男女別に就いては、男兒は正當に叱られて攻擊慾が發動し、昇華し、女兒は正當に叱られて從順となり、女らしい魅力を生ずるやうになります。正當にも不正當にも絕對に叱らぬ場合には、男兒は女性的となり女兒は反對に男性化し、*所謂じやじや馬になります。それはシェイクスピアの『じやじや馬馴らし』に就いて私が嘗て分析解釋した通りであります。*

註＊拙著『社會生活法』卷末附錄參照。

正當に叱る不正當に叱るの別に就いては一言云ひ添へておかなければならないでせうが、それは常識的に云へば、親の氣まぐれやその時その時のお天氣次第で叱つたりしてはならないと云ふことであります。實際、子供は弱いものでありますから、屢々八つ當り式に、他で爆發させることの出來ない憤りを子供に向つて爆發させるやうなことがよくあるものです。さう云ふことはあまりに慘酷ではないでせうか。子供と雖も成人が想像する以上に是非曲直の本能的判斷力はあるものでありまして、たゞ彼等には知力がまだ十分に發達してゐませんから、それを理論づけたり體系づけたり批判したり表現したりすることが出來ないだけであります。それ故に十分に分析せられた人（人格確立した人）が正當な理由に依つて加へる懲罰や叱責は、時に子供等に淸々しい思ひをさせ、又時には反抗しつゝも叱責者を尊敬することがあるものであります。さうしてこのやうな淸々しい思ひや健康な反抗やセンチメンタルならぬ尊敬に依つて所謂エディポス・コムプレクスは崩壞して男性的氣魄は長養せられて行くのであります。

十二、性教育の方法

今まで述べて來た叱り方の問題も或る意味では旣に性敎育の問題の內に入ります。何となれば、それは效果的に行はれゝば男らしい男、女らしい女を作ることに外ならぬからであります。性の機能を撥無して男らしい男も女らしい女もあつたものではありますまい。叱る叱らぬの問題ばかりでなく、抱いたり擁へたりすることも、吸ひつくことも、愛撫することも、毆ることも、怒鳴りつけることも、微笑みかけることも、みな直接間接には性敎育としての意味を帶びないことはないのであります。そのわけを一々說明することは理論的な話に亙りますから控へておきます。たゞ直接知識的な問題として性に關する興味が幼少兒に起きて來た場合にはどうするかと云ふことは別問題になつて來ます。

それに就いては嘗て（昭和十五年四月）『ホームグラフ』と云ふ雜誌に村岡花子女史が割合に適切な說を述べてゐましたから、それをこゝに紹介して私見を付加へて見ませう。

「幼い女の子を見て居りまして感じますことは、七つ八つくらゐになつて來た時に、何となく氣むつかしくなります。學校へ行きはじめて疲勞が加はるのも理由でせうが、健康狀態も不同になりますし、一口に云へば、氣嫌がとりにくゝなるのです。私はこの狀態を見ながら、今まで考へなかつたことに氣が付きました。つまり幼年期に於てのこの年頃には、女の子の十七、

八の年頃に見る心理的變化に幾分似たものがあるのではないかといふことなのです。友だちとの關係でも折々すねて見たり、又妬みをも見せますし、母親に對しても、わざと反抗するやうな樣子も折々は眼につきますし、何やかやと複雜多面な心のうごきをあらはして來る。七、八歲の子供たちもまた、或る一つの時期を劃してゐるのだ。それはちやうど少女から娘になつて行く時の心や肉體の變化と幾分相通ずるものだと考へますと、この時分の幼兒の指導が如何に大切かと云ふことに新しく眼が醒めて來るのです。」

少女の七、八歲頃と、思春期頃との間に一種の共通點を發見してゐることに流石に鋭い感覺であります。その共通點がどのやうな性質のものであるかと云ふことに就いては女史は全然言及してゐません。併しそのやうに不機嫌になつたり、すねたり反抗したりするところを見ますと、女兒にとつて都合のよくないことの發見、又は意識に原因してゐることは疑ふ餘地がないやうです。丁度、この年頃に男兒の方は「憎まれ盛り」になるところを見ますと、この男兒に都合のよい事を發見して得意になつて攻勢的に出るやうになつてゐるものと見なければなりません。卽ち一口で云ふと男女兒ともに自分等の性別を判然と意識(これまでとても漠然とは意識したのですが)するやうになつたことを意味すると考へられます。男女性別を意識すると共に、その相違の意義及び價値、子供の出產の方法や經過を想像すると云ふことでありませう。そこで同じ村岡女史が述べてゐるやうに、「お母ちやん、赤ちやんを生んで頂戴」とか「どうして赤ちやんを生まないの?」とか云ふ質問や要求が母親に提出せられますが、それは文字通りに聽くべきではなく、如何にして私は生れて來たか、如何にして私にも赤ちやんが生れるやうになるであらうかと云ふやうな、恐怖的な疑問を遠廻しに提示して見たと解しなければならない場合が多いと思ひます。現にさう云ふ要求に對してゐらりくらりと受答へしてゐる內に、常に論點は移動して出生方法の問題に進展して行くからでありますゝ現に村岡女史の場合もさうであるらしく、これを機會として性の知識を授けることへと話は進んでゐるのであります。「西洋などにはこの問題を子供に分り易く說明した書物が澤山あります。性敎育の方法に關する親の參考書ではなくして子供自身が讀むやうに子供に語りかけてゐるものなのです。平易に書いてあるが、實に明らかに書いてあつて、これを讀む子供は生命に關する知識は全部知ることが出來るのです。然し、私はこの方法には贊成出來ません。各人各樣の立場の相違ですから、これをいゝと主張する人々もたくさんありますが、さう云ふ純粹な科學的な敎育方針にも長所はありませう。然し私は母の立場からさうした指導はあまりに過激なもので、急進的に過ぎると思ふのです。」

私も大體に於いてこの意見には同感である。たとへ感覺や實行でなく知識だけにせよ、あまり早く注入することは考へもの

と思ひます。つまり性の問題に關しては、總て早熟の弊は遲れ過ぎてゐる事の弊以上に大きいと私は考へます。併し心身の發達に不相應に知識を遲らせ殊にその遲らせることに道徳的の抑壓感情を以てする事は、その感情の力が弱まつた時に（それは必ず來るのです）反動的になつて極端に走る弊があります。

「さりとてコウノトリが赤ちやんを連れて來たなどと云ふのに類した、甘い胡麻化しをも採りません。」と村岡女史は云ひます。日本では橋の下で拾つて來たとよく云ひます。併しコウノトリは男性の象徴であり、それが飛込んで來る窓とは女性の象徴であるから、この「胡麻化し」も全然出鱈目とは云へません。それは丁度、橋の下*で拾つたと云ふ表現が同じく象徴であつて、全然無意味でないのと一般であります。

註* 拙著『精神分析讀本』巻頭「橋畔女怪考」參照。

「私自身としては、この質問の中心をわざと外らして、別の方に中心を作つた答へかたをしてゐます。卽ち、母と子との切つても切れない共同の生活は、子供がこの世の光に接しない以前から始まつてゐた。といふことを話して、母の愛情は如何に、自分の胎内に宿つてゐた幼い生命を深く包んでゐたかといふことを強く印象させるやうな話しかたで、自然に赤ちやんは母さんのおなかにゐたと云ふことをのみこませてしまひ、その期間如何にお父さまか赤ちやんの事を心配して母親をいたはつたかといふやうなことを愉しい物語として話してゐる間に父と母とに依つて生れる子供といふ觀念でふつくら子供を包んでしまふと云つたやうな、幾分ロマンチック（とでも云ひませうか）な指導法を取つて居ります。」と。

このやうなロマンチックな方法も結構だが、それで子供が滿足してゐる内はよいが、滿足しなくなつたらどうするか。やはり非ロマンチックな（科學的）なことも云はねばなりますまい。それには母親も父親も赤面しなければならないやうな點にも觸れなければならないやうな場合もあらう。さう云ふ赤面的立場を廻避するためには、「もう少しお前が大きくなつて分るやうになつたら話すから、今は云へない」とはつきり斷つたらよからうと思ひます。かう云ふ問題は子供自身にとつても自然のタブーであるから、普通にはさう執拗に追及はして來ないものです。要するに嘘を云つて子供の信用を失はない限りに於いて併しデリカシイを損はない限りに於いて、早熟の弊を齎らさない限りに於いて、出來るだけ科學的な知識を與へるやうにすべきであると私は考へてゐるのであります。

十三、結　語

以上、精神分析學から育兒心得としての大要を説いて來ましたが、併しまだ云ふべきことで論及しなかつた點も澤山に殘つてゐます。とは云へ、最も重要な點だけは洩らさなかつたやうに思ひます。

なほも一つ斷つておかねばならないことは、右は精神分析學からの講話であつて醫學や生理學からの講話ではないのですから、さう云ふ方面の事には全然觸れてをりません。さう云ふ方面の事の缺はさう云ふ方面の人の説を參考して頂かなければなりません。さうしてさう云ふ參考書は今では隨分澤山、世間に流布してゐることは御存知の通りであります。右に擧げた木下正中、瀨川昌世兩氏著の如きものは適當なもの丶一つとして推薦いたしておきます。(完)

一人つ子 (The Only Child- A. A. Brill)

平野直人譯

小序——原著者ブリルは米國分析學界の長老であるが、本論文は一九二一年に公刊せられた『精神分析學の基礎概念』と題する書の第十一章を全譯したものである。私自身も一人つ子であるので、特別の興味を以てこのよい論文を譯して見た。始めての譯文、大槻先生の加筆を謝する。(譯者)

一、一人つ子と神經症

大抵の異常者と所謂正常者との間の差は實際はたゞ程度の差に過ぎないと云ふこと、而もその差は環境の事情で測定出來ると云ふことは、先天的な素質は別問題としてその環境のみが當該個人の上に一定の影響を及ぼしてゐる場合には、直ちに明示することが出來るのである。この事は特殊な環境の下に育てられた人々に於いては直ちに見られるのである。と云ふのは、一人つ子の事である。一人つ子は世間に對して特殊な反應の仕方をする。その仕方は、云はゞ大勢の兄弟姉妹を持つてゐる彼の從兄弟とはあらゆる點で違つてゐる。我々はまた、長男長女はあらゆるやり方に於いて末つ子と違つてゐることを知る。

長男が他の兄弟と違ふそのわけは、その境環に於ける彼の位置が或る性格的特徴を發展させるやうになる筈のものだからである。例へば、彼は他の兄弟よりは攻擊的である。何となれば、本來彼は家庭內に於いて一人つ子であつたのに、その時よしんばたつた一つ違ひにせよ、弟妹が生れて來て、それに對して彼は優越者である、膽力や知力に於いて優越者である。併しながらその差は一年の差以上のものである。それのみならず、兩親は不斷に、弟妹の世話をせよと兄に命ずる。その結果は漸次時の進むまゝに、長男は家族の指導者の風格を帶びるやうになり、從つて父が亡くなつた後には彼は實際上家長となるのである。この點に於いて長男嫡子制の發展の契機を見ることが出來るのである。卽ち、父が死ぬと、その長男は自分の家庭內の家

族權に於ける位置に依つて、他の者よりも支配者として適當してゐることを示すやうになるのである。

同じことは「一人つ子」又は「寵兒」に就いても云へることで、彼もまた家庭内に於いて特殊の位置を占めてゐるのである。親にその氣があるかないかは別問題として、とにかく一人つ子は甘やかされ臺なしにされて了ふのである。人間と云ふものは愛し合つてゐる相手をとかく買被るもので、男にとつては愛する女は世界中で最も魅惑的な存在であり、女にとつてはその愛人は地上最大の偉人である。ところが、さて結婚して見ると、いろいろ幻滅的なことが出て來る。最も魅惑的であつた女はとかく女にあり勝ちなあらゆる弱點と缺陷とを具へた只の女に過ぎなくなる。最大の偉人は平凡人となつてしまふ。併し、初めての子が生れるとそれが補償となつて、不滿の隙を埋めてくれ、それが夫婦間の共通の興味となる。その男にとつては、やがて娘が補償となり、女に最初會つた時に見出した色々の理想（然しながら暫時の間一緒に親しく暮してゐる内になくなつてしまつたと思はれる理想）をこの娘に於いて實現しようと試るのである。今や小さい娘はこの家庭に於いて特殊の位置を占めるやうになる。父親はその女兒に特別の興味を持ち、而も父親の愛情を傾け前すべき兄弟姉妹がない場合に、その結果としてその子はすつかり甘つたれ子になつてしまふ。自然の狀態に於いては、雄の動物はその仔に何らの興味を持たないやうである。仔が自分で食物を漁ることが出來るほど一人立ちするやうになると、もう放任してしまふ。人類に於いてはさうでない。結婚制度のために親子一緒に暮すべき義務が課せられる。何らかの補償は必然であつて、一人しか子供のない場合には兩親は共に相手に期待して幻滅した情緒上の空隙を滿たすためにその子に向ふやうになるのである。

一人つ子の發達に於ける今一つの問題的要素は、家の中に喧嘩相手のないことである。三、四、五人もゐるのが普通だが、さう云ふ家庭では不斷に葛藤がある。彼等は互に喧嘩して生存競爭に適合するやうになるのである。然し家庭の中に守られ、誰もその意志に逆うものもなく、それどころかその子の意志は滿たされ、後生大事に保護され、家庭の中に見られる總てのもの丶主人であるところの小さい子供が、五、六歲に達して世間に出て行く時の哀れな有樣を考へて御覽なさい。可哀さうに彼は全然無力である。彼は如何に働きかけるべきかを知らない、何人をも信賴せず、何人とも圓滑に交際出來ない。

一人つ子が持つ最も不利な點の一つは、母親に對する異常な執着である。分析學の用語で云へば、母のイマゴー（面影）に對する定着である。前にも述べた通り、總ての親はその面影を子供の上に殘すものである。子供の愛の最初の衝動は常に親に向けられる。つまり、小さい男兒の最初の愛人は常に彼自身の母である。彼女の面影は男兒の心の上に一定の印象を與へ、從つてその後も永くこの面影に依つて導かれる。同じ關係は娘と父との間にも存する。思春前期の年齡に於いては、正常の子供

等はその兩親から離脱しようとする。小さい男兒はもう母親に抱かれたり接吻されたりすることを好まない。そんなことは不正で、甚だ男らしからぬことだと感ずる。彼は他の女を求めてそれに戀愛する。男兒の生涯を歴史的に見ると、八、九、又は十歳頃に彼等は狂熱的に戀愛してゐる。併し、一人つ子は常にそのリビドー（愛慾）を母から離反することを知らず、母性愛で守り立てられてゐる。彼はその選擇に於いて不斷に導かれてはゐるが、正常の子供は母の面影から自分を引離す。然し一人つ子はその母親の面影を長く強く受け入れてゐるので、母の面影が固着し、後年に至るまでそれによつて導かれ、母か又は母に似た人でなければ信賴出來ないやうになる。男兒が始めて母の代償として選ぶ女は、宛も母くらゐの年齢の女であると云ふことは注意すべきことである。彼が若い女に興味を感ずるやうになるのは、自らやゝ年長になつてからである。若い男ほど年長の女に魅力を感ずると云ふのは普通に觀察せられることである。然し一人つ子が第二の少年時代に入ると、やり方は甚だ違つてゐる。

その時、別の途が續つて來るやうに思へる。男が年とればとるほど若い女に牽引を感ずるやうになる。年齢が進むに從つて多少とも幼年期への退行が生ずるやうに思へる。それ故に、老人で若い娘を漁つてゐる者を見るのは稀でない。我々はこの條件をその異常な形で老耗性痴呆症に於いて見る。老耗性痴呆症者は精神上の耄碌のために若い女に實際戯れるやうになるのである。正常の場合には、男は若い女に對してはたゞ父親的な親切の興味を寄せるだけである。

早期の愛着を母から他の女に移すに當り、子供は屢々親の心配の種となるのである。多くの母親は時として、その息子が自分から明かに離れて行くことを知つて、神經的な破綻に陷るのである。息子が後年遂に配偶者を選ぶ時に、或る母達が如何に苦悶するかは想像も及ばぬほどである。彼女等にとつてはどの娘もこの娘も氣にくはぬのである。嫁姑問題の起きる契機はこに存するのである。この狀態は到る處に、野蠻人の間に於いてさへ見られる。で、姑がその息子を愛するのあまり如何なる女にも息子を奪はれるのを好まず、またどんな娘も息子の嫁に慣せぬと考へることも、或は娘の生活を通じて生き、娘に同一化し、從つて娘の愛人に戀慕するやうになり勝ちであると云ふやうなことは、右の事實に職由するのである。このやうにして娘が實際に嫉妬することがあるのである。私の扱つた婦人患者の內には自分の經驗でさう云ふことがあると云つたものが多かつた。時々新聞には、娘に求愛して母親と結婚したと云ふ男の話が出てゐる。また、その反對の場合も見られる。が本質的には同じ型に屬するので、その戀愛の影響力を一方から他方に移すことは極めて容易である。

一人つ子は自發的に何かをすることは殆ど出來ない。意識的にか無意識的にか大抵は母の影響に依屬してゐるのである。私

は嘗て支配的な母に育てられた或る末つ子を扱つたことがあるが、末つ子もやはり一人つ子と同じ問題の子である。殊に、三四歳も上の子と年齢に隔たりがある場合には……。その末つ子は母親なしには何事をもすることが出來なかつた。彼は職を求めてニウョークへ來たのだが、然しいろいろ素晴らしい機會が提供せられてゐたに拘らず、その位置に就く決心をすることが出來なかつた。彼は私のところへ來て、二人であれでもないこれでもないと相談した。私の見るところでは彼の不決斷は別に理由があるのではなく、たゞ内的に決定力がないためであつた。遂に私は、彼がこの傳でいつも母に「かうしなさい」と決定して貰つてゐたことを發見した。それ故に私も彼の母親の口調で、「私が決めてあげたらさうしなさい」と云つてやつたら、それで滿足して「先生、さうします」と答へるのであつた。

一人つ子は結婚することも稀である。結婚しても妻は嫉妬せられることは全然ない。兄弟が四、五人もゐる家庭では、母親は子供のいや募り行く情緒上の要求を滿してやることが出來ないから、子供は生長するにつれて、一人の女から他の女へと愛情を移し、かくて親の代償を先生に、乳母に、保姆にと求めて行くのである。彼は家庭の中へ新たに入つて來る者に片端から愛情を寄せる。併し一人つ子は家庭にあつて十分の愛情と注意とを受けてゐるので、他の者にリビドーを移すことを知らない。で、生長するにつれても彼のリビドーは親の上に定着してゐるのである。時々は自然の力が勃發し、力強いリビドーの泉が湧出して、他の女に牽きつけられ、時には結婚するやうになることもある。併し厄介なことが直ちに起る。一人つ子がさう云ふ場合に、結婚を解消するやうに何とか話してくれと私のところへ云ひに來ることが稀でないからである。そのやうな或る機會に於いて、或る男は私に精神病院へ送られねばならないのではなからうかと心配でならないと云ふのであつた。私は彼にそんなことはないと云つてやつたが、彼はなほも云ひ張るのであつた。「でも、先生、私は本當に苦しいのです」と。私はその娘との結婚はやめなさい、その女と結婚しても彼女を幸福にするとは限らぬと云つてやつた。然し掛りつけの醫師は私の言葉に驚き、母親は鄭重な言葉で私の事を惡漢だと云つた。かう云ふ次第で、哀れなその男は、屠所に牽かれる羊のやうに式に臨んだ。ところが、今や離縁話しが持上つてゐる。この失敗を結婚前に喰止めた方がどんなによかつたであらうか。さうすれば、面倒や厄介が起らずに濟んだであらうに。私はまた、この型の男が若い女ときめた約束を果す前に急にあらゆる種類のヒステリー的苦悶に捕はれるのを見た。彼等は行きたくないのだ。普通の正常の男ならば、出掛けて女に會ひ、トランプ遊びをしたり、ふざけたり、戀愛したり、結婚したりすることは好きである。然しかう云ふ型の男はあまりに弱いのである。かう云ふ男の或る者はかつて私に云つたことがある。一家にゐることがこんなによくなかつたら、私は多分結婚したであらう。然し實を云

ふと、私は結婚したくないのです」と。彼は一つ子型の人間で、母親が彼を掌中の玉のやうに可愛がつてゐるのだ。さう云ふ言葉でこの今では四十五歳になつてゐるこの「七呎男」の事をこの母は云ふのであつた。私が彼女の息子に結婚を薦めたと聞いた時に、彼女は非常に驚いて直ぐ私のところへ來て云つた。「伜は今では丈夫で健康であるが、今でも母親が世話をしてやらなければならないのです。何しろ子供の時分には病身で、いつも風邪をひいてゐたのですから」と。

一人つ子は大抵はその小さな世界の中に靜かに、幸福らしく生活し續けてゐるが、然し、母親が死ぬと共に參つてしまふ。私はさきに末つ子で寵兒であつた（一人つ子ではないが）男の場合を述べたが、實は一人つ子のやうなもので、他の兄弟との間には十年の隔りがあつたからだ。家族中で彼は「仔羊」と見なされてゐた。彼は成長して「いゝ」男になり、大學を出て法律家になつたが、一方彼の母親はどん／＼年をとつて行つた。母は六十七歳位になると、慢性の病人として家に引籠らねばならなかつた。或る日、彼は、街の事務所へ出かけて行き、終日そこに停つてゐ、夜は社交場に赴くのは間違つてゐると考へた。彼はもつと母と共にゐなくてはならないと考へた。彼は毎日一時間だけ早く歸らうと決心した。やがてそれを二時間に繰上げた。このやうにして彼は事務所を毎日少しづゝ早く退き、遂に辭職して終日家にゐるやうになつた。父親は八十歳位であつたが、この息子は父を恐ろしく憎んでゐた。彼は口癖のやうに云つてゐた。「親爺がする唯一の事は母をいぢめる事だ」と。遂に彼はクラブや乘馬隊にも關係を斷ち、終日家にゐて母の世話をすることにした。急に彼は髯を剃ることをやめ、家を出ることを好まなくなつた。彼は身なりをかまはなくなつた。母親も家族の他の者等もそれには反對した。これは只事でないと感じたのだ。然しこの若者は云つた、子たるものが母を終日家に放つておくと云ふのは無情だと。で、兄弟姉妹たちは母の側につき添つてゐようと云つた。が、彼はそれを拒絶した。妹には自分のするだけの母の世話はとても出來ないと感じてゐた。彼が好んで考へる希望は、父親が間もなく死んで、母と二人で暮らすと云ふことであつた。彼は母の室と父の室との中間の室に眠つてゐた。何となれば、永年の間、彼は父が夜中に這入り込んで來て母を邪魔するであらうと云ふことを虞れてゐたからだ。それほど彼は母の幸福に就いて氣を揉んでゐた。間もなく父親は死に、數日をおいて母も死んだ。母の死はこの息子にとつては非常な打撃であつた。彼は母の墓場に行き、終日そこを動かず、墓前で自殺しようとした。家へ歸つて來ると、何となく氣が咎めてならなかつた。母の生命を縮めたのでは自分のせいであるやうな氣がした。かうもすればよかつたか、あゝもすればよかつたかと、いろいろさう云ふ場合を數へ上げるのであつた。彼はまた父の死に就いても已れを批難し、あまり父を虐待したことを後悔するのであつた。一言で云ふと、彼は早發性痴呆症の症候を歷然と示して來たのだが、この症候は前から見

えてはゐたのだが、誰にも氣がつかなかつたのだ。たゞ皆は、彼の態度があまりに母孝行であり過ぎると考へてゐたゞけであつた。そのやうな場合は稀ではない。尤も皆が皆それほど極端ではないが……。

私が豫々非常に興味を持つて氣をつけてゐる事は、所謂堅い獨身者だちが何か重病の後に、或は腎臟病や盲腸炎の手術の後に、結婚するやうになると云ふことである。またそれに劣らず興味のあることは、母親に可愛がられて育つた男兒が結婚するのはその時の看護婦に外ならぬと云ふことである。敢て告白すれば、無意識の心理學を知る以前には、戀愛の神のこれ等の惡戲に少からず驚いてゐたのだが、然し今にして思へば、彼等は看護婦に於いて第二の母を發見したのだ。卽ち彼女等も母のやうに彼に倦まざる興味を寄せ、腸の手當をしたり、身の廻りの世話をしてくれたのであつた。勿論、彼等は自分の行爲を理窟付けし、それは自分として感謝の心持を表はすものであると云ふのであるが、然し、根本的にはこの行爲は母の影響への無意識思慕の反映としてより外には考へられないのである。

一人つ子は愛情を轉嫁することに極めて迅いが、然し轉嫁の具合が誠に惡いのである。彼は忽ち强い愛着を寄せるが、それと同樣にまた直ぐ强い嫌惡を寄せる。この形式の反應はもつと早期に於いてさへも觀察することが出來る。

二、一人つ子の長短兩面

以上のやうに述べては來たが、さりとて一人つ子は總て駄目だと云ふ推論を下すわけには行かない。もし正當に育て上げられるならば、彼は甚だ望ましい國民となり、また屢々指導者ともなり得るであらう。彼は多くの望ましい性質を持つてゐて、それ等の性質は、もしこれを正當の方向に用ゐたならば、人々の間で第一流の位置に置くであらう。吾人が長男嫡子制の發展に就いて述べたところは、共和國の大統領のやうな統治者にも適用せられるのであつて、大統領はその選出に就いては民衆に依存してをり、別言すれば、大統領はやはり長男又は寵兒としての息子に過ぎないのであるが、さうして民衆に選出せられるとは云へ、長男嫡子制を生んだ長男としての同じ特質を持つてゐるのである。これは事實が證明してゐる。現にウォシントンアダムズ、マディスン、ジャクスン、グラント、ヘイズ等は長男であつた。で米國のモンローー主義が彼の考へに出たのは意味深いことである。ファン・ビウレン・ビウカナン（而も彼は獨身者であつた！）並びにジョンソンがやはりさうであつた。リンカーンは次男であつたが、實際には一人息子であり、前のルーズヴェルトもやはり諸君御存知の如く、一人つ子であつた。ハリスン、タイラー、テイラー等は第三子であつたが、これ等の人々があまりぱつとしなかつ

たのは不思議でもないやうである。

一人つ子はその攻撃性のために、多くの方面に於いて顯著な役割を果してゐる。「廣告」と云ふ語の近代的意味に於ける最初の實行者が一人つ子であつたことは、注意に價する。彼の名はキゼラック（Kiselak）と云ひ、ヴィンで生れた。彼は商人になりたくなかつたので、文學者にならうとしたが、併しこの方面の仕事での所得は非常に少なかつたので、彼は親の遺産で生活するより外なかつた。或る夜彼は文藝家の仲間にゐた間に、二三の者は彼が文壇であまり成功せず名聲もないと云ふことに就いてからかつた。彼は非常に氣を悪くし、その場でその男と、十年以内に全歐洲に有名になると云ふことに就いて賭をした。有名になる方法に就いては何の斷りもなかつた。彼がこの意圖を實現するために歐洲中の旅に出かけたのは、廿八歳の時であつた。彼は最も簡單な身の廻り道具や行嚢、並びに赤と白のペンキの罐を携へ何處かの山へ着くと、最も目立つ場所に攀ぢ登つて、そこにふさはしいと思はれる白か赤の大字で自分の名を書きつけた。六年間彼はこれを續けたが、急に死んでしまつた。彼は遠近キゼラックの名は旅行者仲間に知れ渡つた。總ての人々はこのキゼラックなる人物は何者だらうと不思議に思つた。彼は遠近に喧傳せられるに至つた。これが一人つ子の特質である。彼は一旦決心したことをやり遂げずにはおかぬのである。

私は人生に於ける種々の活動を調査して、如何なる程度まで一人つ子又は長男たることがそれ等の活動に於いて働いてゐるかを見ようとした。偉大な宗教家の間では、孔子と使徒パオロとが長男であつた。佛陀は一人つ子であつた。グラームは長男であつた。ヰリアム・ペンは長男で母さん子であつた。コットン・マサーは十人の家族の中で長男であつた。マルチン・ルッターは一人つ子ではなかつたが、寵兒であつた。バニヤンは長男で寵兒であつた。聖フランシスは長男で母さん子であつた。學者の内では、ケプラーとガリレオとが長男であつた。教育家や教師の内では、ペスタロッチ、ベーコン、フレーベル及びエラスムスが末つ子であつた。ルソーは次男で末つ子であつた。併し彼の兄が子供の時分に家出して行衛不明になつてしまつたので、『エミール』の有名な著者は實際上一人つ子であつた。以上は極めて簡單な一通りの表であつて、たゞ示唆を與へるためのものに過ぎない。

世界の最大の教育家たちが家族中の末子であつたと云ふのは、どう云ふわけかと不思議に思ふ人々もあらう。末子も亦家庭内に於ける特殊な位置を占めるものだと云ふことを忘れてはならない。長男長女は弟妹等を教導する最初の者であるから、彼等はその環境からして人を教へるに適したものとなる。最年少兒は兄姉等から父さん風、母さん風を始終吹かされる。その缺點を反覆指摘されるので、もし彼等の内に何かの力や價値が潜んでゐるならば、自分も兄姉等に負けないやうに教師になつて

見せるやうになるであらう。もし彼等が正常の人材で、家庭内の他の者等に完全に壓服せられてしまはないならば、彼等自ら指導者となり、さうして不思議に人を敎へるやうになるのである。

一人つ子の多少とも特質的な早期の發達、その親子關係、家庭内に於ける彼の位置、彼の後年の諸問題並びに葛藤などに就いての一般的觀念を與へるならば、或る夢を紹介してそれに對する患者の分析的な話を添へるに超したことはない。その患者は一人つ子で、病名は混合神經症と私は診斷したのである。彼は一人で外出が出來ず、地下鐵に乘ることや橋を渡ることも出來なかつた。彼はまた强迫神經症型の强迫觀念を持つてゐた。なほ云ひ添へておかなければならないことは、彼は結婚してゐて、それも外出などが恐ろしくて妻を貰へば守護して貰へると云ふので結婚したのであつた。彼はもし信頼の出來る女が發見出來なかつたら、一生獨身でゐたであらう。彼の夢は次のやうであつた。

「私は自分の住んでゐるアパートへの道を歩いてゐた。その時、空は暗くなつた。暴風雨が近づきつゝあつた。邊りに雷鳴電光があつた。人々はみな立つて、西方を眺めてゐた。この特別の暴風雨はその方から來るらしかつた。漸次に風雨は始まつて來た。その時、私は――街のあたりにゐた。その時、私は母のアパートへ行つた方がよからうと云ふ考へが起きた。私はその家へ行つた。然し這入らないことに決めた。それから私は這入りたいと思つた。そのやうにして私は煩悶して遂に私は這入らなかつた。」

この夢の中には參考になることがあつて、それを分析して見ると次のことが明かになつた。――「私は六、七歲まで母と共に寢た。それから私は父と共に十二歲まで寢た。」この型の患者に於いては、子供は相當後年まで親と共に寢てゐると云ふことは注意すべきである。一般の家庭に於いてはかう云ふ習慣のないのは喜ばしいことだ。六、七歲にもなつてまだ親と一緒に寢てゐるやうな子供はない。然し一人つ子の場合にはあり勝ちである。そのやうな習慣は子供の正常な性的發展に對して有害である。子供の情緖の正常な發展に惡い影響がある。親と一緒に寢ると、どうしてもあちこち接觸があつて、彼の情緖は異常な刺戟を受ける。もし我々が野蠻人ならば、親子同衾で寢るのも弊害はないであらう。何となれば、成熟した時には野蠻人として活動するのだからだ。併し文明人は成熟した時には別の活動をするのだ。換言すれば、人はあらゆる種類の性的行爲に耽るに十分な年齡に達してゐるのであらう。然し或る年齡に達するまではさう云ふことをすることは許されないし、或はするとも想像されてゐた。

患者がそれから續けて供述したところに依ると、彼は五、六歲の男兒の時にその母と祖母とに對して如何にも異常に執着してゐた。「母の語に依ると、私が六歲の時、學校に行くのに、母がついて行かなければならず、數日間跟いて行つて、それから

やつと一人で學校に停つてゐることが出來るやうになつた。私は泣き喚いて騒ぎを起した。」

小さい時分にはどう云ふ遊びが好きであつたかと問ふて見たに對し、彼は七、八歳頃まで人形が好きであつたと述べた。彼は特に或る大きな人形の事を覺えてゐて、それに彼は少女のやうな服を着せた。これは注意すべきことである。何となれば、多くの女性的な人間は幼少年時代に人形を持遊ぶと云ふのが周知の事だからである。人形を持遊ぶことは本質的に女性的な遊戯である。私は多年この問題を研究して來て、何故に少女が人形を好むかと云ふに、それは子供を持ちたいと云ふ女性的な本能に訴へるものがあるからであると感ずる。ヴィクトル・ユーゴーがいみぢくも云つてゐるやうに「女の最後の人形はその最初の子供である。」健康な男兒は人形遊びなどはしようとは云ふまい。正常の男兒はどうしても攻撃的な型の遊戯の方に傾いて行く。これは當然である。實際、我々は男性的な氣魄を助長するやうな遊戯に耽らせるやうに常に男兒を奬勵して行かなければならない。他方また我々は、子供時分に人形を持遊んだが、それでも女性的にならないでしまつた男たちをも見るのである。然しながら、人形を持遊ぶことは何か他の方面に於いて有害な效果を示してゐる。と云ふと、私には思ひ出される或る患者があるが、彼は頑丈な大男で、一人つ子で、母と叔母とに依つて育てられたが、父親は彼の幼少時に亡くなつた。彼が魅力を感ずる女の唯一の型は金髪の女であつて、つまり人形型の女である。母親は金髪型ではないのである。然しながら、分析して見ると、彼は子供の時分にいつも人形を持遊び、或る大きな人形に特別の牽引を感じ、永い間それを抱いて寢て可愛がつてゐた。

以上、私はこの患者の場合を斷片的に報告したが、彼には神經症への傾向が始めからあつたことが諸君にも直ぐに分るであらう。それは先づ第一に彼が一人つ子であり、第二にその性生活があまりに早期に觸發せられたと云ふ二つの事實に依つて分るのである。彼は正常の子供が後年になつて抑壓するより以上に多くの抑壓をしなければならなかつた。既に述べた通り、リビドー!をあまりに多く抑壓しなければならない時にはそれは不安となつて顯現する。さうして彼の神經症の根柢にあるのはこの種の不安である。さきの夢の中で彼は連りに葛藤してゐるところを見てゐる。彼は實際は母の許へ歸りたいのだが、然し遂にさうしないことは決めてゐる。これは正に彼の生活に於ける問題である。幸にして彼はよい配偶を得た。然し彼の妻はいくら良いにしても、やはり母の代償として及びもつかぬ代償である。もし母が丈夫で彼の世話が出來るやうならば、彼はこの婦人と結婚しなかつたであらう。彼はこの衰弱した母親の代りに誰か別の女を求めねばならなかつた。實際、彼は自分の職業を放棄して母が死ぬまで側につき添つてゐるべきではないかといつも眞面目に考へてゐるのであつた。夢の中で彼は母の許へ歸

らないと云ふ彼の願望を充足してゐるのである。この夢はこの問題に就いて我等が分析談合した後に患者が見た夢であつて、その談合の結果として彼は益々自分の心理狀態に就いて反省を得るやうになつてゐたのである。

一人つ子の本能問題、母親への定着は、文學上でも取扱はれてゐる。只今私が倉卒の間に想起するのは、バーナード・ショーの『ピグマリオン』の中に於ける一寸した會話である。この作の中で作者は一人つ子の立場をなか〳〵よく描いてゐる。一人つ子のヒギンズ教授はその母と語り合つてゐる。

ヒギンズ。女の子を一人拾つて來ました。
母。と云ふのは、つまり何處かの女の子がお前を拾ひ上げたと云ふことなんだね。
ヒギンズ。いやそんなわけぢやないんですよ。戀愛沙汰なんかぢやないんですよ。
母。まア可哀さうに。
ヒギンズ。どうして？
母。お前は四十五歲以下の女とは決して戀愛しないのだね。もつと縹緻のよい若い女がいくらもあるつてことを、お前が知るのはいつの事かね？
ヒギンズ。若い女は面倒くさくつて。私の女性觀は、出來るだけお母さんのやうな人を捜すことなんです。或る種の習慣はあまりに深く泌み込んでゐて變へるわけに行きませんからね。

これは如何にも巧妙に問題の要領を摑んでゐる。正に型通りに描いてある。

三、豫防法一般

稿を終る前に、豫防法に就いて數言を費しておかう。勿論、個人としても民族としても、一人つ子が出來なくて濟むなら出來ない方がよい。然しながら、兩親の片方の病氣又は死に依つてこの事が不可避であるならば、子供は出來るだけ神經症にはならないやうに、或は上述のやうな症候を呈しないやうにしなければならない。それは總てその後の養育の方法如何にかゝつてゐる。

一人つ子の生涯の話を讀んで見ると、養育の方法よろしきを得なかつたものが、その後になつて異常兒になつてゐることを知るのである。甘やかされずに育てられたものは、他の子供等と同じやうになつて行くものである。昔の實例を擧げるならば

ネロと孔子とを見ることが出來る。ネロは甘やかされた一人つ子であつたが、孔子は養育よろしきを得た一人つ子であつた。一人つ子は他家の子供等と一緒に遊ばせるやうにするがよい。それ等の子供がその子に彼が世の中の一人つ子でないことを教へるやうになるであらう。これはなるべく早期に始めるがよい。私は多くの「神經質で我儘な」一人つ子が、幼稚園や公衆學校へ上るやうになつて數週間を經ずして變化したのを見てゐるのである。然しそれよりもまだ大切なことは、一人つ子を親たちが愛情で砂糖づけにしてはならないと云ふことである。親たちは、それ等の子供が自分と云ふものに就いてあまりに誇大な觀念を持たせないやうに、世界が自分を中心として動いてゐるやうな觀念を持たせないやうに注意せねばならない。何故ならば、そのやうな觀念を持つてゐる子供は必然的に世間の人と調和しないやうになるからである。

性心理に關する豫防と云ふ事になると、問題は一層錯雜して來る。で、殘念ながら私はこゝでさう云ふ問題に深入りすることは出來ない。たゞ私は、正當の性感統御は必ずしも一切の性的感情を抑壓したり押殺したりすることではなく、完全な男性及び女性の要件は一切の人間に正常に共通なるあらゆる衝動及び願望であるとのみ云つておく。

結論として私の云つておきたいことは、一人つ子は現代の社會經濟組織の病的所産であると云ふことである。彼等は大抵は富有な親たちの子であつて、その親たちは自分等が贅澤に育てられたものであるから、あまり大勢子供を生んだならばその子たちのために割込まれる心配があるので、一人か二人しか子を生まうとしないのである。[※]彼等の異常な愛情に依つて彼等はその子供を人生の戰ひに不適當ならしめるのみならず、正常な男性に發展させることをも妨げ、かくてあらゆる種類の性的到錯者及び神經症者を作り出すのである。（完）

註 ＊こゝの條はアメリカに適するほど日本には適しないやうである。（譯者）

兒童分析の準備（アンナ・フロイド）

——Die Einleitung der Kinderanalyse : Anna Freud——

馬場由子譯

序——この論文はアンナ・フロイド孃の『兒童分析入門』（一九二九年）の第一講を全譯したものであります。全體は四講から成立つたをり、ヴィン精神分析學會の講習會に於いて述べられたものであります。出來るだけ次の三講も譯して見たいと考へてゐます。（譯者）

×

皆様、どんな場合に兒童の分析を企てるのが適當と思ひ、どんな場合には斯の樣な計畫を思ひ止まつたほうが良いかといふ問題を若し豫め理解してゐないなら、兒童分析の技術に就いて何か申し述べるのは不可能に近いことであります。御承知のやうに、ベルリンのメラニエ・クライン（Melanie Klein）夫人はその著述と最近の總會講話で此の問題々詳しく研究されました。夫人は、子供の心的或は知的發達障碍のどれもが分析によつて除去され得る、少くとも好影響は及ぼされるといふ意見を持つて居られます。そればかりでなく、分析は正常兒の發達に對しても亦利益があり、時がたつうちには、あらゆる近代教育に缺くことの出來ない補足になるであらうと主張してゐられます。これに反して、昨年私達の或る夜の集會で此の問題を討論した時には、吾がウィーンの分析者の多くは異つた見地を持つて居り、兒童分析は幼兒的神經症の場合にのみ適當であるといふ結論が生じました。此の講習では、この問題の闡明の爲にあまり立入つたお話も出來ないだらうと思ひます。精々、どんな場合に分析を企てたか——分析をしてよかつたと分つた場合もありますし、內的外的な故障のために失敗したこともありますが——を御報告出來るに過ぎません。さう云ふ場合に何か新しい決定をするに就いて、一つの成功があればそれで更に進んで行くことが出來、失敗があれば二の足を踏むやうになるのは無論のことでありませう。全體としての私の考へでは、兒童相手の仕事と云ふものは、殊に兒童達の分析は非常に困難な、厄介な、錯雜した仕事で、あまりに骨が折れるといふ感じが往々し

ますが、これに反しさうでない場合——この方がなほ屢々ですが——卽ち純粹の成人分析には如何にも骨を折らないものだと思ひます。それ故、こと兒童に關する限りは、分析は多少の修正と變改を要し、或は一定の準備と注意のもとにのみ適用されるといふ結論になり得るでありませう。これ等の準備と注意とが技術上嚴守出來ない時には、分析の實行はやはり思ひとゞまるべきでありませう。

この講習がすゝむ中に皆樣は前述の言葉が何に關係してゐるかを、いろいろな實例で、お解りになるでせう。私は此の問題を明らかにする一切の試みを豫めわざと脇へ抛つておいて、或る種の場合の兒童分析の技術的過程のお話をいたします。それ等の場合に於いては、只今のところ詳しく論ずることの出來ない何らかの理由から、兒童分析をするのが好ましいと思はれるのであります。

私は昨年來度々、學會の技術講習會の一つで子供の患者の成行を述べ、またその會で兒童分析の專門的技術のお話をするように要求せられて居ました。私がこの要求を今迄謝絶して居ましたのは、此の主題に就いて云ひ得る總てが、皆樣に途法もなく月並で無論なことだと思はれるに相違あるまいと氣遣つたからであります。兒童分析の專門的技術は、それが抑々專門的である限り、大人は——少くとも成長しつゝある大人は成熟した獨立してゐる者であり、兒童は成熟しない獨立してゐない者であるといふ甚だ簡單な命題に由來してゐます。その樣に變つてゐる對象に對しては方法も亦いつも同じである譯に行かないのは無論であります。成人の場合では重要で價値ある方法の多くの部分は、兒童分析の場合では重要性を失ひ、樣々な手段の役割は位置が狂つて、一方で必然な素直な行動であつたものが、他方では恐らく危險な標準の立て方になるでせう。然し此のやうな變化は各人の現在の立場から生じるもので、特別な理論的基礎づけは殆んど要らないのであります。

私は然し最近二ヶ年半のうちに約十人の兒童患者を永く續けて分析する機會を得ました。そして、私が其の際なし得た觀察を、恐らくは皆樣のどなたもが、同じやうな事情のもとでは思ひつきなされたであらう樣な風に、一つ一つ並べて見ようと思つてゐます。

それで、分析中の出來事の實際の順序に手賴り、分析操作の初めに子供の示した心的態度から始めませう。

先づ大人の患者は、分析の始めにどう云ふ態度をとるかと云ふことから觀察いたさうではありませんか。人は自身の心底にある何等かの故障によつて仕事や生活享樂を妨害されるのを感じ、何等かの根據から分析の治療的效果なり、一定の分析者なりに對する信賴を生じて、此の方法で治療に努めようと決心します。勿論事情がいつもさうとばかり限らないことは存じてゐ

ます。いつも専ら心底の故障が分析の動機ではなく、最初は外界から生じる外界との葛藤が屢々その動機であります。決心も亦、いつも本當に單獨でされるのではなく、近親者か其の他の親密な人達の督促が、後の操作にとつて好都合である以上に、屢々大きな役割を演じるのであります。分析法と分析者に對する信頼も、いつも重要といふ譯ではないのです。然し患者が自身の內的生活の或部分に反對して自由意志から分析者と同盟するのが、治療の爲に望ましい理想的狀態であることには變りありません。

此のやうな事は兒童の場合には勿論決してあり得ないのであります。分析の決心をするのは決して幼い患者ではなく、常に兩親かその他の周圍の人達なのです。兒童は合意かどうかは訊ねられません。若し兒童に斯の樣な質問をしたとしても、判斷を下して答を見付け出すことなど決して出來はしないでせう。分析者は知らない人であり、分析そのものゝ何たるかも分つては居ないのです。然し一層大切なのは、苦痛も大抵の場合決して兒童の苦痛ではなく、往々自身では少しも障碍を感じないで唯周圍の人達だけがその徵候なり惡い狀態の勃發なりの爲に惱むといふことであります。斯の樣に兒童の場合には大人の場合に缺くことが出來ないと思はれるあらゆるもの、即ち、病氣の洞察、自由意志の決心及び治癒の願望が不足してゐます。

その事は重大な妨げとして、兒童分析者の誰をも驚歎させはしないのです。皆樣は、例へばメラニエ・クライン夫人の著書などで、どんな風にこれ等の狀況と妥協し、どんな技術をその基礎の上に創つたかを、お聞きになつたでありませう。これに反して、大人の分析にとり大層確な好都合な狀態が兒童の場合にも組立てられないかどうか、つまり茲に缺けてゐるあらゆる用意や熱心さが何等かの方法によつて發生させられないものかどうかを試みるのは骨折甲斐があるやうに存ぜられます。

私の第一講の主題のために、七歲から十一歲の間の種々な場合について、私の試みがどの樣に成功したかをお見せすることにします。その試みとは、子供の患者を大人の意味で云ふところの「分析し得る」やうにすること、つまり病氣の洞察を兒童に作つてやり、分析と分析者に對する信頼を敎へ込み、分析の決心を外的なものから內的なものに變へることであります。兒童分析の爲のこの課題は、大人の分析には見られない準備時代であります。特に强調いたしたいのは、この時期に私共が企てる總べては實際の分析操作には未だ何の關係もない、つまり茲では未だ無意識現象の意識化とか患者に對する分析の影響は問題になつてゐないといふ事であります。單に、子供に向つて大人の意のまゝになるあらゆる手段で、或望ましくない狀態を別な望ましいものに移し送ることが問題になつてゐるのであります。此の準備時代——分析のための訓練と云へますでせう——は、兒童の元來の狀態が大人の患者の先程述べた狀態からずつと隔つてをればゐる程、永く續くことになります。

然し斯樣な仕事を又あまり難かしく御考へになる必要はありません。なされるべき歩みは往々決して特別に大層なものではないのです。私は茲に昨年三週間觀察を任された幼い六歳の少女の場合を思ひ出します。その兒童の氣むづかしい活氣ない不快な性質が素質の缺陷と智的發達の不充分さの結果であるかどうか、或はこれは禁制の甚だしい、空想に耽つて過す兒童であるためかどうかを確めなければなりませんでした。それから細かく觀察してゐると、この子には非常に優秀な智性と大層銳い論理とがあるのに、同時にこの年頃としては非常に重い苦しい强迫神經症の存在してゐることが判明しました。茲ですべての準備は大層簡單な形になつたのであります。その小さな女の子は、私のところで分析中の二人の兒童を前から知つて居て、最初には少し年上の女友達と一緒に分析時間に來ました。私は特別なことは何も話さずに、たゞ見知らぬ周圍に親しませるやうにしました。次回にはその女兒一人だけと會つて最初の着手にかゝりました。なぜ貴女の知つてゐる二人が私の所に來るのか――一人の男兒は決して本當の事を言へず、その惡習を直さうと思ふからであり、も一人の女の子は大層泣きすぎて、その爲に自身ながら屹度腹を立てたからでありますが――無論知つてゐる筈だ、貴女もやはりそんな原因で私のところに來させられたのかどうかと私は申しましたが、それに對してその女兒は「私の中に惡魔がゐるの、ひつぱり出せるかしら」と打明けて云ふのでした。最初の一瞬此の意外な言葉にびつくりしましたが、それから、屹度出來るでせうが易い仕事ではない。そして若し貴女が私と一緒にそれをやつて見ようと云ふなら、貴女は決して愉快でない事を澤山しなければならないと私は云ひました。（勿論、私に總べてを云ふ事といふ意味で申したのです）その女兒は一瞬まじめに考へ込みました。そして「さうするのがたつた一つ早く出來る遣り方だつて仰有るんならいゝわ」と答へました。此の言葉で、その女兒は自分の決心から分析の原則に從ふ義務を負つてしまつたのであります。これ以上のことは實際大人に對しても初めには望めないのです。然しその女兒は時がかゝることも理解しました。試しの三週間が過ぎた時、兩親はその子に私のところで分析を續けさせるべきか、或は他の方法で心配してやつたら良いか決心がつきませんでした。けれど女兒自身は大層不安がり、私のもとで喚び起こされた恢復の期待を棄てようとはせず、此所に居られないなら、餘りの三四日の間に惡魔から救け出せと繰返し一生懸命要求しました。私はそれは不可能だ、相當な時間一緒に居ることが必要だと確言しました。數をもつてしては何もその女兒に理解させられませんでした、と申すのは、年齡から云へば既に敎育に適當してゐるのですが、その女兒は數多の抑壓のために未だ算術の智識を持つてゐなかつたからであります。私の言葉に引續いて、その女兒は床に腰を卸し、「此所にある赤い點々程澤山日がかゝるの、でなければ、もつと此所の綠の點々も一緒にした程？」と絨氈の模樣を指さしました。私は必要な時間の多いさを模樣の中に

ある澤山の小記念牌に依つて教へました。その女兒は完全に理解して、今きめようとしてゐる決心に就いて、大層永い時間、私と共同操作する必要があることを自分で兩親に説かうといひ出したのであります。

これに就いて皆様は、この子の神經症が重かつたがために分析者の操作がその様に容易く行つたのだと、仰言るでせう。然しそれは謬りであらうと考へます。皆様のために、別な場合を實例として引用いたしませう。その例は決して眞正神經症には關してゐなかつたのでありますが準備は似た經過をとつたのです。

その教育で兩親が大變手こずつた十一歳の少女と二年半程前に、分析上の知合ひになりました。その少女は富裕なヴィーンの中産階級の生れでありましたが、家庭内の關係はあまり好調でなく、父は弱くて不公平で、母は數年前すでに亡くなり、父の二度目の妻と一人の腹違ひの弟との間柄は多くの事情によつて煩はされてゐるといつた風でした。その少女の何回かの竊盜や、分りきつた虚言、大小の胡魔化し、不誠實などの果てしない連續に促されて、繼母は家族の主治醫の忠告通りに矯正のため分析を賴つて來たのであります。分析上の談合は茲ではやはり簡單でした。「兩親は貴女をどうも出來ない、兩親の助けだけでは何時までたつても決して今の事情や葛藤から脱けられないのです。一度よその人でやつてみるのですね」といふのがその談合の一致したところでありました。その少女は、最前述べた幼い強迫神經症を自分の惡魔に對する同盟者とした樣に、私の事を兩親に對しての同盟者として先づ無造作に認めました。彼女に強迫神經症の病氣があるとの洞察は茲では、明かに葛藤があることとの洞察で代用してあるのですが、兩者に共通であり、どちらにも作用してゐる要素は、葛藤の場合は外的な原因から生じ、強迫神經症の場合には内的原因から生じた苦痛の程度でありました。此の第二の患者の場合における私の取扱方は完全に、保護教育よりして不良生徒と附合ふ時の、あのアイシホルン（Aichhorn）の方法でありました。保護教育者は先づ第一に不良の味方にならなければいけないし、周圍に對する彼の心持は尤もだといふことを認めてやらなければならない、さうすることによつてのみ保護教育者は生徒に對しての仕事でなく、生徒と共にする仕事に成功するであらうとアイシホルンは云つてゐます。私は茲でこの種の仕事に對してはアイシホルンの立場の方が分析者のそれよりも多くの長所がある事だけを云つて置きたいのです。彼は市或は國家から全權を與へられて干與出來る上に、官職の權威を背後に持つて居ます。分析者はこれに反して、兩親から支拂を受け委托されてゐて（子供もそれを知つてゐます）委任者達に向つては何時でも、その人達の利害に關する時ですら、腰が低いのであります。實際私は此の兒童の兩親とも、あらゆる必要な會話の隣に全くその樣な困つた意識を持つて對座して居たので、このはつきりしない關係のおかげで、最良な内的條件にも拘らず外的な事の爲二三週間後に分析

は到頭挫折してしまひました。

此の二つの場合には、共に、實際に分析を始めるに必要な豫備條件、即ち苦痛の感覺、分析に對する信賴及び分析を受ける決心が輕い骨折で形成せられてをります。さて、これから二つ三つの要素の一つすら在存しなかつた極端な場合へ一足跳びに飛んで參りませう。

その患者と云ふのは、多くの不安、神經過敏、不誠實、子供らしい倒錯行爲などが不明瞭に入り混つてゐる十歲の少年でした。樣々な些細な竊盜と著しいのが一度とが最近數年の間に急に起つたのでした。兩親との葛藤は露はな意識したものではなく、自身のあらゆる不快な狀態に對する洞察も、その狀態を變へようとの願望も、表面にはやはり少しも認められませんでした。私に對する態度は徹頭徹尾拒否的で疑ひ深く、あらゆる努力は、性的な祕密を發見されないよう護ることに向けられてゐました。この兒に對しては前の二つの場合に用ひて大層效果があることが分つた取扱方のどちらも用ひられませんでした。意識的自己から分裂した部分に對して、その兒の意識的自己と同盟することも出來ませんでしたし――なぜならその兒は決して斯の樣な分裂を感じられなかつたからでありますが――又、その兒が意識する限りでは非常に强い感情でその環境に執着してゐたので、環境に對する同盟者にならうと申し出ることも出來ませんでした。そこで私のとり得る唯一の道は、明らかにずつと困難な眞直でない道で、眞直な道では得られなかつた信賴を得ることに努め、私なんかに賴まなくても澤山だといふ意見の人のところへ押掛けて行つて說伏せることとでありました。

私は種々な方策でそれを試みました。先づ、その兒の機嫌に順應して、あちらへ行つたりこちらへ廻り道したりする氣分の通りに隨いて行く以外は、ながい間何もしませんでした。その兒が朗らかな心持の時は私も陽氣に、眞面目か沈鬱な時は私も同じ態度をとりました。步いて時を費すかはりに卓の下に坐るか、橫になるかして費すことを擇んだ時は、それが最も普通のことであるかの樣な風をして、卓布を揚げて下に居るその兒と話しました。ポケットの中に細げ繩を入れてやつて來て、奇妙な結び方や曲藝を一覽に供し始めると、私はもつとずつと巧い結び目や奇妙な曲藝が出來ることを見せてやりました。その兒が顏の彫刻をした時には、もつとずつと良い物が彫刻出來ましたし、力試しを挑んだ時は、その兒とは比較にならぬ程腕力のある女らしく振舞ひました。談話中にも、海賊の話や地理的知識から切手蒐集、戀愛物話へと、各方面へ彼に隨いて行きました。此の談話の際にも、どの題目もあまりに大人つぽい、或は氣遣はしいものの樣に私には思はれませんでしたし、疑ひ深いその兒も、私がその兒と共に事をしてゐる背後に敎育的計畫がかくされてゐるのは決して推量出來なかつたのであります。私

は、觀客や讀者を惹き寄せる以外の計畫は何もなく、此の目的の爲世間の興味と需要に着眼點を置く映畫か大衆小說と略ぼ同じ様に振舞ひました。實際私の第一の計畫は私を面白く思はせる以外のものではなかつたのです。此の第一の時期に、同時的にその兒の表面の興味と趣味について多くを聞知つたのは、殆んど勘定には入らないけれど、非常に好ましい副收入でありました。

暫くしてから私は第二の要素をその上に加へました。害にはならない遣り方で、私が彼にとつて有用であることを思はせたのです。分析時間にその兒の手紙をタイプライターでうつてやり、夢や御自慢の創作物語の記述の手助けを厭はぬばかりではなく、その兒が使ふ各種の細々した物をやはり分析時間中に作成しました。同じ準備の時期を經過した或る少女の場合には、分析時間中に大急ぎで編んで、その少女のお人形達に次々と着物を着せもしました。それですから、簡單に申せるものなら、私は第二の好ましい特徵を發揮したわけであります。私は面白いだけではなく、役に立つようにもなりました。この第二の時期の副收入として、私は彼の手紙やお話を書いてやつてゐる內に、その兒の知人の群や空想活動の中へ段々に導かれたのであります。

然し、それから段々ずつと重要なことを敎へて行きました。分析されると非常に大きな實際的利益があること――例へば、罰せられる筈の行爲も先づ第一に分析者が、それから分析者を通して始めて敎育者達が聞知れば、全く違つた都合のよい結果になることなど――をその兒に覺らせたのであります。それでその兒は分析を懲罰の避難所と解釋して、無思慮な行爲を再び善くする爲私の援助を要求することに慣れて、盜んだ金を元の場所に私に返させ、必要ではあるけれど不愉快な、兩親にしなければならない白狀は全部私に委託しました。此の方面の私の能力を眞から信じようと決心する前には、その兒は繰返し何度も何度も私の能力を吟味したのであります。が、それからは私がその兒にとつて面白い役に立つ相手であると同時に、その支持なしにはもはや正しく暮せない甚だ勢力ある人になつてしまつたことはもう疑ありませんでした。それですから私は此の三つの特徵で私を缺くべからざるものと思はせてしまつたのでして、その兒は完全な從屬及び轉嫁關係に陷つたと、私共は云ふのであります。然し私は、その次に豐富な報償を甚だ根氣よく――言葉をもつてではなしに、又一擧にではなく――その兒に求める爲にのみ、此の機會を待つて居たのでした。報償といふのは詳しく申せばその兒がこれ迄大切に守つて來た祕密を放棄することであつて、これは分析に是非必要なもので、其の時はこの爲に一月あまりを要し、その放棄と同時にはじめて實際の分析が始まつたのであります。

皆様御覽の通り、此の場合に病氣が如何にして生じたかの洞察を私が組立てゝ見ようとせず、洞察の組立は全く他の方法で比較的永い經過をとり自から成立したのです。さしあたつての仕事は、後の分析に耐へ得る爲充分強い結合を創ることだけでした。

けれども、皆様がこの詳しい敍述をお聞きになつて、恰もこのやうな結合以外は何も肝要でないかのやうな印象をお持ちになつてゐるのではないかと心配であります。それで、引用した兩極端な諸例の中間位な他の實例の助けをかりて、その印象をまた拭ひ消してみたいと思ひます。

私は別な十歳の男兒を分析するように賴まれました。その男兒は周圍にとつて甚だ不快な憂ふべき徵候を最近顯はしたのでありまして、徵候と云ふのは喧しい激昂と惡い狀態の勃發であり、これは判つきりした外的原因なしに出るので、その兒とは違つて禁制のある內氣な兒童のそばでは一層目立つのでした。信賴は此の場合容易に得られました、と申すのは、私は分析の爲でなく既にその兒と知合つてゐたからであります。分析の決心も亦まつたくその兒自身の意向と一致しました。なぜかと云ひますと、妹が既に私の患者であり、妹が明らかにそれによつて家族の間で優越な地位を得たことに對する嫉妬が、その兒の望みを同じ方向へ驅立てたからであります。それにもかゝはらず、私は分析の爲の正しい着手點を見出しませんでした。然しその說明は遠く探す必要はありませんでした。勿論その兒は自分の不安に對して少しは病氣としての洞察も持ち、不安と禁制とから免れようと或種の骨折はして居ました。然し主要徵候である激昂の勃發に對しては寧ろ正反對でありました。その兒はそれを却つて自慢してゐるらしく、格別好都合な意味ではないのですが、兎に角、自分を他の人より優れさせてくれる何かだと見做し、兩親の心痛をそれに依つて引出しておいては、その心痛を享樂してゐました。それですからその兒は、此の徵候を或る意味では後生大事にしてゐるのであつて、若し分析の助けによつてその徵候を奪はうと試みたなら、彼は多分此の時期には反抗したでせう。茲でも亦私は或策略的な率直でない手段を擇びました。その兒とその性質の此の部分を離間することに決めて、勃發が起る度每にそれを不安で心配なやうな風を裝ひました。私は、斯の樣な狀態に於いて結局どの程度まで、貴男がなほ自身の行爲を心配してゐるのか、貴男の激昂とたぶん私の救治操作ではもう間に合はない精神病者のそれとは、どんな點まで似てゐるかを尋ねました。それでその兒は驚き狼狽てました。なぜなら、發狂と見做されることは無論、その兒流の名譽といふ意味の中にもはやなかつたからであります。それからは、自分で此の勃發を制しようと努めて、以前の樣にそれを支持しないで、それに對立し出し、勃發を禁壓するのに事實自分が無力なのにその際氣付くと同時に、苦痛及不快の意識が增加

したのであります。二三度無駄な試みをしたあとで、遂にその徴候は、私が望んでゐた樣に、尊重すべき所有物から邪魔な異物に變つたのでありまして、徴候攻擊の爲その兒はとても熱心にひたすら私の援助を要求しました。

此の場合、幼い强迫神經症者に最初からあつた狀態、卽ち兒童自身の內部の分裂を、私が誘致したことは皆樣に詳しく思はれるでせう。神經症的に惡い六歲の少女を扱つた他の場合にも、永い上述のに甚だよく似た準備期の終りに、同じ技巧を用ひようと決心しました。惡い狀態全部を人に擬らへて突然その女兒から離して特別な名前をつけ、その女兒をそれに向ひ合はせて立たせて、遂に成功しました。向ひに立つてゐるものの下で苦しまなければならなかつたものですから、私に此の創られた新しい人物のことを愁訴し始め、その大さを洞察出來たのであります。それからは、その樣に組立てられた病氣の洞察と兒童の分析可能性とは提携して行きます。

然し玆でも別な制限を忘れてはなりません。私は並はづれて天賦の才があり、良い素質を持つてゐる八歲の兒童――先にちよつと言及した神經過敏の泣きすぎる小さな少女のことですが――を永い間分析しました。その女兒にはよくならうとする意思があり、私のところで分析を十分に利用しようとの能力も可能性もありました。が、その女兒との操作は何時も或點で停滯し、私は旣に、最も障害的なものが消失したといふ僅かな獲物で、滿足しようとして居ました。その時、分析に好意を持たない保姆に對して感傷愛を持つてゐることが制限であることが、益々はつきり分つて來ました。實際深みへ行かうと骨折つても私達はこの制限に突き當つたのであります。その女兒は勿論分析中明らかになつたことや私が言つたことを信じはしましたが或點まででしかないので、その點まではさうしても差支へないのですが、その點に來ると保姆に忠義立てを始めるのでした。その點を越えて行くと頑固なとても攻擊出來ない抵抗に遭遇したのであります。その女兒は勿論斯のやり方で、早期幼兒期發達に重大な役割を演じた、別れ住んでゐる兩親のどちらを擇んで愛するかといふ以前の葛藤を繰返しました。が、此の事が分つても實際の役には立ちませんでした。と申すのは、例の保姆との目下の結合が、全く現實の確實な結合だつたからであります。私はその兒童の愛を得ようとして、此の保姆と頑强な首尾一貫した鬪爭を開始しました。此の鬪爭は兩側からあらゆる手段でされたもので、私はこの鬪爭中に彼の女の批判を喚び起し、盲目的愛着を動搖させようと努めるかたはら、子供部屋で每日起る樣な些細な爭ひのどれをも私の爲に利用し盡しました。其の少女が或日またその樣な自分を興奮させた家庭內の出來事を報告し、この時はいつもと違つてその話に「ばあやが正しいと思つて?」と附け加へた時に、私は勝つたことに氣付きました。その時以來、分析は漸く深部へ進み、玆に述べたあらゆる場合の內で最も前途多望な結果になりました。

此のやうな扱ひ方、兒童をめぐつての鬪爭が許さるべきものであるかどうかの決定は、此の養育婦の感化は分析にとつてのみならず、その兒童のあらゆる發達のためにも喜ばしくないものであらうといふことで、此の場合は難なく決められました。が、皆樣、若し見知らぬ人でなしに兒童の兩親を反對者として面前に控えたり、或は、分析操作を成功させる爲に、さうでない好都合な望ましいある人の感心から兒童を遠ざけるのは、利益になるかどうかといふ質問にあつたら、斯の樣な狀態は如何に守り難くなることか御考へになつて下さい。兒童分析を實際に遂行し得ることとの問題及び兒童の周圍との關係に就いては、この點へ戾つてなほ詳しく檢討いたしませう。

私は此の主題の結びとして、なほ二つのさゝやかな話を附け加へませう。この話で皆樣は、兒童がどの位分析の骨折の意義と治療學的使命を理解し得るものであるかがおわかりになるでせうと思ひます。

あの旣に度々言及した幼い强迫神經症者がその點を最もよく理解したのであります。その女兒は或日、私に非常に立派に續いた彼の女の惡魔との鬪爭を報告して、突然「アンナ・フロイドさん、私惡魔よりずつと强かなくて？　私ひといで惡魔をやつつけられないかしら？」それするのに本當に貴女は居なくてもいゝの」と承認を求めました。私は、あなたは私の助けなしでも實際ずつと强いと請合つてやりました。「だけどやつぱり貴女が要るの」と、その女兒はちよつと熟考してから申しました。「惡魔より强くなけりやいけないなら、不倖せでないように助けて頂戴。」大人の神經症患者にも、患者が分析治療から期待してゐる改變ではありますが、これ以上の改變の理解は期待出來ないと思ひます。

さてその次の話、大層詳しく述べたあの十歲の惡い男の子は、後の分析の時機に、待合室で私の父の大人患者と話しこんでゐました。その患者はその兒に或犬に就いて、それが一羽の雞を喰べたので、その犬の持主である自分は代價を拂はなければならなかつたとか話しました。「その犬をフロイドのところへ連れてこなきやならないのになあ、そいつは分析が要るんだ」と私の小さな患者は云ひました。大人は何も答へませんでしたが、後で、あの男の子は分析について一體どんなおかしな概念を持つてゐるのだらうと、とても是認出來ない旨の意見を述べました。犬に缺點はなかつた。犬は雞を喰はうと欲し、そして喰ふに過ぎない。その腕白小僧がそれをどういふ意味に使つたか私には精確に分りました。「可愛さうな犬」「出來れば良い犬で居たいのに、自分の中の何かが雞を喰べちやへと强ひるんだ」と彼は考へたに相違ありません。この幼い神經症的不良者がこの場合、惡への洞察を以て容易に病氣への洞察に代へてをり、かくてそれが分析を受けることへの充分な誘因となることは皆樣によくお分りになりますでせう。（第一講終り）

育兒法の心理的基礎問題

――子供を持つ事の生物心理的意味――

土屋舒廣

「白金も黃金も玉も何せむに、優れる寶子にしかめやも」と言はれる如く、親達にとつて子供は他の何物にも替へ難い寶である。それは限り有る生命の所有者としての吾々人間にとつては誠に當然の事と言はなければならない。何故なれば、複細胞生物としての吾々人間はそのゾマの面において個人として當然に生者必滅の運命を免れ難いのであるが、他面において生殖細胞、卽ち精子と卵子との結合によつて次代を生み、それによつて永遠の生命を獲得し得るのであるが故に、親達にとつて子供は自分達の再生、復活としての意味をもつのである。それ故に子供は親達にとつて他の何物にも替へ難い寶なのである。卽ち子供は親達自身の再生產であり、且つ永遠なる生命慾の滿足、不死なる生殖細胞の實現である。吾々人間の二つの要素、卽ちゾマと生殖細胞との裡で、前者に基いては死本能が起り、それは個體保存本能として社會生活上主として衣食住の資料の生產獲得の方面の心理的原動力となるのであり、後者に基いては生本能が起り、それは種族保存本能として自己自身の再生產の心理的原動力となるのである。そして、ゾマと生殖細胞とは體であり、死本能と生本能とは相であり、個體保存本能と種族保存本能とは用なのである。この生殖細胞の裡で卵子を代表する女性は死本能的であり、精子を代表する男性は生本能的であると、相對的には言へるのである。女性が男性に比して子供に對する盲目的に近い程の强烈な愛情を懷くのは、男性本位の社會に對する女性的劣等感（ペニス•ナイドとして顯現する）の補償としての無意識意圖もある事ながら、又その卵子的死本能の補償としての意圖を輕視するわけには行くまいと思ふ。

一般的に言へば、男女共に生死一如であるが、特殊的に考へれば、男女はその生死兩本能の顯現において相互に異なり、且つ相互に補足するものである。卽ち男性の死本能は社會的活動の方面に個體保存本能として實現せられるのであるが、女性に

おいては、男性に經濟的に依存して生活すると言ふ從來迄の習慣によつて、その死本能はリビドー化せられ、男性獲保の方面において個體保存本能として實現するのである。そして生本能は男女共に自己の再生産卽ち子供を産むと言ふ方面において種族保存本能として實現するのであるが、從來までさうであり現在もさうであるが如く、女性が男性に經濟的に依存して生活してゐる限り、又さうした社會狀態が維持せられる限り、男女の生本能が自然的に對應し、種族保存本能として結晶する事は難しく、事實としては、男女の性的結合において女性のリビドー化せられた死本能と男性の自殺願望（退行願望）化せられた生本能とが對應し、男性の死本能は社會生活の方面に、女性の生本能は出産、育兒と言つた方面に向ふのである。かやうな狀態においては男女の性的結合が、譬へ正常のそれであるにせよ、心理的には當然賣淫或は買淫的性質を帶びるのは何としても避け難い事である。この難點を避ける爲には、女性もその死本能を賣淫的リビドー化から社會生活の方面に開放し、經濟的自我を確立する事が必要であると考へられる。これによつて男性の生本能も退行願望から開放せられるであらうし、又男女の生本能が性的結合において健康な狀態で對應し、子供は歪んだ母性的生本能の愛玩卽ちペニス・ナイド及び死本能の補償から開放せられるであらう。しかし乍ら、これは言ふ可くして行ひ難い事ではある。何故なれば男性でさへも經濟的自我を確立する事が困難な社會において、女性が自らのそれを確立する事は餘程自我の强固な男まさりの女性でなくしては期待し得ない事であり、且つ社會的にそれが實現せられたしても心理的な困難が橫はるのである。これは生産手段の私有と生産の社會性との矛盾が止揚せられ、勞働價値說が尊重せられてゐる彼の社會主義ソ聯においてさへ、婦人を家庭から開放せむとする政府の意圖が理論的には承認せられたにせよ、本能的心理において婦人に嫌はれた事實を想へば、その困難さは成程と頷かざるを得まい。言はんや他の資本主義國或は封建的心理の殖民地においてをやである。

　子供を持つと言ふ事は男女の生本能の實現なのであるが、事實としては、前述せるが如く死本能の補償としての意味をより多く有する傾向がある。それは死本能が社會的活動において個體保存本能として自らを充分に確立し得ない爲であつて、それ故に死本能は死の願望と死の恐怖とに自己分裂し、兩傾向は一方が意識面に在る時は他方は無意識に潛み、他方が意識面に在る時は一方は無意識面に潛むと言ふ樣に相互に關聯し合つて交替するのである。かやうにして死本能は個體保存本能として自らを實現する事が困難となる。死本能がかやうに自己分裂を來すのは、無意識コムプレクスに基くのである。卽ち農、林、水、鑛等の産物を生産し、或は水力を利用して電力を起したりし、或は工業的技術によつて種々の有用品に加工したり、それらを社會人に配給したりする人間の經濟活動において、衣食住の資料を産み出す自然、土地に對して母コムプレクスを起し、願望

と禁制との相剋によつて死本能が分裂して死の願望と死の恐怖とに相關交替をなし、個體保存本能としての統一が保たれなくなるのである。東洋人、そして東洋人としての日本人にはかやうな傾向が多いと言ふ事實は否定出來ない様である。殊に農民はその業務の性質上、大地への母コムプレクスが根深い様であつて、その願望の滿喫は超自我の禁制によつて相當の重量の罪障感を負ふものであるらしい。その罪障感によつて自已懲罰欲が起り、攻撃欲は内向してマゾヒスティクになるが、外界に一度び超自我らしき對象を見出すと罪障感に基く懲罰欲のためにエディポス的なサディズムに轉ずるのである。日清、日露の戰爭の背後にもかやうな心理が勝つと言ふ事の爲に力となつたのではあるまいかと思ふ。この時代の積極性に比較すると現代は遙かに退行的であるらしい。卽ち「一生報國」或は「七生報國」とでも言ふべきところを「一死報國」と言ひ、又大槻憲二氏が指摘して居られるが如く「一日激戰」とでも言ふべきところを「一日戰死」と言ふ様な消極的スローガンによつて精動あたりから全國民に呼びかけるのは何を意味するか。死の恐怖感が意識下に抑壓せられると、意識面では死の願望が「大義名分の爲に」と言ふ様な理屈付けの下に働いて、死ぬ事によつて死の恐怖感を克服しやうとするのである。寧ろ「一生報國」、「一日激戰」とでも言つて、個體保存本能的發展慾、建設慾としての死の本能を實現すべきであるのに……。子供を産むと言ふ事卽ち吾々の生本能を種族保存本能として實現する事は男女の性的結合によつて精子と卵子とが止揚せられなければならないのが生物としての人間の實狀であつて、さうする事により子々孫々連綿として續く事がつまり永遠の生命を保つ所謂である。しかし人間は他の動物の様な單純な生物ではなくして高度の心理性を備へてゐるのであるから、生本能を種族保存本能として實現する事も相當の程度において心理化せられてゐるのである。從つて、子供の無い夫婦が他人の子供を貰ひ受けて自分の子供として育てゝも本能は心理的に滿足せられるのである。又同じ理由によつて師弟の間にも親子の關係が心理的に成立するのである。佛敎においても佛、菩薩、衆生間の愛が說かれてゐるが、それは極度に分析され、昇華されたところの親子愛の境地が理想として示されてゐるのであつて、佛から觀れば衆生は兒孫であるとされてゐる。禪門において師とその衣鉢を繼ぐべき選ばれた弟子との間に親子、兄弟姉妹の愛、友愛等を渾然と綜合した様な愛が取り交される場合の心理が禪書において看られるが、それは極度に昇華され、分析されたる親子關係であらうと思はれる。かやうな境地は、それが凡情を脫却、つまり意識化せられた曉の眞物であれば、無慾の様に見えて實は心理的な大慾であり、昇華的な超「大功平主義」である譯である。尤も師弟でなくして、困難ではあるが、實子と實の親との間にかやうな境地が得られゝば一層幸福を味はへる譯ではなからうか。吾國における皇室を中心とした家族主義と言ふのは、昇華せられ普遍化せられたところの親子關係であるとも考へられる。エスとしての人

民によつて元首は超自我として高く奉戴せられ、自我としての支配階級を通じて「義は君臣、情は父子」の關係が成立するのであるが、その底にはタブー視せられた原始的母子關係が濃厚である。

かやうに子供をもつ事は吾々の生本能を種族保存本能として實現する事であるが、それは生本能の反面たる死本能と深い關係があつて、死本能が個體保存本能として充分に實現し得ない場合には、それは死の恐怖と願望とに分裂して生本能の實現に影響するのである。卽ち子供或はその代償物（金錢、名譽等）が分裂せる死本能の補償となつて、生活が弱々しくなる。從つて、その子供も亦心理的に不健全となる。これはつまり「親の因果が子に報いる」譯である。自己の內心の葛藤に屈せず、それを克服し得る者は、外界の一切に對して何の拘りもなく鬪爭し同時に和解し得るものであつて、それが健康な生活の迫力である。子供を健康に育てむと念願するのは親として當然の事であるが、その爲には親自身が健康にならなければいけない。何故なれば親子の間には肉體的、社會的、心理的因果關係があつて、親の因緣が子に相續せられるからである。しかし、因緣を作るものは自分自身であるから、人が子として正しく健康になる事は親に對する立派な報恩であり、大君に對し奉つては立派な忠義となるわけである。それ故に「孝子の家に忠臣出づ」と言はれる所以であらう。（完）

精神分析 前號要目

肉體的異常現象の心理及び生理（三）

——本誌第八卷第五號、第七號を經て本號に至る——

長崎文治

第五章　肉體的異常現象の發生機制

（一）肉體轉換を起す異常情緒

異常現象に見られる肉體的轉換作用は、正常な心理では無く、異常な情緒に依つて惹起される事は前章で述べた。この異常な情緒とは、一般に情緒量の多さ、即ち激しい情緒と考へられ易いが、これが全部では無い。若し情緒の激しく發動した場合にのみ、肉體的轉換作用が起るとするならば、異常なショックを受けたり、感情が著るしく高まつた場合には、誰でも、又は何時でも、異常な肉體症狀が見られる筈であるが、どんなに強い情緒が起きてもこれの現はれぬ人もあり、又場合もある。非常な恐怖とか、又は憂懼の爲めに、一夜にして頭髮が眞白に變つたといふ人もあるが、それでは同樣の境遇に遭遇した場合に、誰でも頭髮が白くなるかといふと、さうはゆかない。個人に依つて異なる。この個人的の相違といふ事は、情緒の變動に堪へ得る人と堪へ得ない人との相違であるが、この抵抗力の相違は素質である。この素質が、情緒の變動に對應する事が出來ない場合は情緒の浪に押し流されて、本能的の行動が多くなる。若し情緒量に對して、抵抗力が勝つてゐる場合は、情緒を抑壓して了ふか、或は之れを昇華して、更に洗練された感情に迄改變するのである。

情緒は水の流れの樣なものであるから、之れを抑壓して、その流れを堰き止めやうとしても、堰き止められるものでは無い。フロイドの比喩してゐる樣に、本流が堰き止めらるれば、その水は、今は涸れてゐる舊水路に流れ込むのである。この舊水路は昔は流れがこゝを通つてゐたものであるだけ、本流が堰き止めらるれば勢ひ水はこの舊水路に出口を求めて流れ込んで來る

のである。フロイドはこれを退行現象（レグレッション）と呼んでゐる。即ち、情緒が抑壓によつて、正常な出口を塞がれると、他の道に捌け口を求め、結局、幼稚な精神に迄退行して行つて、こゝで情緒は原始的な方法で發散するのである。併し、抑壓は何時も精神の退行を起させるものとは限らない。昇華（サブリメーション）の一つの過程として、情緒を一定の方向に推し進める爲めに、抑壓を加へなければならない場合がある。恰かも、水流を或る箇所で堰き止め、水利の悪い田地に灌漑させて收穫を豊かにすると同様であつて、腦の興奮と伴つて生じた情緒のエネルギーを、そのまゝ、運動神經纖維を通じて、行動器官（筋肉）に向け、衝動といふ形で表はすのが本來の筋道であるが、この順序を踏まずに、一先づ行動への道を塞ぎ、この情緒のエネルギーを大腦皮質へ送つてこゝで叡知の検閲、洗禮を受けさせて後に、運動經路の方へ向けてやれば、これが有意的な、所謂高等な行動となつて、文化的價値を生むものである。この道を昇華作用といふ。人間の常態の生活といふものは、文化的價値を高める道を通るのであつて、從つて昇華といふ事は人間生活には必要な働きであるが、この昇華を行ふ爲めに、或る程度の抑壓が必要となるのである。

であるから、抑壓といふ事は、總ての場合に精神異常態を作るといふものではなく、一定の方向に人間生活を導き、之れを高めて行く爲めに適度の抑壓が行はれなければならないのである。この場合の抑壓は、何時も一定のはけ口を作つておいて、反對の方面を抑壓するのであつて、絶對的の抑壓では無い。徹頭徹尾の抑壓といふものは、人間生活を歪んだ型に押し籠めて了ふ様なものであつて、吾々がコムプレクス（Komplex）と呼ぶ異常な精神狀態は、これに依つて作られるのである。そしてこのコムプレクスは、異常な情緒が中核となつて形作られてゐるから、常に人間の行動を異常な方面に推進させるものは、抑壓に依つて、異常化された情緒であるといふ事が出來る。

（二）抑壓の機制

一體、抑壓（Verdrängung）とは何かといふと、現實生活に不都合、叉は醜く思はれる様な願望とか感動が生じた場合、之れが全自我と對立して内的葛藤を惹起し、結局全自我の勝利に歸して、この願望とか感動を無意識界に追ひやつて了ふといふ事である。そして、この抑壓されるもの、即ち現實の自我と調和し得ない願望、感動は本能的のものである。本能それ自身では無く、本能の内容、觀念、對象等であるが、この觀念群に附隨してゐる情緒は、これ等の觀念群が抑壓されると、症候に形を變へて行くものである。例へば、強迫神經症では置換へられて強迫觀念となり、ヒステリーでは身體的の症候に形を變へる（轉換）のである。そして、これに依つて、抑壓された觀念群は、その情緒量の大部分を失ひ、意識に浮び出る力を喪ひ、他の意識部分から引離されて、無意識界を形づくるといふのが精神分析學の解釋である。

この、抑壓される本能的傾向といふものは、生理學的に觀れば、間腦精神である。間腦は一切の本能活動の根源地であり、吾々が本能とか衝動的であるとか稱する行動は、何時も大腦皮質の叡智中樞の發達が未熟であるとか、又はこの働きが弱まつてゐる場合に起るものであるが、又間腦の機能が異常に亢進した場合にも生ずる。かういふ場合には、間腦の監督者である大腦皮質が、その支配權を行使し得ないで、却つて間腦に引きづられて、その力を本能的行動に費やす樣にもなる。これを譬へて云へば、智慧を持つてゐる聰明な者が、之れを社會的な活動に活用すれば、善行となつて社會を稗益するが、若し非社會的な面に向けると、惡事となつて害毒を流す樣なものである。

下等動物は、生れつき大腦皮質が間腦より餘り發達しない樣な構造に出來てゐるから、本能と理性との葛藤が無く、自然の儘（本能的）の生活を行つて、何の惱みも持たないが、人間になると、大腦皮質は間腦よりもつと發達しなければならない樣に出來てゐるから、そしてこの機構の下に人間の生活は制約されてゐるから、間腦精神が跋扈して本能的行動に奔らうとすると、何時でも大腦精神が出て來て之れに禁制を加へる。この場合、間腦精神が穩かに收まつて了へばそれで良いが、さうでなく、相當根強く大腦精神に對して反抗すると、こゝに精神葛藤が生ずる。精神葛藤は大腦精神內、例へば一つの考へと他の考へといふ樣な對立的な思考が生ずる場合にも起るが、この場合は撰擇作用、卽ち理性に依つて優劣が定められ、そのまゝ收まつて了ふ。ところが、大腦精神と間腦精神、云ひ換へれば本能と理性との葛藤は、審判官である理性自身が爭ひの渦中に入つて了つてゐるのであるから、どうしても收まりがつかなくなつて了つてゐる。さうしてこの爭ひは、水と油の樣なもので、融合する事が出來ない性質のものであるから、何れかゞ勝つて他を押へつけて了はなければならないのである。間腦精神が勝つと、反社會的行動が現れるから、秩序に據つてお互の生活が守られてゐる人間社會では、どうしても大腦精神に支配權を附與しなければならない。抑壓といふのは大腦精神の働きで、大腦精神が勝つて、間腦精神を一室（無意識領、卽ち間腦）へ押し籠めて、表（意識領）へ出て來ない樣にする事であるが、この場合には決して、間腦精神はそのまゝ鋒を收めて鎭まつて了ふ事はしない。卽ち行動化しやうとしてゐるのである。これに對して大腦精神も、嚴重な監視ゝ强力な抑壓を以て押へつけてゐるからどうしても出る事は出來ない。その結果、間腦精神は、大腦精神と爭つて出ようとする事を斷念し、うまく妥協（コムプロマイズ）して、無難な形に變へ、そのエネルギーの解放を圖らうとする。この一つがヒステリー性轉換（Hysterische Konversion）であつて、抑壓された傾向は肉體の病的症狀に形を變へて現はれて來るのである。

さて、前に、抑壓された觀念群は無意識領域へ追ひやられ、それに附隨してゐる情緒は、症候に形を變へて出て來ると云つたが、この場合情緒が變裝するには、變裝に用ひるところの原型が無くてはならない。所謂變裝の意志であるが、これは抑壓されて無意識領へ追ひやられてゐる觀念群である。この觀念群に附隨してゐた情緒が、カムフラージュされた意志（抑壓された觀念群）として、體的症候を形成したのが轉換性ヒステリーであると云ひ得る。

この機制は、私が前に、腦脊髓神經系と植物性神經系とを連ねるものが情緒であると云つた事と一致する。腦脊髓神經系の最高中樞である大腦皮質と、情緒の中樞（間腦の視床部）とは、神經纖維を以て密接に連絡してゐて、總ての叡知は感情的着色を施され、又情緒それ自身も、大腦皮質の主宰にかゝる理念に依つて内容づけられてゐる。それであるから、意欲とか願望といふものは、大腦皮質から材料を採入れて作り上げられた間腦精神であり、理性とか社會的活動といふものは、情緒に依つて着色された大腦精神であると云ふ事が出來る。一體、大腦精神（自我）と云ひ、間腦精神（意欲又は願望）と分けていふけれ共、これは便宜的であつて、この二つのものは截然と分れてゐるものでは無くして互に交錯してゐるのである。唯、大腦皮質支配下に於て形成された行動、即ち自我とか有意行動と云はれる種類のものを大腦精神と稱し、有意的行動で無く、もつと廣漠とした、總ての生物が生得的に持つてゐる行動、即ち本能的の行動は、間腦を中心として構成されてゐるから、これを間腦精神と呼ぶのである。そして間腦精神は、常に一定の肉體的表現への道を持つてゐることは、前章で情緒の中樞と植物性神經の上位中樞との關聯の所で述べた。

そこで、今迄述べた所に依つて、意欲が自我への出口を塞がれると、肉體的轉換を起すことがあるといふ、精神分析學的考へ方への生學的說明が與へられると思ふ。フロイドはこの意欲をリビドー（Libido）と呼んで、これはエスより發する性的のエネルギーであるとしてゐる。エスは自我に對立するものとして假定されたる間腦精神であることは前に述べたが、このリビドーは生物の本來持つてゐる力、即ち生命力（Libido はラテン語では、激しい欲求、肉欲、熱望、淫欲等の意味を持つ）と云つても良い。

さて、そこで、精神分析學に從へば、リビドーが自我への道を塞がれると、退行を起して神經症になるといふが、これはそのまゝ大腦精神と間腦精神の關係にも當てはまる。間腦精神は常に間腦精神としてだけ、他から隔絕して働く事はない。若し間腦精神が生まのまゝで現はれて來たならば、現實の社會生活と相容れない事は分り切つてゐる。それ故、間腦精神が、その意志を實現（行動化）する爲めには、これが大腦精神化されなければならない。即ち、吾々の意欲は總て一度は、大腦精神た

る、理性の洗禮を受けなければ行動化されないのである。ところがこれが大腦精神に依つて拒絶され、自己表現への道を塞がれると、その力(リビドー)は他の道に據つてそのはけ口を探さなければならない。他の道とは植物性神經系統への道である。間腦からのエネルギーは、大腦皮質(自我)の方へ上行するか、又は植物神經系統(體的器官)の方へ下行するかの、二つの道を採るのであるが、上行すれば一定の行動となつて、外界適應作用(定位作用)を行ひ、高等動物になる程、それが有意的に行はれるのである。これに對して、下行の方は反射作用として、各臟器其他の植物神經支配下にある器官の働きを調節し、之れに依つて生命保全の內界適應作用を行ふのである。

若し上行したエネルギーが、行動への道を塞がれると、その儘自我に纏綿して了ふか、又は抑壓を受け、植物性器官の方へ向つて下向して行く。自我に纏綿した場合には、このエネルギーは自我を攻擊して、精神苦を生ぜしめ、植物性器官に纏綿した場合には、肉體自身にその攻擊力を向けて、轉換性肉體症狀を起す。

(三) 行者に觀られる抑壓

ヨガの行者――ヨガの行者に限らず、總ての「行」といふものがさうであるが――の『行』卽ちその修業法は、全く肉を殺ぎ骨を削る樣な苦痛の連續である。苦行を積めば積む程、その行力が強くなると云つて、彼等はあらゆる苦難に堪へ忍んで、荒行をする。唯、彼等の行は、肉體に苦痛を與へる事を以て、その目的を貫徹する道であると考へてゐる。一般に「行者」の持つ思想は、本來神聖であるべき吾々の精神は、不淨なる肉體に閉ぢ籠められて居るから、凡俗に墮して了ひ、煩惱に苦しめられてゐて、本來の精神力を發揮する事が出來ないのである。それであるから、惡德・不淨な、この肉體を苦しめて、この拘束力を失はせて了へば、精神の眞の姿が現はれて來て、神と一致し得る境地に上る事が出來るし、さうすればこゝに偏見、煩惱の無い、幸福な狀態を釀す事が出來る。又、神通力を得られるといふ考へが、根本になつてゐる。

一體、印度のヨーガ(瑜珈)といふのは、古代六派哲學の一派で、本來心身解脫して、涅槃の境地に到るといふ事を目的とするもので、この爲めに、精神と肉體との兩方面の修業を行つたのであるが、後になると、職業的行者に墮して了ひ、肉體的苦行を修業する事に依つて、神祕的な力を獲得し、これを一種の見榮とか道具にしやうとする、所謂奇術使ひ式の行を誇る樣になつて了つたのである。これは總ての「行」といはれるものが、その根本を忘れて、形式に流れ易く、遂に奇蹟を目的とする樣になると同樣である。

ヨガの行者が、肉體を苦しめて、修業の目的を達する手段とすると云つた事に對して、必ず抗議が出るに違ひない。苦行者

は、單に肉體を苦しめる許りでなく、同時に精神的の苦しみは一層甚だしいといふのである。それは、一切の人間的欲求を制御し、斷滅する事の苦しさを云ふのであるが、この欲求といふものは總て肉體的の欲望である。肉體的の欲望が精神的苦痛を釀し出したのであつて、精神的苦痛それ自身ではない。それであるから、彼等は肉體的欲望を斷つて了へば、精神的苦痛は取去る事が出來ると考へてゐるのである。ところが、純粹の精神苦——これは肉體の、現實的な欲求より生ずるのではなく、更に深い思考、觀念等に依つて生ずる苦しみである——は、如何に肉體的欲求を取去つても消え去つて了ふものではない。その人の思考、觀念に對して適當な處置を講じてやらなければならないのである。精神苦は叡智の發達と共に生じ、從つて、大腦皮質の發達と並行するものであるから、精神生活の低い者程、苦しみの中に肉體的の分子が多くなつて來るのである。苦行者の「行」といふものは、肉體を對象としてゐるので、肉體を苦しめさへすれば、肉體的の欲求を斷滅する事が出來、それに連れて精神苦からも脱却する事が出來るといふ考へが根本になつてゐるだけ、知能の水準が低いのである。「行」に對する最も進歩した考へ方は、斯樣に、苦しみを脱れる方便として行はれるものではなく、苦しみに堪へ、之れと闘ひ拔く精神力を養ふといふ事である。

この「行」に對する二つの態度は、佛陀の修業過程に於て見られる。釋迦族の王家に生れ、富貴と讃仰と勇武と聰明に惠まれた佛陀が、猶ほ且つ苦しまなければならなかつたのは、生老病死に就いての苦惱である。この苦しみは富貴の財と力を以てしても取去る事の出來ないものである。この苦の解脱の師を求めて佛陀は、當時有名な哲學者阿羅邏伽羅仙人と、鬱陀伽羅仙人とを尋ね、苦行を積み、その哲學を聞いたが、遂ひに悟りを得る道でない事を知つて、此處を去つた。そして世の中に自己の師とすべき者の無い事を覺り、獨り大神通を得やうとして、尼蓮禪河の畔にある苦行林に入つて大苦行に取かゝつた。傳説に依ると、この苦行は、一粒の米と一粒の胡麻でしのぎ、遂には全く斷食して了つたと云ふ事である。併しその結果は、肉體のかゝる受苦にも拘らず、求むべき解脱は得られず、唯極度の疲勞と無氣力が殘る許りであつた。苦行に瘠せ細つた、死人の樣な體を横たへてゐた佛陀は、難陀波羅といふ小女に乳糜の供養を受けて元氣を恢復し、こゝに六年の苦行生活を捨て去つて菩提樹下に靜坐し、今度こそ人生の大問題を解決する迄は、此處を動くまいといふ大決心の下に、深い思索に沈潜されたのである。此の結果として、大きな悟りを開いた佛陀は、圓滿無碍な人格と、教説を以て佛教を創めたのである。

この佛陀成道の心理過程を、精神分析學的に考察すると非常に興味深いものがあるが、これは他日に讓つて、こゝでは佛陀が哲學者に就いて苦行し、又は教へを聞いたといふ事、次に自分の意志で苦行した事、及び最後に大きな決心を以て自ら成道

を得やうとして菩提樹下に坐つた事の三つの過程を述べれば足りると思ふ。これは悩みを持つ者が誰も通る道筋であつて、最後の、佛陀が菩提樹の下に坐つて成道を得た境地と、精神分析とは一致してゐるといふ事を述べれば事足りると思ふ。悩みを何か他の力に縋つて解決しようとするのは、單純な悩みか、又は悩みを持つ人の知能の程度が低い場合は、哲學でも、又は神や佛、その他の偶像でも良いが、深刻な悩みを持つ者とか、又は知能の高い者は、到底之れで救はれるものでは無い。他力の如き頼り無さを知つて、自力に依つて解決しようとする様になると、これは一つの進歩である。併しこの自力解決法も苦行の如きものは、既に低い文化水準の遺物である事は前に述べた様な譯で、精神苦に對して、何等の力をも示す事が出來ない。そこで佛陀は深い思索の境界に入つて、悩みの根源を衝き、その悩みの正體を摑まへると、今度は、この悩みから脱れやうとする態度を捨てゝ、之れを有りの儘に見、有りの儘に體驗し、有りの儘に行動するといふ、八正道に依て得道したのである。これは精神分析學が、人間の行動を規定し、その運命を左右する様な、無意識的の力、卽ちコムプレクスを探し出して、その抑壓を取去つてやると、歪められた性格が、直されるといふのと同様であり、佛陀が他力に縋る事を止めて、自力に據つて悟りを開いたといふ事と、精神分析學の、受動的立場にあるものを能動的に變へる事に依つて、病的狀態を脱するといふ事とは一致するのである。

こゝに於て、行者と佛者(廣く宗教家といふ言葉を以て呼ぶ)との相違が分つた事と思ふ。行者は強い抑壓を加へる事に依つて、常に精神的退行への道を取る。その爲めに行者は、宗教家の様に高級な精神苦を對象としないで、肉體的の苦しみを對象として、祈禱とか護符とか呪文等といふ、原始的方法を採つて、之れを治さうとする。行者は、苦行を積めば積む程、一種異つた性格を持つ様になるもので、吾々の言葉で云へば、神經症的である。鋭い眼、奇矯な言動、偏屈な精神等、所謂人間離れのしたものである。彼等はこの人間離れをする事を修業の目的としてゐるのである。ところが佛教では、この人間離れをするといふ事は眞の精神では無いとしてゐる。俗に居て俗に溺れず、俗を出でゝ俗を離れざる境地、といふのが正しいので、「卽身成佛」とか、「煩惱卽菩提」といふ言葉が、これから出てゐるのである。それであるから、佛者の理想は圓滿無碍な人格であつて、行者の風貌とは一見して異つてゐる事が分る。これは佛者は抑壓する事よりも、昇華する事(Sublimierung)を目標としてゐるからである。

行を積むとは、云ひ換へれば、強い抑壓を加へるといふ事であつて、意圖的に抑壓を加へて、之れに堪へ得れば、神通力を得ると考へてゐるのである。であるから、『行』とは、抑壓に堪へ得る身體を作るといふ事と、抑壓を更に強めて行くといふ

事との二つの效果を持つてゐる。この「行」に依つて行はれる抑壓は、ヒステリー者に見られる様な、受け身の抑壓では無くて、積極的に意圖を以て行ふものであるから、ヒステリーの様に素質といふ事を考へないで、誰でも、行を積むことに依つて行はれ得るものである。卽ち、強い意志を以て、抑壓を加へ、情緒が意識化される事を阻止し、之れを植物性神經系統の方へ下行（又は退行）させる事を以て、行力を得たといふのである。そして、この過程は條件反射的である。抑壓を加へて、情緒のエネルギーを植物性器官に向はせる練習と、大腦皮質に於ける一つの意志、例へば胃を收縮させやうとする意志が、この抑壓された情緒に働いて、一定の條件反射過程を作つて了ふのである。唯、大腦皮質に於ける一つの意志が、その目的の器官に達するには、情緒のエネルギーが如何様に働くのであらうか、といふ事は、腦生理學上解釋出來ない問題である。情緒中樞は大腦皮質と神經的連絡を保つて、相互に影響し合つてゐるが、情緒中樞は大腦皮質支配下にあるものでは無いから、意志の儘に動かす事は出來ない。從つて、情緒を抑壓して置いて、そのエネルギーを胃とか腸とか、其他特殊の臟器に、植物性神經を通じて與へろと命じても、その通りにはならないのである。唯、一定の情緒には一定の植物官能の興奮が伴ふから、この一定の情緒を犯させる條件を與へる事は有意的に出來る。例へば肩を下げ、首を垂れ、身をすぼめて、悲哀の様子をして居ると、自然に悲哀の情緒が湧いて來る。そして悲哀の情緒が起ると、これに伴つて植物性器官の興奮、又は抑壓が生ずる。これは前に情緒の所で述べた定型的の表出であるが、ヨガの行者が、胃や腸の蠕動を盛にしたり、心臟を數日間乃至數十日間働きを制限して置くといふ様な事柄は、その表出に必要な情緒を起し、これを強める爲めに抑壓作用が働いて來る。そして、それを持續的有意的ならしめる爲めに、この情緒中樞と大腦皮質とを條件反射づければ、可能である。と一通りは理論的に云ひ得るが併し、實際に於て、この說明通りに行つてゐるかどうかは疑問である。

今迄述べて來た說明は、大腦皮質—情緒中樞—植物性神經上位中樞—植物性器官、といふ連りに依つて觀たのであるが、こゝへ抑壓が働き、これが條件反射的に結合して、ヨガの奇蹟現象が生ずると說くよりは、行者の實際に行つてゐる「行」を見ると、或種の「イキミ」が隨意筋の運動として見られるから、これは、更に、大腦皮質—腦脊髓神經—皮膚及筋肉といふ神經機構が加はつてゐるものと考へられる。譬へば、胃を故意に收縮させて見せる場合、內的に經過する神經機構、卽ち大腦皮質から情緒中樞への強い抑壓に依つて、情緒のエネルギーを下行させて、植物性官能の興奮を起させ、これに大腦皮質は、その意志を、自己の支配下ある腦脊髓神經系を通じて、胃に神經的連絡を持つ筋肉（隨意筋）に、遠心的の興奮（命令）を與へ、この方面から、胃の局限性の蠕動を誘發するのである。と觀た方が、納得出來る說明となる。卽ち之れを圖示すれば次の様に

なる。

命令

大腦皮質→腦脊髓神經→目的ノ臟器ト關聯ノアル筋肉←↑局限性の臟器刺戟

大腦皮質→情緒中樞→植物神經上位中樞→臟器

抑壓

行者が、胃を故意に收縮させやうとする場合、腹部の諸筋とか、横隔膜といふ様な隨意筋に或程度の緊張を起させ、この緊張が刺戟となつて、それと神經的連絡を持つ内臟に、影響を與へるのであつて、之の過程は、ヘッド氏帶（Head's Zone）の原理から說明が出來る。ヘッド氏帶といふのは、内臟に、或種の異常が生ずると、そこへ行つてゐる自律神經（植物性神經）の興奮となり、これが求心的に、その屬してゐる脊髓の興奮を促し、この脊髓の興奮は、そこから出てゐる神經を通じて、末端である筋肉又は皮膚の異常興奮となるといふのである。ヘッド氏は、これを臨床的の實驗に依つて研究した結果、内臟知覺神經は、其の所屬脊髓斷區の皮膚知覺神經と密接な關係を有するもので、内臟疾患の時に、一定の皮膚部位に知覺異常の現はれるのは、各臟器個有の後根に、略ぼ一致する脊髓斷區の、皮膚知覺領に顯はれると報道したのである。ヘッド氏のこの研究は、其後の神經學の發達に多くの示唆を與へ、内部（臟器）と外部（皮膚又は筋肉）との神經連絡が明らかにされたのである。皮膚又は筋肉の刺戟は、内臟に一定の影響を與へ、殊に、或部の外的刺戟（皮膚又は筋肉）は、それと關係のある。特殊の内臟の興奮を促すといふ事は、確定的の說によつてゐる。ヨガの行者が、胃筋を收縮させやうとする場合、腹壁諸筋、及横隔膜等に相當の緊强を起させるが、これに依つて、胃に興奮を起させるといふのは、恰度その部分は、胃の皮膚脊髓斷區として、神經的の連絡を有してゐる所であるからである。

　さて、今迄觀て來た、行者の奇蹟現象に就いてその生理、心理機制を要約すれば、强い抑壓に依つて起された內的過程（大腦皮質→情緒中樞→植物神經上位中樞→植物性器官、といふ様な退行作用）に、强力な意志（大腦皮質→腦脊髓神經→皮膚及筋肉の興奮が起き、これを一定の内臟との神經的連絡に依る、刺戟の反射傳導）が加はつて、目的の臟器の運動が行はれるの

である。併し、この作用は普通の狀態では不可能であつて、並々ならぬ、寧ろ異常な練習が要るのである。そしてそれが、情緒抑壓に關聯してゐるものだけに、普通のスポーツとか、藝事に於ける練習とは自ら異なつて、情緒に對應する爲めの苦行を必要とするのであるし、その爲めに、彼等は異常なる抑壓によつて、精神異常態を來してゐる。否異常な精神狀態にならなければ、斯様な奇蹟的現象は行ひ得ないのである。

(四) ヒステリー症、其他に見られる抑壓

本稿に擧げた四例の異常現象は、その中の一つを說明すれば、それで目的の大半は終つて了ふのである。後は唯各々の特異な點を說明すれば事足りる。何となれば、行者の行も、ヒステリー現象も、結局同じ抑壓に依つて生ずるのである。又聖痕現象も、精神的自殺も、ヒステリーの機制に依つて說明出來るからである。

聖痕現象は、神經症、殊に轉換性ヒステリーに見られる、スチグマタ現象と類似して居つて、唯ヒステリーと異るのは、ヒステリー性のスチグマタは、その表はれる場所が、患者の無意識を規定してゐる志向に從つてゐる。卽ちフロイドに依れば、ヒステリー性スチグマタは、性的地帶化された部分に表はれて來るものであつて、その部分は、願望の代償的表現(內體的轉換)の好發部位である。然るに基督教者の聖痕現象は、願望の無意識表現地帶としてゞなく、一定の原型(基督の受難像)に模して現はれて來るものであるから、この肉體的轉換は外部の物に依つて規定されてゐる。普通所謂ヒステリー性のそれは、願望といふ主觀的條件(內部的のもの)に依つて規定されてゐるもので、自己の願望の代償的滿足を與へる、最も好箇な場所に、リビード纒綿を行ふに對して、これは、外部の模型に依つて與へられた部分にリビドー纒綿を行つてゐるのだ、といふところの相違だけである。そうして、實際の、このスチグマタ機制にあつては、基督信者のゝは、エクスタシーの狀態に入つて潛在意識(サブ・コンシアスネス)的の現象として生ずるに對して、ヒステリー患者のものは、無意識(アンコンシアスネス)的現象として日常生活の狀態に現はれて來るであるから、基督信者のスチグマタ現象も、ヒステリー患者のそれも、本質的に違ふのではなくて、程度の差と考へて良い。

そこで、聖痕現象は、ヒステリー現象と同様に異常現象である。宗教信者の、信仰が偏よつて來ると、非常に神經症的になるもので、これは、正しい宗教的感情からは生じないとされてゐる。聖痕現象が喧傳された時、ローマカソリック教會では、これは正當な信仰では無いといふ事を發表してゐるが、宗教學上、高等な宗教には斯かる現象は肯定されてゐない。それは素朴な、原始未開人の宗教か、又は現在でも低級な、類似宗教と云はれるものに於て見られ、無知な信者の狂的な狀態を、奇蹟の名の下に煽り立てゝゐるもので、これは宗教心理を研究する者の、常に戒心して行はなければならない點である。

では聖痕現象の生理作用は如何と云へば、これは、ヒステリー症の様に、或る抑壓作用の結果として直ちに結果して來るのでは無くして、途中、宗教的對象に對してリビドー纏綿を行ふのであるが、これが原始素朴な宗教の様に未熟なものであると信者の歪められた儘のリビドーを、そのまゝの狀態で纏綿させて了ひ、何等の昇華方法を行はない。從つて、抑壓を持つた情緒狀態が、この宗教に依つて、更に助長され、大腦皮質への道が、對象に對する憑依（リビドー纏綿）に依つて不可能となるから、間腦の間で高揚狀態になつたエネルギーは自ら肉體的轉換作用として、植物性官能の方へ押し流されて來るのである。

高等な宗教は、情緒の大腦皮質への道を開いて情操化（宗教的情操）への昇華作用を行ふに對して、低級な宗教は、情緒を間腦の學だけで弄び、之れを下行（肉體化）させるのである。

精神的自殺（サイキックスイサイド）に在ても、ヒステリー現象と同一機制に依つて說明出來る。第一章に述べた樣に、ブリル博士が分析して居るが夫に向けられてゐた攻擊欲（死の願望）が、夫の死に依つて行き場を喪つて了ひ（對象纏綿を失つて）遂ひに、自分自身に還つて來て、自己破壞作用として働らくのである。「己れより出でたるものは己れに還る」とか、「因果應報」といふ宗教的の言葉が、この精神狀態に當て嵌るもので、精神分析學に從へば、斯樣な現象は案外多いのである。これは生理現象にも見られるもので、例へば、胃酸過多症に在ては、胃液は、食物が胃內に收容されて、胃壁を刺戟する事に依つて、こゝにある胃腺から胃液が分泌されるのであるが、これが異常な場合は、食物が入つてゐない時でも、分泌があり、その胃液の鹽酸度の比重が高まつてゐる。消化液といふものは、自體以外の物が、消化管內に入つて來た時、之れに集まつて行つて、化學的變化（消化）を起させ、自體化（吸收）するものであるから、物質が無い場合には働らかなくとも良い筈である。ところが、異常を來してゐると、胃液は絕へず分泌してゐて、食物を消化して了つても、分泌を止めない。從つて、消化するものゝ無い場合は、却つて、自分自身（胃壁）に對して消化の鋒先を向けて行く。その結果、胸やけがしたり、痛みがあつたり、又は潰瘍を起すに至るのである。それで、胸やけがしたり、痛む時に、何か食物でも、又は水を與へてやれば一時收まつて了ふのである。外部に向けられたエネルギーが、その向け所を失へば、內部に向つて來るといふ事は、自然の傾向であつて、精神分析學では、リビドーが對象に纏綿しやうとして、之れが拒絕されると、反對に攻擊欲が分離して、己れに向けられる樣になる。例へば、愛を注がうとした場合、相手に受入れられなければ、反對に憎しみが生じて來る、といふ、所謂「可愛さ餘つて憎さが百倍」といふ狀態になる。この攻擊欲が、對象に向けられてゐる間は、自分自身は安全であるが、一旦これが拒絕されると、（K夫人の場合は夫の死に依つて、對象纏綿を喪つたのである）分自自身に、この攻擊欲が向けられて、自己破壞の衝動として働らいて

來る。これが自我の方へ行けば、自己苛責となつて精神的苦痛を釀し出すが、肉體の方面に轉換されて行くと、植物性官能の毀傷となつて、色々の病的症狀を起し、それが更に極端になると、全面的の植物性官能損傷、卽ち死となるのである。この狀態は、無意識裡に終始して、意識されてゐないのである。若し意識されゝば、之れに對する防禦機制が働らくのであるが、抑壓に依つて意識に上らないのである。つまり、こゝにも抑壓に依つて、强い情緒のエネルギーが上向して、植物性官能の異常又は毀傷となつて現はれて來たのと見做される機制があるのである。

ヒステリー現象の抑壓機制は前にも述べたが、その肉體的轉換部位は、無意識的意圖に依つて規定されるといふ事の例を擧げれば分ると思ふ。最も手近い例は、東北帝大の丸井博士が報告してゐる、一ヒステリー性黑內障患者であるが、この患者は東北地方の或る小學校の若き敎師であるが、學校で突然昏倒して、それから視力障碍を來して了つたのである。東北帝大病院の加藤內科に入院して診斷を受けた所、何所にも眼に對する器質的疾患の箇所が認められない爲めに、ヒステリー性黑內障の診斷が與へられ、淨瑠璃にある、壺坂の話をして、ふとした動機で眼が開くもので、決して永久の盲目になつたのでは無いと云つて歸した。これが恰度、壺坂寺の澤市と同樣の狀態で眼が開いたといふ實例があるが、これを丸井博士が精神分析してゐる。

この敎師は、同僚で幼な馴染の女敎師と戀愛關係に陷つたが、校長より注告されて、その戀情を抑壓しなければならなくなつた。患者は彼女の愛に燃へてゐる時は、彼女に逢ふ事を唯一の樂しみとし、彼女の姿を見た後でなければ自分の敎室へ行く事が出來なかつた程だといふが、この戀情を强く抑壓しやうとする時に起る愛の精神軋轢、特に彼が今迄、常に樂しみにしてゐた、戀人の姿を見る事に對する强い抑壓、卽ち性的瞠視欲と自我との間に起る强い精神軋轢が生じて來たのである。そこでこの軋轢を緩和し、精神的苦痛を脫れる爲めに、之れを肉體的の苦痛に轉換して來たのであるが、この轉換して來た場所は、患者が平素最も强い定着を以てゐた眼に現はれ、この眼が、禁制された戀人に、注目しやうとする傾向(瞠視欲)があるのに反抗して、他へ向けやうとする强い努力と、周圍の者の眼を憚る心(卽ち誰かゞ監視してゐはしないかといふ懸念)の若しみが、若し、自分の眼が開いてゐなかつたならば、彼女の方へ視線が向く心配は無く、又周圍の者の疑ひの眼からも逃れる事が出來るといふ、無意識的な考へが原因となつて、一つの動機を契機として、視覺障碍を起した、といふのである。丸井博士の分析は、もつと詳細に亘つて根據を得て行つてゐるが、こゝでは、眼といふ場所へ轉換を起して來た理由の、存する所を知れば良いのである。

そして、これ等の機制の生理學的解決は、第三章、第四章の説明に依れば充分であつて、ヨガの行の説明よりも簡單であるから、縷々記述して、重複の煩はしさに惱む事は無いと思ふから省略する。

(五) 結論

さて、以上で觀て來た樣に、奇蹟異常現象といふものは、心理學的に闡明されると共に、これを生理學的にも解釋する事が出來るのであつて、抑壓に依つて生じた異常情緒がこの間に介在してゐるのである。正常の情緒の場合は、大腦皮質と植物性神經の上位中樞との連絡を正常な、生得的の型に依つて媒介するが、抑壓された異常な情緒が起ると所謂今迄見て來た樣な奇蹟・異常態を生ずるのである。そして、昔から云はれてゐた奇蹟現象が、決して眞の意味の奇蹟では無くして、異常現象であり、この異常現象は、今こそ、吾等の前にその正體が曝かれて、何等奇とするに當らない現象であるといふ事を明にした譯である。

本稿に於て述べてゐる樣に、所謂奇蹟異常現象の解釋は、今迄私の知つてゐる範圍で試みてゐる者は無い。精神分析學の生理學的の解釋は、アレキサンダー (F. Alexander) 一派の人々に依つて行はれてゐるが、この解釋に對しても私は眞に滿足しては居ない。私のこゝで論じた所の骨子は、情緒の機制であつた。情緒を以て轉換機制の仲介者とし、生理學的解釋に於ける不明の部分の充塡とした。そして、私はこの情緒の介在に注意を向けて、凡ての心理、生理機制を研究して行く事が、最も大切であるといふ事を主張するのである。例へば條件反射學に於ても、單なる大腦機制としてでなく、情緒の介在を考慮して行くべきものであると思ふ。

私は今、更に精神分析學の生理學的基礎に就いて考察して行かうとする意志を持つてゐる。これは本稿の前に於て試みられ、そして本稿に於て精神分析學的解釋を與へるに就いて、それの生理的機制も管々しく述べないで濟む樣にしたかつたが、これは相當大きな仕事である。併し私の精神分析學の生理學的基礎づけへの意志は不變である。この試みに就いて、生理學者の畑からの研究も出てゐるが滿足せしむるに足らない。却つて、精神分析學者をして、精神分析學は精神的事實であるから、心理學的對象として研究して行けば良いのであつて、生理學的研究は大して益は無いと云はせるに至つた。併し私をして云はしむれば、精神分析學が既に肉體と精神の兩方面に關係してゐる事實を取扱つて居り、精神分析學說が常に用ひてゐるリビドーといふ言葉も、これは單なる心理的意味を持つてゐるのでは無く、心理と生理との兩方面に亘つてゐるのであるから、生理學的見解も必要である譯である。一切の精神現象を生理學的に解釋しやうとするのは行き過ぎであるが、土臺として、(生理

的基礎づけ）必要であるといふ事を私は主張するのである。從來の生理學的解釋は、この行き過ぎを行つてゐるか、又は生理學的に不明な部分の存在に依つて、充分に心理的事實の基礎づけをする事が出來なかつた爲めかである。

本稿を進めて來るに從つて、最初の題目に餘り慾張り過ぎたといふ事を感じた。こゝに擧げた四つの項目の中、一つを採つて、それだけに就いて述べた方が良かつたと後悔した。その爲めに、もつと説明しなければならない專門的の事柄を簡單に取扱つてゐるので、理解に困難な箇所も少くない。例へば、ヨガの行者の行の説明の中、外部的の影響にヘッド氏帶、內臟運動反射といふ神經的機制に就いて、もつと解釋を與へるべきであつた。又、宗教的信仰の相違に就いても云ひ足りない所があつた。併し之れ等は又何かの機會に、もつと分り易く説明し度いと思つてゐる。

本稿の神經機能の説明を理解すれば、クリスチャン・サイエンスや、その他の精神療法の生理的機制が分り、又神經性の疾患に就いても、例へば、アレキサンダーの述べてゐる様な、慢性の心的刺戟が機能障碍を起し、之れが器質的の變化を起して肉體的症狀になるのだといふやうな事柄に就いても、理解出來る筈である。本稿に述べるところはまだ確定的の原理ではない。唯、一つの試みとして、批判されるべきものである。

後記

吾々は屢々、民間の精神療法や、類似宗教で、醫療で治らなかつた病氣が治つたとか、難治痼疾の病氣が一冊の本を讀んで快癒したといふ事を聞かされる。これには誇張と曲解と、誤傳と、錯覺と、無知とが加はつて、相當神話化されてゐるものがあるが、それでは全部が、斯かる誤りに陷つてゐて、眞實のものでは無いと斷定する事が出來るかといふと、不幸にして私は、自分の立場を固守してゐる醫家や、意識層の硏究を以て、人間の精神現象の全部だと考へてゐる樣な心理學者や、又は唯物論的思辯に慣されてゐるインテリ層の樣に、頭から否認して了ふ事は出來ないのである。寧ろ私は、かういふ階級の人士が、事實の觀察を怠つて、單なる机上類推を以て否定してゐる、非科學者的態度に對して、彼等の科學的自得を苦々しく思つてゐるものである。

民間の精神療法や、類似宗教で、病氣が治つたといふのは、簡單な精神病か、治るべき時期に到達してゐる病人か、又は眞に病氣で無かつた場合であると云ふのに對して、之れ等の方法で治つた者は眞劍に、醫療を受けて治らなかつた經過や、如何に自分の病氣が重態であつたかといふ例を擧げて、これが治されたのだから不思議だと云つてゐる。そして一方は之れを默殺

し、一方は所謂科學の頼りなさを益々唱道する。

肉體と精神の轉換機制が分れば、精神療法や、類似宗教に依つて、精神的原因のある病氣許りでなく、器質的の疾患も治るといふ事柄も了解出來る筈である。少くとも、醫療で無い斯様な方法でも、病氣を治す可能性を持つてゐるといふ事の證明が、私のこの論文に依つて與へられると思ふ。寧ろそれは、現代の醫療が見落してゐる部分を受持つてゐるのである。

精神療法や類似宗教は、奇拔に言動や、强制的な暗示や、神佛の名等に依つこ、精神の浮動狀態にある者とか、奇蹟好きな人間の依憑心を捉へて、之れを情緒高揚狀態に導いて來るのである。情緒の高揚狀態が、精神と肉體との轉換の契機になる事は、今迄述べて來た所であるが、從來の醫學や心理學は、これに就いては餘りに無知であつた。そして輕卒な醫家や心理學者や、インテリ層は、この不完全な學問を以て、他を非議しやうとして、所謂五十步を以て百步を嗤ふといふ様な愚を行つて來たのである。

併し、私は、民間の精神療法や類似宗教が、病氣を治す事の全部を肯定するものでは無い。これ等のものゝ中には、所謂眉唾物が相當にあつて、充分警戒しなければならないが、これ等の眉唾分子とか、又は誇張、曲解、誤傳、錯覺等を除き、醫學的知識を以て、その中に飛込んで、充分研究して行かなければならない事が多い。私はこれ等の事實に目を蔽はないで、正しい觀察を行つて、學ぶべき所を探り出さうと思つてゐる。（終）

奥村五百子の男性的性格

高木統他郎

明治維新の大革命が將に起らうとする時に當り、西海松浦半島の一海邊から起つて國事に奔走し、愛國を天下に説きつゝ大陸をも踏破開拓し、出征兵士の苦難を見るに及んで、遂には愛國婦人會の創立をするまでに大いなる活躍をなしたと云ふ奥村五百子女史の性格並びにその言行を分析觀察して見たいと思ふが、年少菲才にして思ふにまかせず、幸に大槻先生の加筆を得て玆に公表の榮を得たことを謝する。

「男と云ふものは悪いこと許りしたがつてどうにもならん。五百は女子に生れさしていたゞいたことを如來樣にお禮申してをります。」と。これは彼女の口癖であるが、これに對して小笠原子爵は「なんと云ふ皮肉な警句だらう。洵に女子の爲に萬丈の氣を吐いてゐると同時に女史が女性たる滿足……否寧ろ誇りを感じてゐる確たる證據ではないか。」と、小野賢一郎氏著『奥村五百子』の序文中に述べてゐらるゝが、私には少しく首肯し難い所がある。後節に於いて詳細に論證する積りであるが、私はこの言葉を彼女の女性としての劣等感の反動構成であると見たい。第一、高杉晋作と激論したり、西郷南州を相手に問答したり、近衞公と組打ちしたりするやうな彼女なら平々凡々な男の行爲はたか〲子供の悪戯位にしか感じなかつたのであらうが、このやうな行動の中に女性としての劣等感補償の努力がなかつたとどうして云へやう。本來ならば、彼女は男子として生を享けたい願望があつたことだらう。彼女の生涯を辿り見る時、屢々その著しき男性コムプレクスを認めるのであるが、只今はたゞ假定として云ふに止めて置きたい。

とにかく、彼女は一女性として、あらゆる苦難（陣痛）をのり越えて、數々殘した功績（子供）の中、愛國婦人會の創立（誕生）こそは、彼女の巨母として無意識願望を最も滿足させたものではなからうか。現今、同婦人會は約四百二十萬餘の會員を擁してゐると云ふから、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

彼女は弘化二年、舊小笠原藩の居城であつた肥前、唐津の釜山海高德寺に呱々の聲をあげた。父は奧村了寛と云ひ、二條治孝公の孫增千代であつて、高德寺の運命を挽回する爲、九歲の時養子に來、母は唐津藩士山田圓太夫の娘で淺子と云つた。幼少より彼女は旣に相當の男性コムプレクスを持つてゐたやうである。その事は次の逸話に依つて大體推察せられる。彼女は七歲頃から唐津神社の神官戶川氏に就いて稽古を始めた。入門當初、お淸書の時、半紙に「壽」といふ字を書いたが、餘り紙一杯に書いてしまつたので點の打ち所がなくなつた。そこで彼女は机の上にポンと大きな點（ペニスシムボル）を打つてしまつた。それを見た先生が注意すると「でも、先生はいつも字はのび〳〵と書くものだと仰言つたではありませんか」と應酬（理窟づけ）した。また、戶川氏の塾に通つてゐる唐津藩の男や女の子の中で、非常ないたづらつ子があつてよく女の子を苛めてゐたが或日女の子が訴へて來た。彼女はこれを訊いて憤慨し、いたづら子僧が唐津神社の柿の木に登つて、柿を取つてゐる時、長い竿を持つて來て下から盛んに突き廻して威嚇した。子供は痛い〳〵と抵抗してゐたが、遂に泣き出し「もう、いたづらしないから勘辨してお吳れ」と謝つたので彼女は漸く木から降してやつたと云ふ。彼女は二つ違ひの兄圓心と劍道した時でも、打込まれるとすぐ組打ちかゝつて兄の上に馬乘りになり「まいつた」と云ふ兄の聲のかゝる迄決して許さなかつた。これらの男性的氣魄は後年更に著しく彼女の行動言語に於いて認められるが、これは勿論男性器羨望（ペニスナイド）と密接な關係があらう。フロイドは「女兒は今や男性器羨望に陷り、そのために彼女の發達と性格構成上に拂拭すべからざる痕跡は殘され、また最も具合のよい場合と雖も相當な心的勞苦を支拂つてゞなければ、この嫉妬を克服することは出來ない。女兒が自分にペニスの缺如してゐることを容認すると云ふことは、彼女がその事實に容易に屈從したことを意味しない。」と『女性論』（大槻氏譯、本誌第二卷第二號）にも述べてゐる通りで、彼女の場合は最も不屈な形でペニス・ナイドを抑壓してゐると見るのが妥當だらう。

こゝで、父了寛に就いて些か紹介して置かう。養子に來て高德寺の住職となつた彼は勤王の志厚く、夙に學問に長じ、家庭教師まで置き、また京にも往復して宗教上の修行も積んでゐたと云ふが、公卿出であつたせいか多分にナルチスティッシュであり、人に對するに概して支配的な所があつたやうである。卽ち、常に志士を集めて、維新討幕の畫策に熱中したり、佛學生の私塾を寺に置いたりした。又、檀徒の者を始めとし、唐津近くの人々に對して慈悲深く、金錢を卑しとしたので何時も貧乏してゐたと云ふ。「買ふて食はせる高德寺」と近鄕での流行言葉が出來た程で、每日の中食の時など必づ四五人の客がゐたと云ふ逸話さへある。その反對に又誠に峻嚴で「高德寺のお目玉」と云へば泣く子も止むと云ふ位で、日常の一出來事として、或

男が墓の上に煙草の吸殼を落してゐるのを見て「死んだ者の靈を辱しめるものだ」とその男の頭の上に大きな吸殼を落して無禮を戒めたと云ふ逸話もある位である。討幕の畫策に熱中してゐたもの丶、一寺の住職として、現實生活より遊離し難い環境にあつた故、自ら寺を志士の集合所とし、又後年その補償としてか娘五百子を長州へ密使に走らせたことがあつたと云ふ。彼の教育態度は實に一方的であつたやうだ。五百子が十四の年ふと、思ひ立つて大阪の叔父を賴つて家出した。彼女を船中で捕へ、無理に連れ戻さうとした事があつた。又病氣の時、娘の熱心なる徹夜の看護に感泣した事もあつた。彼女の後年の崇拜者は西郷南洲、近衞公など父親型の人であるが、そこに彼女のエディポスを豫想するのは早計かも知れないが、その談話記を試みに引用して見よう。

「私の親父は婦人たりとも國民には違ひないから、決して國家と云ふ事を忘れてはならぬと幼少の時から私へ申付けました。さうして幼少の折から軍書本を讀ませられまして、人たるものは仁義の道に明らかでなければいかぬ。又自分の子供を躾けるにも人道に離れたことをせぬやうに國家を重じて國民たるの義務を忘れてはならぬ、と常に訓戒せられて居りました。軍書本は多く太閤記とか天草軍記とかの類でありましたが、仙臺騷動の政岡の行ひの如きは殊に注意するやうに敎へ込まれました。私の十三、四の頃に井伊大老が櫻田門で斬られ、こゝに王政維新の萠を生じて來ますと、父が申すには是からは天皇陛下に命を捧げて働くやうにせなくてはならぬ。兄の圓心は相續人だに依つてどうすることも出來ぬが、お前は他家へ緣付く者であるから戰爭に就いての仕事はお前に申付ける。兄の圓心より先に斃れろと斯う云ひますので、終始其の心掛けで働き、兄の圓心と共に遊戲するにも弓をひき、十三歲の時から擊劍を習ひまして婦人らしき敎へは餘り受けませなんだ」と

「お前は他家へ緣付く者であるから戰爭に就ての仕事はお前に申付ける」とは實に妙な言草ではないか。他家へ嫁がなければ戰爭しなくともいゝと云ふのであらうか。女が嫁に行く事と戰爭に就ての仕事と一體何の關係があらう。この矛盾、混同の無意識心理は要するに息子よりも娘を重視したことへの申譯的誤間化しであらう。

次に、彼女のサディズムに就き、一、二の實例を拾つて見よう。彼女は六歲頃から三絃舞の稽古をしてゐたが、これは母親への感傷的愛着が基となつてゐるやうである。彼女は何事にも上達早く、その後も義太夫、長唄なども母に習つてゐる。既に十三、四の頃には唐津で評判になり、當時、唐津神社の祭禮に町の人々が遊藝を奉納する風習があつて、町ではこれを一つの名譽とし、誇りとしてゐたので、彼女も一度是非其處に出て藝を演じて見たいと望んでゐた。或日父に請ふたけれども、家風の品位云々で許されなかつた。露出慾は相當なものであつたと思はれる。父の不許可に對して彼女は素直にその望みを絕つてはゐるが、老年京都支部會小宴や東伏見宮の御殿にて唄つたり、踊つたりしてゐる。

又、十八歳の時、國事益々危急に迫り、攘夷の議論沸騰する頃、彼女が始めて公務に携つたのは父の命（藩令と云ふ說もある）を帶びて長州に密使したことである。その折の扮裝は、髮を大たぶさに結ひ、義經袴を着け、腰に朱鞘の大小をたばさんだと云ふから、彼女の無意識願望は充分に滿足された事であらう。長州に入國し、龜山八幡の番所で多數の長州武士に取り圍まれた時、「長州には强い男が居らぬと見える。女一人がそんなに怖いか？」と、悠々啖呵を切つてその男性コムプレクス振りを示してゐるが、こゝで騎兵隊長高杉晋作が出て來なかつたら無難には過ぎなかつたらう。このやうな彼女の性格は、結婚生活に如何なる影響を與へてゐるであらうか、讀者諸賢には略々御推察出來ると思ふ。

二十二歳の冬、父の選定に任せて、同宗の福成寺大友法忍に嫁することになつたが、この婚姻には相當政略的な意味が籠つてゐたらしい。その中には、父が寺院の實權を握る策として、成可く裕福な寺の有爲な人物をと云ふ腹もあつた。大友氏に嫁いだが不幸にして、彼女の二十五歳の春、病の爲に夫は不歸の人となり、この最初の結婚生活は僅か二年餘りだつた。この間に父了寛も逝去し、彼女は同時に二人對象を續けて失つてゐる。三宅氏の言行錄の一節に「大友氏が世を去らなかつたならば彼女はやさしき一家の主婦として、しかも敏腕に夫を扶けて、必ず立派に良妻賢母の實を擧られたに相違あるまい」などゝ記されてあるが、如何であらうか。二年間の夫婦生活で良い女房ぶりを示したとしても、それは何時破られるか實に不安な危險なもの藏してゐたと想像せられる。しかし、大友法忍にしろ、後年結婚した鯉淵彥五郎にしろ、共に彼女の子供（若き燕）のやうである。殊に、後者は一層、親子關係を彷彿させるものがある。彼女は自分が完全に女の立場に落されるのを嫌ひ、事業の多產性の中に昇華逃避して行つたのではあるまいか。

二十八歳の時、水戶浪士鯉淵彥五郎と戀愛から再婚した。彼は藤田東湖の門人で、勤王家で國事に奔走した、彼女の娘時代からよく寺へも來た同志だつたと云ふ。再婚の心理動機に就いては、資料不足の爲、審かでない。この結婚は皆から反對されたが、母や兄の反對を執拗に押切つたと云ふ事は、父が既に居なかつたことにも一因としてゐやう。二人は餘儀なく、故鄕唐津を離れて、肥前平戶に侘しいながら世帶を持つことになつた。こゝで面白い挿話がある。それは長女敏子が生れて、急に戶籍（彥五郎の入婿）の件で水戶の阪田家（彥五郎がその相續人）へ出掛て行つた。その旨を先方に話したが、大反對を受けたので、彼女は滔々辯舌を振ひ、一騷動の後漸く同意を得た。彥五郎が自ら出馬しなかつたのは坂田家に對する罪障感があつた爲でもあらうが、それは母親に何から何迄世話をして貰ふ幼兒的心理を思はせるものがある。第一、自分が奧村家へ入籍するその事が已に幼兒性を示してゐると云はなければならない。この傾向を彼は大體、五百子と別れる迄持ち續けてゐたやうであ

る。その間、彼は佐賀の亂、西南役にも參加はしてゐるが、妻五百子程の活躍はしてゐないやうだ。又、彼女が針仕事、茶賣り、古着屋等の商賣をしてゐるに反し、彼はさう云ふ事には全然駄目であつた。或時、彼が茶を賣りに出て途中、川を渡る時茶を濡して了ひ、それを乾かす爲、山で終日過し、その間、謠を唄つたり詩を作つたりして、やつと夕方頃家に歸り、「今日はお蔭で、よい詩が出來た。」などと呑氣なことを云つてゐたのは如何にも恐い妻の前での照れかくしのやうに思はれる。一體、商賣家計を一切妻に委せ、獨り書畫に耽り、風流韻事に沒頭する彼は妻に敗北してゐることを思はせる。これに反して、男性コムプレクスの强い彼女は、生計に、育兒に努め、又父の遺言通り、佐賀の亂には江藤新平に加擔し、西南役には西鄕に與して、國事に奔走した爲、元來幼兒的な夫の退行願望を一層助長し、殆ど神經症に迄追込んで、遂に兩者合意の上十七年間の夫婦生活を解消して、彼女は三兒（敏子、光子、勢一）を連れて唐津に歸つた。十七年間の長き夫婦生活を解消した事情は彼等が互ひにその近親緣者の反對を押切つた手前のため長い間の離婚願望を抑へてゐたことを想像せしめる。尙、この場合、子供を連れて出た彼女の心理はペニス・ナイドで說明出來る。

×

これより後半生、彼女のリビドーはひたすら國家、社會の諸事に纒綿されて行く。夫婦生活に於て、彼女は戰爭の仕事に參加して僅かに滿足してゐたものゝ、依然、家庭が主體になり、自由に翼を伸ばす事の出來なかつた爲、自分も夫の如き狀態に並行する傾向に不安を感じ、超自我、自我が提携し、敢て訣別した事も一因として擧げられないであらうか。尤も、その後彼女は長男勢一とも別れてゐる。彼の談にも「數へ年十一の時、父に生別し、十三の時母に別れました。（中略）母に對しては、たゞ『きつい母』と云ふ感じしか殘つてゐませんでした。しかし、一面隨分やさしいところもあつて姉妹に踊りを稽古させた位です。」と。彼にとつて「きつい母」だつた事は今更申す迄もないだらう。別れた事情は判然としないが、前述の談話にも「父に政岡の行ひの如きを殊に、注意するやうは敎へられた。」云々とあつた。これが相當關聯性を持つのではないだらうか。何故ならば、政岡のわが子を殺して迄、主君に盡さうとする良心的な行爲の中に彼女は無限の魅力を感じたのであらう。折角夫から引取つて來た唯一の息子を僅か二年間で手離す事は彼女として苦痛であつたらうが、敢てそれをなさしめたものは如上の心理であらう。そして娘たちを離さなかつたと云ふ事にも何かの事情があつたのであらう。

良人と別れた後の彼女の行動は實に興味深い象徵的なものさへある。國會が開設された明治二十三年、彼女等が候補に推した天野爲之が反對派の襲擊に遭つた時、彼女は同志と現場へ馳せつけ、負傷した彼に向つて先づ「貴方は敵に刺された時、痛

いツと云ひましたか」と問ひ、「いや、痛いとは云はなかつた」との彼の返答に始めて援護したと云ふ。又、二十五年、議會開設後の總選擧に於いても、彼女は一方の旗頭として、多數の部下を指揮し、時の政府の干渉に反抗し、偶々時の內務大臣品川彌次郎が唐津地方に來る情報に接して、彼女は味方の有志四萬人を集め、城山に集合して示威運動を行つたので、品川彌次郎もさすがに膽をつぶして逃げたと云ふ。これらの挿話に共通する心理的意義は、彼女の男性に對する去勢威赫にあるやうに思ふ。第一、敵に傷害されて苦しんでゐる天野爲之に向つて「敵に刺されて痛いと云ひましたか。」と問ふなどは皮肉と云ふより寧ろ非禮な言葉であるが、これに類する言葉は世の親達の口から屢々訊く。喧嘩に負けて來た子供に「毆られて泣く奴があるか。そんなに痛くて泣んだつたら、もう喧嘩なんかするな」と。次に、議會開設後のデモストレーションも意味深い。彼女は西鄕と城山を複合してゐる。西鄕とは福岡の大獄の時、博多で會ひ、その後、父の如く慕ひ、城山の露と消えた折、彼女は大いに泣いたと云ふ。さて、城山に有志（子供達）と立籠つて、內務大臣をおどし逃げさせてゐる。

×

さて、故鄕に於ける事業が一段落して、彼女は朝鮮に渡つた。その經緯を少しく述べよう。奧村家の祖は釜山海高德寺の開山であり、釜山海の號は後に豐公の賜へる處で、高德寺がもと釜山にあつたゝめである。その因緣淺からずして、彼女の兄圓心は明治十年に東本願寺の命を受けて布敎師となり、釜山浦なる東本願寺別院に行く事になり、次いで彼女も渡韓した。一時資金の問題で、行惱みの形だつたが、時の外務大臣大隈伯の理解ある斡旋で巧く纒り、又、近衞公、二條公、小笠原子爵や、長岡、堀內兩將軍の贊同と激勵もあつた。

これ以前、彼女と兄との交際は不和だつた。と云ふのは結婚問題もあつたが、それより西南役に於いて、兄と意見を異にし彼女は西鄕黨、兄は宗敎關係から政府方へ、兄妹とも各々一方の鬪將（兄の方は怪しいが）となつた。しかし、同志の者にとつて兄の存在が不利だつたので、遂に彼女は自らその刺客の役を買つて、兄を殺さうとしたが、彼の逃亡の爲果されなかつたと云ふ。これに就いて異說もあるが（彼女が味方に默つて逃亡を勸めたとも、又彼は殺される覺悟でゐたが寺男が强制的に逃亡を勸めたと云ふ）いづれにしろ、幼少時より妹の尻に敷かれてゐた彼は、妹の劍に對抗出來ぬものがあつたらしい。第一、彼女の韓國行も布敎地に於ける兄の苦難なる報知に依つてゞある。その前、岩倉卿が二人の中に立つて和睦させたと云ふ。

第一回は視察に、次に彼女は唐津より約百名引連れて、光州に赴き、日本村を建設し、そこに實業學校を建て、又殖產工業を起した。彼女は暫く、同地に滯在し、學校で訓話してゐた際、鮮人達から石や礫の襲擊を受けた事があつた。鮮人達は自分

等の土地を取りに來たのだと思つたのであらう。この時、彼女は日本村の前途が駄目になつて了ふので、人々を宥めて我慢したと云ふ。幸にこの事件は大事に至らなかつたが、彼女は單に、日本村の前途の爲我慢したのであらう。

その後、彼女は時々歸國したが、氣候や疲勞の爲、健康を害し、一時靜養した。快復後、今度は布教視察の爲、南淸方面へ出掛けた。歸途、第二の故鄕光州へ寄り、木浦より釜山へ向つた。こゝで又、面白いエピソードがある。彼女は釜山迄來たが相憎日本への便船がなかつた。折よく、その時八代大佐の坐乘する軍艦宮古が入つて來た。かねて懇意の間柄だつたので日本迄、乘船するやう、事なげに賴んだが斷られ、尙今度は禮を厚うして懇々と願つたが「いくら貴女の賴みでもこれ丈けは駄目だ」と矢張り聽入れないので、彼女は徐ろに懷中より書面を差し出したと云ふ。それは、海軍大將伊東祐亨から「在韓帝國軍艦諸艦長殿」に宛てた紹介狀で、

拜啓　陳者肥前唐津奧村五百子は眞宗大谷派の熱誠なる信者にして數十年來千辛萬苦を積み國家に盡瘁候事不尠兩三年前より更に韓人感化之目的を以て奮然渡海し光州に於て實業學校を創立し懇諭善導着々其效を奏し居候。就而は萬一同人此手紙持參の上は軍艦に乘込の義願出候節は特別の便宜を與られ候樣公望致候也

とあつたので、これには八代大佐も驚いて、「之は一言もない、奧村さん、隨分人が惡いね。」と云ふと「いゝえ、大佐が餘り忠實だから、一寸からかつて見た迄です。」と彼女は答へたと云ふ。

彼女が愛國婦人會を起すに至つた契機は北淸事件の時に從軍した事より始まる。彼女は北淸に事あるを訊いて、朝鮮に渡り漢城に滯在して居つたが、各國聯合軍が北京城を陷れた時に東本願寺から我が戰死の軍人を弔はうとして、連枝を派遣せらると聞き、切に請ふて南條文雄博士の一行に加つた。戰場に於いて、彼女は數多兵士の慘憺たる苦戰の跡を視察して、こゝに始めて軍人遺族を保護する事業に一身を捧げようとし、仁川居留民役所の樓上で先づ、その第一聲を擧げ、次に釜山で演說し、歸國後、早速近衞公、小笠原子爵其他の人々に、報告を兼ねて戰地の苦難な有樣を述べ、軍人遺族救護の急務を說いた。彼女がそれ程慘憺たる兵士の苦戰の跡を見て來たならば、何故ナイチンゲールの如く、クラ、・バートンの如く、直接戰場に於いて將兵救護の任に活躍しなかつたのだらうか。城山に四萬人の同志と立籠つたり、未知の地へ百餘名の人々を引連れて行く彼女なら決して不可能な仕事ではない筈だ。併し、彼女は遺族救護と云ふ當時、普通人の氣付かぬ所に頭腦を動かしたのだと常識的說明するだらう。

では、彼女は何故、婦人會なるものを提唱したのだらうか。これ程の國家的事業ならば、男性の協力も當然あつて然る可き

筈であるのに、その協力を求めなかつたのは救はれるものが女性である限り、救ふものも女性でなければならなかつたのかも知れない。薬瓶を持参で北は北海道、南は九州の果まで「半襟一掛の用を節し其の資を積みてこれに充てよ」と提唱し、遊説しつゝ全國の婦人に公共的精神を鼓吹したことの一事を見ても、容易に首肯出來る事と思ふ。一體、「半襟一掛」の提唱そのものが心理學的に云つて面白い。半襟は婦人の象徴であらう。殊に、桃色や紫色の色とり〲の半襟は男性を魅力せる所のエロティッシュなものである。それを剝奪し去る事に依つて、自分と同等の地位に落して自身の感情亢奮を醫しつゝ、他方男性に對抗する準備運動をしてゐたのだらう。

彼女の最後の活動は日露戰爭中、戰場に出征兵士を慰問した事で、歸國後身體の疲勞と衰弱の爲、引退した。盛大な送別宴の席上で彼女は朗々その音吐の中に謠曲「船辨慶」を舞ひ、又、薄汚い舊小使部屋の住居より「世のちりをはらうて夏の月を見る」の一句を殘して飄然、唐津へ歸つたと云ふ。翌明治四十年二月、病の爲京都帝大病院に於て親友廣岡淺子に守られつゝ安らかに永眠した。

凡そ、謠曲「船辨慶」と云ひ、俳句と云ひ、彼女の心理は誠に最後迄端的に、典型的に表現されてゐる。幼少時、果し得なかつた唐津神社の舞を高貴の人々の臨席する晴れの場所にて舞ふことの出來た事は、今迄活躍して來た事々に對する云はゞ結びであり、同時に無意識願望充足の最高點であらう。「世のちりをはらうて夏の月を見る」は前述から推すと必然的に辭世の句になる。月の象徵はこの場合、母でもあり、如來樣である。所謂、涅槃願望象徵に外ならないのであらうであつた事、容認し難くはない。尙、維新當時の時代的背景が彼女のコムプレクスを助長し、少なからぬ影響を與へた事は契機として最も大なるものであらうと信ずるのである。（完）

附言——私は彼女の私生活については何一つ知らない。彼女に就いて豐富なる資料をお持合せの方々かから敎示されゝば幸甚である。資料は小野賢一郎氏著『奥村五百子』大久保高明代著『詳細傳』並びに手島益雄氏、三宅邦太郎氏の各『言行錄』より採取した。書く可くして書き得ず割愛した言行も少くないが、若し、その中より別の發見や論說が生れたとしても、大體以上の解釋がその妥當性を失ふ事はないやうに思はれる。

心理家としてのシュニツツレル（テオドール・ライク）

黑子昌彦 譯

念慮の全能（續）

然しこの典型的な主題に對する我等の解釋の前提となつてゐるのは、ロイマンが自分の念慮に一種そのやうな力が具はつてをり、その力のために他人の運命の歩みが影響を與へられるといふ事なのだ。このやうな現象は神經症患者に常に見られる所であり、大抵の場合、そのやうな影響などありつこはないと敎へる一層立優つた見解に反抗して現はれるものだと云ふ事を、我等は知つてゐる。然し、患者等にとつてはたゞ考へたゞけの事と、實際に行つたことゝは同じ意味があるのであつて、そのやうな「神經症的價値觀念」に對しては何としても反抗することは出來ないのである。或る魔術的な願望力を認めるそのやうな原理を名付けて、我等は全能感（念慮全能感）といふ。神經症患者と、健康者とを區別する限界は、極めて曖昧である。前者はそのコムプレクスの克服が未完であり、後者はそれに成功してゐるだけである。我々健康な者でさへも屢々、自分達の知性の聲に反對して、かうした虛構の關係に信を置き勝ちだといふ事が認められる。※

註　ゲーテは、靈的にも心的にも健全なるものゝ典型と考へられてゐる。而も尙、强迫的な思考結合の上に建てられたこの種の迷信が全然なくもないといふ多くの例證が彼の場合にもあるのである。例へば、『詩と眞實』の第一部第三篇に、彼が子供の時、劇場で、非常に可愛いゝ綺麗な一人の男の兒のゾロタンツ（獨舞踊）を見たと述べてゐる。幼いヴォルフガングは其の時、何氣なく「朝の紅顏は夕の白骨」といつた。その子の母親が、たま〳〵彼の傍にかけてゐたが、「この言葉でその夫人は氣持が白けたやうに見えた。彼女は私を屹と見たが少しでも離れることが出來るやうになると、自分の傍から離れて行つた。私はそれつきり、別に深く自分の言葉を念頭に置かなかつた。それから後間もなく、その子供がもう出演しないで、病氣になり、而も非常な危險狀態にあると知つた時、その言葉がふと思ひ出された。」

ゲーテは更につけ加へてゐる。「時ならぬ、否其場にふさはしくない言葉に依る、かういふ豫言は、古人の間には既に知れ渡つてゐる。そして信仰や迷信の形式が、全ての人民、凡ゆる時代を通じて常に同一狀態である事は非常に注目に價することである。」と。
全ゆるかうした現象が同一の心理機制に依つて生ずる事を自認する時、我々にはこの種の事がそれほど注意に價するとも思へなくなつて來るのである。フロイド著『トーテムとタブー』の中の「アニミスムス、魔術及び念慮の全能」の章を參照のこと。

この典型的な主題は結局「念慮の全能感」に歸一するといふ我々の推定が、若し正しいとすれば、この願望がシュニツレルの作品中に於いて一層明瞭に表現せられてゐるのを我々は見ることが出來るであらう。同じ事を『ベアトリーチェの面紗』の中で公爵が、彼の需めに應じてフィリポ・ロスキーが自分の所に來ようとしない時に云つてゐる。

「もうわしの願望は何の力もないものになつてしまつた。
前には、何か一寸心に浮んだばかりで未だ口に出して云ひも終らない中に、
ちやんと自分の望みが實現せられてゐた時もあつたんだが。
以前ならば、早く逢ひ度い〳〵と思つてゐたあのフィリポ・ロスキーが
未だ我々の旅行の途中で、いや、それよりも早く、未だナポリかローマに居る間に
ヒョツコリ目の前に現れたとしても、わしはそんなにびつくりはしなかつたらう……」

又、『ベルタ・ガルラン夫人』の中でその女主人公は、彼女の女友達の病氣と、遠くにゐる愛人に關する自分自身の希望との間に一つの關係を認めてゐる。この關係の本質は、實は相互影響である。「アンナの病氣のために彼女自身の希望が影響を受けてゐるやうに彼女には再び思へるのであつた。アンナが丈夫なら手紙は必ず、彼へとゞいてゐたであらうに……。彼女はそれが馬鹿々々しい事であるとは知つてゐたが、それを防ぐことは出來なかつた。」また或る他の個所では、「若し今日エミールから別の手紙が來たとすれば、アンナは死ななければならなかつたらうか。」長編小說『曠野への道』の最高頂であり、且つ大團圓と見られる個所は、そのやうな强迫觀念と自己批難とを描いてゐるものであつて、この强迫觀念と自己批難とは念慮の全能と云ふことがその前提となつてゐることは極めて判然としてゐる。「ゲオルグは若い娘と關係を結んだ。そして彼女はみごもつた。臨月に近づいた頃、ゲオルグは休養の爲めの短い旅行をし、アンナの陣痛が始る僅か前に歸つて來た。その子供は生れると間もなく死んだ。臍帶で絞められたのであつた。

彼の子供の死に附隨してゲオルグには反省の癖がつき、それは、いよ〳〵不快さを增して行くばかりであつた。かうした反

省癖の結果は、ゲオルグが友人ハインリヒ・ベルマンと交した會話の中で見えてゐる。「ハインリヒ、僕の尋ねる事を笑はないで聞いてくれたまへ。子供が生れない前にそんなことで死ぬといふことは、何か其處に、當然なくてはならない思慕の心が足りなかつたからだとは思はないか。愛情が足りなかつたからだとは思はないかね」つまり、或る美しい海邊に滯在してゐた一夏中、彼は子供の事だけでなく、その母親の事も忘れてゐたのだつた。彼は旅で會つた或る女に深い情熱を傾けてゐた程、まるつきり忘れてゐたのだ。「今となつては、それでもこの忘却と子供の死との間に、何かしらゆかりがある、かう考へずには居られないのだよ。それとも君は、何のゆかりもないと思ふかね」と彼は告白してゐる。

我々の精神分析的見解に依れば、このやうな因緣は、確に存在する。たゞそれは現實的な因緣ではなく、心理的な因緣である。卽ち精神生活の結合でさへもある。然し、この因緣をより精細に說明する前に、片付けておかなければならないことがある。それは、此處に我々の想起する文學的な記念作品である。同じやうな場合がイプセンの『建築師ソルネス』に見られる。其處でも、建築師の二人の子供の衰弱と死とが彼の抑へることの出來ない名譽心のせいであるとして、建築師の懺悔が取扱はれてゐる。同じ作家の手になる『小さいアイヨルフ』は同じやうな非難から生れた精神的な停滯をもつと鋭く描いてゐる。アルマースは肉慾に耽つてゐる間に、それが原因となつて、彼の子供は不具になつたのを知つてゐる。そしてリータがアイヨルフと分け合はなければならぬ筈のアルマースの愛を獨占しようといふ願望は殘酷な方法で實現される。彼女の願望が恰もその子供を殺したかのやうな重苦しい自責が彼女を苦しめる。

かうした主題が、文學の表現の中にまたしても出て來ることは恐らく、文學史家が必ずこゝで確認することと思ふが、文學的表現關係を遙に超えて、種々の心理的機制の中にも同樣なものが見られるのである。前者と同樣に、此處でも亦、子供の死が取扱はれてゐる。そして何れも、子供から免れたいといふ秘められた願望が、最も重苦しい、良心の葛藤を、結果として惹き起してゐる。

死んで吳れゝばよいといふ願望が子供に對してだけでなく、その愛人に對してさへも抱いてゐるといふ事は、アンナの分娩中にゲオルグの考へてゐたことを見れば分る。「今、女は下にねてゐて而も死にさうなのだ。……彼は、はつと身を震はせた。そして考へた……女は苦しがつてゐる。ふと、女は死ぬのだと、吾しらず唇にもれた。だが、それにしても、どういふわけではッとしたのだ？　何といふ子供らしい。そんなやうな豫感でもあるかのやうに……」

かうしたうつかりした言葉さへもが「アンナが死ぬとよい。そして自分は全ゆる不安と全ゆる責任から解放されたい」とい

ふ無意識の願望に依つて、決定される。或る人に對する强い性的結合は總て憎惡と敵意とをこめた、かうした暗流をそれ自身の中にかくしてゐる事は、今や我々に極めて有り得べき事となつたのである。シュニツレルはかうした種々の事情を、繰返し描いてゐる。然し、その事を旣にラロシュフコーは知つてゐたと見えて「男が女を愛すれば愛するだけ、憎む氣持が起つて來るものだ」と云つてゐる。

このやうな願望の根柢をなすものは、性感と云ふ地盤である。* このやうな性感は受胎や出産と云ふことゝは關係なく、それ自身が目的であつて、それ故己れに復讐し、且つ贖はれる。

註 『曠野への道』には主人公のかうした願望が極めて明瞭に、度々現れてゐる。グラーツェが無氣味さをちつとも感じなかつたと彼女についていはれてゐる時にも、右に主張されてゐる見解の確證のやうな感じはないであらうか。「何かこの氣持に似てゐると思はれるものが、男の人にだかれてゐると判りますわ」と彼女はゲオルグに云つた。彼女にも、はじめはそれが謎のやうであり、後になると、何であるか判るやうな氣がした。彼女け、醫者の證言によつて不姙症ときまつた。それ故に享樂の最高の瞬間が、いはゞ無意味になるやうなことが必ずあつたに違ひない。

このやうな全ゆる空想の背後には、責任のない、次いで起る義務を引き受けようとしない情慾への願望が隱されてゐる。これ等の文學に出て來る人物は恰も彼等の願望が宇宙の指圖でもあるかのやうに振舞ふのである。彼等の願望はたゞ念慮であるだけでなく、また現實の父である。かうした面から見れば、彼等の態度は殆ど神的とも名付けられる。我々は、今やフロイドの『萬象有靈觀（アニミスムス）、魔術、並に念慮の全能感』（『トーテムとタブー』の內）についての詳論から、この精神的態度が事實上原始人と子供との類似した自己評價の心理的代償であるといふことを知る。從つて、このやうな人間が、自分自身に具はつてゐると考へてゐる力の範圍が、非常に大きく殆ど神のやうであるとすれば、彼等はその「病弱な良心」（イプセン）に依つて、彼等が人間的な、餘りに人間的なものに極めて接近してゐる事を示してゐるのである。といふわけは、神々にとつては善惡の別は存せず、焦心も懷疑も神々を苦しめるものではなく、唯人間だけが道德の禁制を知り、そして道德に直面して、彼等の願望が惡を贖す力を有することに就いての責任を感ずるからである。（未完）

リットン・ストレイチー（アンドレー・モーロア）（續）

岩倉具榮譯

歴史に於ける觀察點の問題

さて愈々觀察點の問題であるが、凡ゆる歴史家は觀察點を持つべきであると、ストレイチーは主張する。彼にはその觀察點がある。彼は離れた點から觀察してゐるやうに見えるが、それは唯外見だけである。彼は力を込めて憎んだり愛したりする。特に憎しみに於いて力瘤が入る。その憎しみを警句といふ美しい網の下に隱しつゝ、その攻擊力を增してゐる。自分は押付けたり暗示したりはしない、唯曝露するだけだと彼はかつて宣言した。併し之は半分だけの眞理に過ぎない。彼は控へ目にしたゝめに暗示することになつたのであり、省略したゝめに押付けることになつたのである。「さあ、どれでも好きなカードをおとり下さい」と手品師はその一組のカードを吾々に差出し乍ら云ふ。併し彼は吾々にかう選ばせてやらうと如何に注意してカードを揃へてゐることとだらう！

ストレイチーの觀察點とは何か。彼の獨創性は、彼が十八世紀フランス人の思想と調子とを未だ非常にヴィクトーリア朝風のイギリスに導入したといふ事實に存する。『優れたるヴィクトリア朝の人々』の佛譯者、エム・ジャック・フルゴンは、ストレイチーが多くの若い英國人にとつて如何に彼等の思想の指導者として立つてゐるかを說明する重要な行文を引用してゐる。ストレイチーはかう書いてゐる。「今日吾々の文化は再びラテン要素に歸りつゝある、吾々の祖父を囚へたゲルマン風の影響と離れ、機敏で、よく整ひ、餘り善過ぎないものは好むことに向ひつゝある」言葉をかへて云へば、ストレイチーはカーライルや、グラッドストーンに對するイギリス人の反動を代表してゐた。その點に於いて彼の働きは一傳記家以上のものであつた。彼は文體及び感情に於ける强調を時代全體から一掃した。

彼は殆どヴォルテール派、或ひはもつと正確にはアナトール・フランスの弟子とさへ貼札をつけられてもよかつたらう。彼は雄辯嫌ひであつたが、殆どそれと同じ程、神祕主義を嫌つた。「不合理性もさることながら、ブレイクの神祕主義――實は凡ゆる神祕主義に、卽ち、人間性の缺如にもつと重大な異議を抱く。

神祕主義者の信條は……妥協のない高揚の頑冥さとなつて、普通人の上に恐ろしく、殆ど殘酷な衝動を伴つて、襲ひかゝつて來る。それの要求する犧牲は、それの提供する神聖さにも拘らず、餘りにも莫大である。魂を得るとも、全世界を失ふなら何の得る所あらんと、人は叫び度くなる。」

ストレイチーは自分自身で十八世紀の人間であることを十分に感じてゐるので、スタンダールがロマンティックな態度に對して讃美してゐるのを非難してさへゐるほどである。その態度といふのは、帝政時代のフランス人にあつては、極めて不思議に論理と正確さとを伴つてゐる。「から云ふフランス的性質にはイギリス人は特にぴつたりしないものがあるのである、彼等は隣人が有頂天になつてゐても決して感動しない。彼等はフランスの古典劇の『高尙』な修辭に反撥を感ずる。……ベイルの『名譽の情操』について激越に書いてゐるモーリス・バレーから判斷すれば、それこそ偉大さへの彼の眞の主張である。名譽の情操は大いに宜しいと、海峽のこちら側ではさゝやくのが常である。併し、おゝ、ユーモアの感情もやはり少しでいゝのだ」

ストレイチーはどんなに十八世紀のフランス人であつたとしても、彼は極めてイギリス風にさうなのであつた。彼をヴォルテールと比較するのは極く大ざつぱな併置であらう。彼の嘲笑はそれほど直接的でない。ヴォルテールには機智があるが、ストレイチーにはユーモアがある。イギリス人の様に內氣で情熱的な淸敎徒にとつて、ユーモアは喜劇の一層確證的な形式である。何故なら、それは一層隱されてゐるから。何らの敵意なく云はれたことに人は怒るわけに行かない。一寸した眞似事には怒りも出來ない。況してや一寸引用されたからつてなほさらだ。ストレイチーが何ものかを、或は何人かをやつつけようと思ふ時には、彼は只引用するだけで滿足する。例へば、マニング大僧正が、その日記の中で、四旬齋の間菓子を食べないと誓つてゐるが、その餘白に「乳なしビスケット以外は」と附け加へた事を彼は吾々に語つてゐる。ヴォルテールなら之を皮肉な强烈な記事で書き上げたであらう。ストレイチーとしては辛辣な引用により、克己心をぶちこわした信仰の弱さを示したゞけで十分であつた。彼が不合理だと思ふ何事かを重々しく宣言する時、又は彼が危險な警句を弄する時、彼は無類である。アーノルド博士について彼は云ふ「彼は亦、或る程度まで他人を寬容しなければならないと考へた。つまり彼が意見の一致を見た人々から寬容せられることを考へたのである。」と。又、マニング大僧正について曰く、「確かに彼は跳び出す前に前方を見るの

を忘れる様な男でもなかつたし、又前方に蒲團が擴げられてゐるのを知つたとしても、それだけで安心して跳び出す様な男でもなかつた。」と。

イギリス人のユーモアには屢々情操が泌み込んでゐる。ストレイチーはニューマンのやうな人の信仰に對してはたゞ尊敬を抱いてゐるに過ぎない。尊敬ではなくてたゞ好奇的な愛情だとさへ、人々は云ふかも知れない。その好奇的愛情は不信者の好みで、幾分からかい氣味のものかも知れぬが、時には人を感動させる。マニングに對しては彼は容赦しない。何故なら、マニングの場合では、信仰の要求が世間的の野心と餘りにもピツタリ一致するからである。教會の利益と私的爭ひを混合したイタリアの僧タルボート猊下に對して彼は殘酷である。又、時々、自分の憎惡と徳性とを明らかに區別することの出來なかつたグラッドストーンに對しても彼はきびしい。併し調子の狂つた中にも誠實なゴルドン將軍を、ストレイチーは愛した。

そして之等の點から見れば、文體に於てはフランス式で、ある偏見に於てはヴォルテール風ではあるが、彼は心の底では極端にイギリス人たることを失はない。イギリスの傳記史に於て一番重要な事件は『ヴィクトーリア女王に』よるリットン・ストレイチーの征服であつたとケンブリッヂの一學監は云つてゐる。併しその征服はたやすかつた。何となれば、ストレイチーはホヰッグ黨の一名家から生れ出たのであつたからだ。凡ゆる熱狂の反證となるらしい彼等の堅實な、靜かな性格を、彼は眞に理解して描くことが出來た。そして、彼等の健全な常識はイギリスの永久性を保證し又凡ゆる移り氣な危險から英國を救つてゐる。ハーティントン卿の彼の有名な肖像はユーモア的に、併し尊敬を以て取扱はれてゐる。曖昧な恐ろしい一性格のエリザベス女王にあつては、女王をしてかくも強くイギリス的たらしめてゐるかの障壁と拒否とをほめてゐる。若しも彼が教會に對して何らかの好意を保持してゐるとすれば、それは人間の不完全さのしるしを失はないアングリカン派教會に對してゞある。

殆どいつも、誰か優れたヴィクトーリア朝の人を扱つた後で、彼はもう一度その人を發足點におく。彼自身が優れたヴィクトーリア朝の人であつたとは云へないであらうか。

私はリットン・ストレイチーを知つてゐた。年毎、夏、ポンティニィの古い僧院に知識人の集りがあつたが、或る年の集りに彼はそこへ來て數日を過した。彼はテイト・ギャラリーにある彼の肖像にそつくりであることを吾々は知つた。最初の日は彼の丈高い、やせた體格、彼の長いひげ、彼の身動きもせず、沈默を守つてゐるのに吾々は驚かされた。併し彼が話すと、その「鳴く様な裏聲」で、愉快な、經濟的の警句を連發した。彼は吾々の日々の討論に對して丁重な、併し輕蔑的な專念で耳を

傾けた。彼は極めてイギリス風に、具體的の問題と一定の人々にのみ情味を持ち得たのであらうか。彼の弱い、無情な身體は討論に加はるには必要な努力を惜んだのであらうか。それとも、餘りに細かく考へる方で（多分そのためだらうが）吾々の思想が微妙さを大分缺いてゐると思へて、それで彼には興味が持てなかつたのであらうか。そこで見た彼には殆ど無限の擯斥、氣儘な抽象、拒絕といふ印象を吾々は受けた。……而も……而も時々、僅かの瞬間、彼の眼鏡の後ろで非常に生々と眼が光るので、この凡ての倦怠は實は愉快に思つてゐる、鋭敏な、又如何なるブリトン人よりもブリテン風の人間の假面ではなからうかと吾々は怪しんだ程であつた。（完）

我が母の分析

高瀨裕孝

自分の肉身、特に母親などを分析すると云ふことは不可能に近いとされてゐます。それは、母親と云つた樣な存在は、幼い頃から親しみ、導かれて來てゐるので、自分のエスや超自我の一部になつて居ることがあり、彼樣な時には、それは盲點となつて分析を妨げるからでせう。とは言ふものゝ、分析されてゐる人が細心の注意の下で觀察的になしたならば、全然不可能であることはなく、ある程度までは成され得るものと思ひます。以下は私と母との感情關係の分析です。

私は一人兒ですから相當にエディポスコムプレクスが强いのです。それと同時に母の方でもヨカスタ的な慾求を私に向けてゐます。然し母は私によくドナルのです。これは世間にもよくある例ですが、子供や女中を無茶にドナル奧さん方はそのドナルことがエロチジーレンされて居て、そこに無意識の性的興奮の爆發をして居る場合があります。私の母の場合にもさうした事があると同時に、後の分析で明にするやうに私に對してヨカスタ的要求を持つと同時に弟コムプレクスを持つてゐたのです。

ある日、母は私に言ひました。「以前はお前が旅行に行つたりすると心配で心配で仕方無かつたが、此頃はさうでもなくなつた。湯澤に行つた時など、お前より一足先に歸つたけれど炬燵にかけた靴下が落ちてもえやしないかと思ふとねられず電話をかけて、お父さんにおこられたよ」私はすかさず聞いてみた。「そんなこと、これまでに有りましたか？」すると母は言ひます。「小さい時あつた。丁度母や弟と――あゝ弟はもう居なかつたかな――やオヂイさんと炬燵で話しをしてゐて、それから、あたし一人でねてしまつたら、もえ出して、大騷ぎをした」こゝで私は母が「弟は」と言ひ「弟はもう居なかつたかな」と言つたので弟に對する感情の抑壓があると思ひましたから、弟の思ひ出を聞いてみました。母は言ひます。「弟の思ひ出は澤山あるよ。河で遊んでゐた時、弟は河の中に落ちた。弟が『お母さん――いや姉ちやん、着物を乾かしてくれ』と言つて泣くので、しぼつて乾かしてやつた。又、小學校で弟は糞ダメに落ちた。私が怒つて『一緒に家に歸らう』と云ふと『うゝん、いゝんだ』と言つて驅けて歸つた。弟が生れるまでは父は私を大切にしてゐたけど、弟が生れると急に愛が弟に移つた。幼い頃、父は私のことを『男ならいゝんだがなあ』と言つた。こんな事があつた。弟と私と父で淺草に行くと、弟は『鳥屋に行きたい』と云ひ、私は『大增の玉子燒が食べたい』と言ふ。父は私に『ねえ、鳥屋に行つても玉子燒が出來るよ』と弟に味方した。それで

私は弟が憎らしくなつて、弟をなぐると、父が大變おこつた云々」とこんな話を母は致します。

こゝで私は、母が私をドナルのは、私に對して弟コムプレクスを持つてゐるのではないかと思ふのです。弟に對して、抱いた憎くみを發散してゐるのでせう。それは、母の言葉の中で「お母ちやん――いや姉ちやん」と言ひ直した處にも出てゐます。又、母の父親が「男ならいゝんだがなあ」と始終言つたとのことなど、母を男性的な、ペニスナイド的な性質にしたでせう。これなどフロイドが取扱つた患者と一致してゐるので、今更のやうに科學の普遍性を感じます。母がさうした、しつかりした人でしたから、私は一面大變得をしてゐる（父なき後、母が經濟を切り廻してゐます）のですけれど母の強い、鬼子母的性格に壓えられた青白いエディポス性格として私は育つたのです。

私が、母のこの弟コムプレクスを分析する絲口になつた話は、母の靴下が炬燵から落ちて燃えないかと云ふ杞憂心理でした。では、なぜそれにそんな感情が結びついたのでしたらうか、それは或る冬、私と友達が湯澤に居た時、母が訪ねて來て、先に歸つたことがあつたのです。その時、家に歸つてから母は、私の靴下が炬燵でもえないかといふ妄想に取りつかれたのです。一體物の燃燒は性の興奮を象徴してゐます。だから、性興奮の抑壓がさうした不安を形成したのでせう。では、なぜ湯澤でそんな氣持になつたのでせうか、湯澤はスキー場です。雪があります。こんな話を母はしました。「小さい頃、佐野へ行つた。冬で雪の日だつた。人力車に乘つてゐた。母と一緒に。ところが人力車がつまづいて放り出された。私は泣かなかつた。家に歸つて父の顏をみると、わあーと泣いた。母が『この子は變な子だよ、私の前では泣かないで』と言つた」と母は語りました。

母はその母（私に取つては祖母）に憎しみを持つてゐたらしいです。それから、これは前に書き忘れたのですが、炬燵が燃えた時に祖母が騒ぐのです。雪上事件と湯澤は雪のあることで一致してゐます。お婆さんに對する憎しみと、弟に對する憎しみとは共に父を繞つてのそれですから、一致してゐます。だから、炬燵と湯澤と不安とはさうした點に於て連絡してゐたわけです。要するに母は私に對してヨカスタ・コムプレクスと同時に弟コムプレクスを持つて居るらしいことが解つたのです。

また母のナルチスムスも相當なものです。これは私の母ばかりでなく、中年すぎの女の人のナルチスムスには全く閉口することが度々です。概して、女の人は非常なナルチストです。（私も男ですけれどさうらしいですが）それが日本の家族制度の下で、特殊な性の抑壓態度や肛門性感と結びついた場合、中年女のナルチスムスは全く始末に了へません。これは私のエディポス・コムプレクスからの慾目ではありませんが、我が母はそんなにひどい方ではありませんけれど、（いゝ

母なんです）ナルチスムスは強い方でした。一例を引くと、母は眞夏でもピチリと戸をしめないとねられません。それに戸もガラス戸と木戸と二重戸です。これには家で宿る人は苦しめられるさうです。これは胎内空想と結びついたナルチスムスでせう。誘惑願望もあるやうですが……。また母は自分が立派な、立派な家に住んでゐる夢を何度も見るさうです。これもその例でせう。家は女性や女性器の象徴になることがありますから、自分はこんな立派な女だといふ夢でせう。

×

母に關する私のかうした分析は母には話してありません。急にこんな話をしたら混亂を起しますから。混亂を起して仕事に手がつかなくなつたら、私はその日から困つてしまふと共に母の爲にもよいことではないからです。私はかうした母の一人兒として育つたのです。私は神經質な、青白い子供でしたけれど、今では分析に依て過去の弱點を克服しつゝあります。なほ、最後に母の「肩こり」に就て附言しませう。世の中には「肩こり」に惱んでゐる人も多いでせうから。私も十八位の頃には「肩こり」に惱みましたが、今ではなほつてしまひました。「肩こり」はさう心配なものでないと私は思ひます。肉體的な意味もありませうが、リビドーの鬱積ではないでせうか、多分にエロチツクな意味があると思ひます。併しまだ判然とは分りません。

——一五・七・二〇——

身邊觀察三題

大瀧勝人

一、天然痘忌避法

此の春、私の地方（新潟縣）に五十年振りだといふ天然痘が流行した。滿洲から橫濱、鶴見に渡つて、そこから私の地方に迂廻し入つたものであるが、此の測らざる痘禍の襲來に地方人は極度の恐怖に陷つた。狼狽した防疫陣の「空氣傳染」といふサイレンにも脅えて、此の地方は文字通り火の消えたやうな淋しい凄さを呈した。尤も一ケ月ほどのうちに、郡内の發生患者四十名に近く、惡性のため、死亡者七、八名に達したほどの慘狀であつたから恐怖も當然であらう。

さて、人間はかういふ場合には「裏」を見せる。

あらゆる抑壓を拂ひのけて、奥底のものが出てくる。卽ち強制施行の「種痘」にもまして信ずる如くに縋りついたものが古い迷信の民俗行爲であつた。先づ(一)「ほうそう神」の祭り——米俵の蓋（サンバヤシ）の上に赤紙で作つた幣を立て赤飯などを供へる——をやり、(二)「ささらさんぱちの宿」と書いた札を入口に貼りつけた。(一)が悔々として痘魔を神

に祀りあげ、我れにはその魔手を伸ばし給はざらんことを哀願する魔術である。(二)は其の反對で、痘魔を逆に恐喝してゐるのである。「ささらさんぱちを用心棒に泊めてあるのがこわかつたら此處には入らずに去れ」とおどかすのだ。或は入口に其の札を貼り、内には祭壇に神と崇めた相反並存もあつたかも知れない。こんな行爲の外にもつと心理的な所産のデマの渦卷きが實に又ヒドかつた。私の居る村上といふ町には輕症の患者がたゞ一名であるのに、世間の恐怖心から生ずる評判は町の誰彼(著名な人をも)次々に天然痘患者にしてしまつた。不眠不休で活躍する警察の署員數名も、防疫醫も罹つたことになり、驚ろくべし新聞記者の私も患者の一人に加へられた。事實はたゞ一名なのに村上町だけで既に二、三十名のデマ患者が作られ、尙續々と作られていつた。私は、此のデマの「數の多い」患者を願望する心理に深い興味を持つた。デマの解釋を大體次の如く私は地方の新聞に書いた。

『痘魔に對し人間の心理は和戰兩用の態度に出てゐる。「ほうそう神」と崇めるかと思へば「ささらさんぱち」の用心棒で威嚇する。それでも利かぬとの疑ひを持つとこんどは現ナマ主義で、自己以外の者成るべく多數人身御供として痘魔を飽食させ「もう澤山」となつて魔の手が己れの身邊に及ぶに至らざるやう自己防衛の心理兵が盛んに活躍して犠牲を投げ込んでゐるのだ。それが患者續出のデマ心理の根據である。昔は「人」そのものを御供にしたが、文明の世では心理だけにそれを許してゐるのである。こんな場合には原始心理が大に活動するものである。そして又特定な私といふものをも其の一人に加へ犠牲の血祭りにあげることには理由がある。それは私の罹患願望を無意識にも持つものがあるからで、それにはまた私の一身上に關する現實的な原因も機を爲すものと斷定し、私はひそかに人間心理のおもしろさを考へる」と。

二、この野郎

私の地方に、もう六十の坂を越した魚行商で酒を好み、醉ふと必ず「男」に喰つてかゝる老婆がある。その癖がはじまると、眦を吊りあげ「野郎ども」と叫びながら勇士の如く男性の中に飛び込んで、メチャクチャに惡罵を放つのだ。しかも何等か權力的な地位にある男性を特に選んで惡罵の相手とする傾向がある。いつか近郷出身のSといふ縣會議員を驛前の群衆中で惡罵し、氣も短かかつたその縣議に烈火の如く怒られ、衆人環視の間にその老婆は鐵拳でさん〴〵毆ぐられた實例もある。「洋服を着る」私自身も被害組の一人で「此の野郎」と詰め寄られた時には實にゾッとした。そして、よく觀察するに「群衆の中で男性を侮辱すること」が最も彼女の愉快に感ずることらしく、相手は「野郎」に限るので、そんな發作の際でも同性の女どもには、からりと態度を變へて優しく笑顏を向けるのである。婆さんの此の癖は若い時からあつたさうで、普通には一種の酒癖とばかりに觀られてゐた。

醉はぬ時はおとなしく商賣上手であるが、醉ふと俄然男が憎くなるらしい。私は此の心理をペニスナイド、男性コムプレクスと知つてからは、憎めなくなり、恐ろしさも薄らぎ、却つて興味をもつて其の發作を觀測するやうになつた。

會て本誌アプフウブ欄に記された現代著名の某女流作家は致養あればこそ作品中で此の「野郎ども」を表徴的に發散してゐるのであるが、かあいさうにも此の魚屋の老婆は無學であるがために、たゞ端的に結論だけを「野郎々々」の惡罵に托して叫ぶばかりなのだといふことがわかつたのである。

三、牛とガマ

大槻氏著『續・戀愛性慾の心理とその分析處置法』の見返しにおもしろい日本製土偶『笛吹牧童』と支那製竹根刻人形「ガマと福神」の寫眞が載つてゐる。それをぢつと眺めて、その象徴性に實に深い示唆を感じた。大槻氏のいはるゝ通り牧童の牛はエスで、童子は自我で笛は卽ち操縦のほどあひを示してゐるものであらうが、エス(牛)は又男性で、自我(童子)は又女性であることをも象徴し、兩性妥協融和の眞理をよく教へてゐると思ふ。支那製といふガマと福神の融和もまたよくとれて居り、三本足のエス(男性)であればこそ福神の逆立動作が融和するのだと思はれる。福神は逆立ちの危險を敢てすることによつて二本足(手)の女性となつてゐるからだ。しかも日支兩者の自我とエスは量的な差があり、假りに兩者交互の置き替へなどは絕對許されない(融和せぬ)といふこともわかる。今、支那の自我の逆立ちを日本のエスの牛に乘せてみたとしたら、日本のエスは先づあられもない逆立の侮辱に猛然と怒るだらう。又それと逆に日本の自我童子を支那のエス蝦蟇に乘せてみたらどうか。端的でエネルギッシユな支那のエスは廻りくどく抽象的な日本自我の童子の笛などでは到底食ひ足りぬものがあつて、結極破綻を來すであらう。此の一見兩者の不卽不離性は實は融和の極致を示して居り、無心の藝術境地は斯くまで眞なるものを作り出すことかと感じ入る。斯くて又浦島傳說の龜乘りにも解釋がつき、遙かに降つてチト複雜にはなるが、現時我々が汽車や飛行機等を乘用する心理も原則的には此の範疇を出ないことだらう。

本誌前號正誤表

頁	行	誤	正
五	二六	said be	said to be
一一	一一	評論	詳論
一三	二三	こと巳む	のは巳む
七五上	二三	目分	自分
八〇下	一六	丈た	丈夫だ
九四中	二	盲兒	育兒

時評

日本人と科學振興

大槻憲二

一、科學主義と打算結婚

獨佛戰線に於けるドイツ側の壓倒的勝利がドイツの機械化部隊の威力に依ることと大であるとの結論に促されて、急にわが國にも科學振興熱が高まつて來たやうであるが、近衞新內閣の文相として就任した橋田邦彥氏もその趨勢を體してか、科學振興策の實施を誓ひ、それに關聯してかどうかは知らないが、綜合科學院とか云ふものゝ設立も劃策せられてゐると云ふことである。

傳へられる綜合科學院は建設資金二億乃至三億、經常費五千萬圓程度と云ふから今までのやうなケチ臭い學術奬勵とは類を異にするものであるが、金だけを澤山だして設備と體裁と組織とだけを整へたからとて、それで直ちに科學が振興せられると考へるのはあまりに樂觀的であると我等は考へる。平常は科學をさんざん冷遇し、精神だけあれば他のものは要らとぬ云はぬばかりの顏をしてゐたものが、急に科學孃の好條件に目をつけて彼女に媚態を呈したとて、科學孃だつて素直に首をタテに振つてくれるかどうか、貴方は精神孃の方がお好きなんでせう、からかはないで下さいと肘鐵を食はさるのでないかを憂ふる。私はあまりに蟲のいゝ現金な態度を、科學の面前で恥づかしくさへ思つてをらぬらしい、日本人の無神經さと樂天主義とにアテられざるを得ないのである。

ABHUB

アブフウブ

他の學問がアブフウブ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黃金を探し出す。

佛心鬼手

不老泉院主

教育家と云ふものの言動を分析的に觀察してゐると、彼等は非常に人の機嫌をとることの好きな人種であると云ふ感じがして來ることがある。勿論、教育と云ふことは愛情の仕事であり、愛情は女性的なものだから、人の機嫌をとり結ぶことが上手になることは當然だと云へないことはない。併し習ひ性となつてゐる內に、段々それが昂じ、時には幇間的な媚態的樣相にまで墮して來ることがある。分析者だとて或る意味では教育家だから、かうなる危險性は確にあるから、我等も餘程自

一體、科學なんて日本人の柄には合はないのである。心理科學精神分析などは今なほ科學だと認めてをらぬ愚劣な官學徒や一般凡俗も多いことなのだ。科學の何たるかの分つてゐないものに何で科學の振興が出來るか。私は日本人にとつて科學が柄にないと云つたが、その理由は二つある。それを次に述べる。

二、リビドーと攻擊慾

我等は東洋文化心理を研究した時（本誌本年一月號）東洋人は女性的だと云ふ結論に到達した。日本人は東洋人の內では比較的に男性的な方だが、それでもそれは比較的の問題である。と云つたからとて女性的なるが故に惡いとか下等だとか云つてゐるのではないのだから、早合點されては困るが、とにかく女性的である。女性的であると云ふことは、心理學的にどう云ふ意味かと云ふに、それは死の本能が生の本能と合體するに際し、攻擊慾化してゐるよりは寧ろ多くリビドー化してゐると云ふことなのだ。勿論、日本の男性に於いては攻擊慾化してゐるのは當然だが、併しその攻擊慾は相當にナマであつて知力や威力に昇華してゐる度が低いと云ふのだ。卽ち、科學は、男性的攻擊慾が現實順應的に知力化してゐるもの、又は知力化し得る民族に於いて、特に榮えるのであつて、その點に於いては、東洋人は到底西洋人には及ばない。西洋人の內でもラテン民族よりはチウトン民族の方がその點では優れてゐるし、チウトン民族の內ではドイツ人が最も勝れてゐることは何人も容易に承認するところである。その代り、ドイツ人は一種の精神的な片輪なのだ。男性的攻擊慾の殆ど全部を擧げて知力（科學）化して、果して人生意義何處にありや。その精神的片輪の今のドイツ人の代表はヒトラーである。結婚してリビドー上の滿足も少しは得たらよさゝうなものだのに、それもせずにあんな嶮しい顏付をして戰爭や武器や征服や統制のことばかり考へてゐ

戒せねばならぬと平生思つてゐる。それ故、こゝに云つてゐることは單に他人に向つて云つてゐるのではなく、半分は自分に向つて云つてゐるのだと云ふことを理解して頂きたい。併し分析者は佛心を以て鬼語を吐く修業を常に怠つてゐない。佛心のみあつて鬼語を吐く勇氣がなければ、佛心が佛心として生きて來ないのだ。それは佛心を以て鬼手を振はなければ外科手術は効果的に行はれないのと同じだ。世には何と、佛心のみあつて鬼手のない教育家が多く、兒童を軟弱に育てゝ得意になつてゐることだらう。

もてなし教育

恩施財團愛育會なるものがあつて、軍人援護會の委囑を受けて、昨年四月から各地方の中等學校、尋常高等小學校などの生徒兒童に就いて「女親だけで育てた子供の學業、體格性質」と「兩親揃つた子供」のそれ等とを統計的に比較調査して見た結果、前者が必ずしも悲觀すべき狀態でないとの結論に到達したとて、四月十二日の東京朝日の家庭欄に報告せられてゐた。併しこんな問題を單に外的に統計的に調べて見たとて本當の事は分るものではない。深い苦悶は、さう云ふ調査には全

るのだから、世界中はそのおつき合ひで誠に迷惑をする。その飛ばつちりを喰つた我々日本人まで、折角永遠の愛人精神孃を袖にして大して好きでもない科學孃と婚約し、三億圓の大御殿を立てゝいやがる科學孃のお輿入れを待つと云ふ次第となるのだ。戀愛結婚と云ふやうなことは自由主義で、個人主義でけしからぬと云ふことになつたのだから、これも已むを得ぬが、打算結婚が人生の意義を果すかどうか、考へて見たら分る。私は今は日本の悲劇だと思つてゐる。柄にないことをやつたとて到底日本の文化は自然に花咲き出はしないのだ。併しそれも已むを得ぬことだ。

三、田園山野と官邸の庭

科學が日本人にとつて柄にないと云ふ第二の理由は、日本人は何でもかんでも上からお膳立てを作つて貰はねば物を喰べることも出來ない習性があるためである。何か必要だと云ふと直ぐ××院と云ふものが出來る。藝術院、興亞院、科學院など。この名は病院を聯想してあまり香ばしい印象を與へない。そのやうに××院を作ればもう當該方面の國家的使命は果されてしまつたやうな感じになるらしく、いゝ氣持になつて安心してゐるのだが、事實は大抵は開店休業狀態に陷つてゐることなどはトンと氣付いてゐない。日本の民衆はまたその××院が大好きで、それを作つて招き入れると、まるで飼ひならされた小鳥が狹苦しい籠を戀しがるやうに尻尾を振つて這入つて行く。さうして籠の外にゐる内には相當に勇敢にさへづつた小鳥も籠に這入つてしまふともう安心してしまふか、居睡りばかりしてゐると云ふ有樣である。それでも日本の民衆はまたその籠を無限に讃美する惡癖があつて、籠の外で實際に鳴いてゐた當時の聲よりは、籠の中で居眠りしてゐる沈默の聲の方が美しいなどと出鱈目なことを云ひ出す。

然洩れてゐるからだ。現に私は、母親だけで育つて、成績はよかつたが、神經症に惱んでゐると云ふ多くの青年を分析的に扱つて見たからである。

同會の參與某氏は母親一人でも「二倍の力強い愛」を注ぐからよくなるのだと云つて氣安めを云つてゐるが、その二倍の愛は確に量的には間違ひないかも知れないが、不自然な二倍の愛であるから、それを受けた子供に於いて不自然な重壓を感ずるやうになることは確かなのだ。たゞ教育者が「二倍の力強い愛」と云ふやうな言葉で母親に安心させ慰めてやらうと云ふ善意は認められるが、さう云ふ善意はあまりに御機嫌とりの善意、幇間的な好意であつて、その弊害を矯めてやらうと云ふ鬼手的好意に缺けてゐるところに教育者の自戒がなさ過ぎると云ふ點を私は指摘するのみだ。

尻打ち

叱らぬ教育を唱道する人々の心理の中にもさう云ふもてなしの氣分がありはせぬか一應反省して見る必要があらう。自分の善意だけに自分で甘へてゐてはならない。それは教育者として危險な道だと云ふことを悟らねばな

私が豫々説くやうに、學問や藝術と云ふものは民衆の實生活の中から自然に萠え出づべきものなのだ。決して官僚の人工的な施設や制度や組織の中から生れ出るものではないのだ。それは丁度、米や大根は盆栽の鉢の中から作り出せるものでないのと同じである。盆栽の鉢の中で柿を實らせることも出來るが、そんなものは見た目に面白いほど喰つて見て美味いものではない。然るに日本人は一般に大地に生えた柿は汚らしくて品が悪いから駄目だと云つて喰はずに嫌ひ、お上品な盆栽の柿を上品で縹緻がいゝと云つて顔をしかめつゝうまがつてゐる。悪い趣味だ。

四、官學の弊と官私別の撤廢

日本と云ふ國は官學と私學と民間學と云ふものが截然區別せられてゐて、政府は官學のみ認めては他は殆ど默殺の形である。例へば、文化勲章と云ふやうなものを贈るとすると、官學徒だけがその對象になり、他は殆ど問題にならない。それは官學徒に優秀な人が多く集まつてゐるからだと云はれるなら、さうでないとは人々は云ふまい。併し政府から月給や恩給を貰つてゐる人が、政府のためや國家のためにつくすのは當り前の事ではないか。政府からは何の報賞を受けなくても國家のために盡してゐる者とてない事はない。さう云ふ人々の方に賞を讓るのが、同じく學にいそしむ身の美德ではないか。例へば、英語通信社主今井信之氏が氏編輯の雜誌『カレント・オヴ・ザ・ワールド』の卷頭に、月々美事な英文を以て日本のために、英米人に向つて國政の方針を説明し宣傳してゐる努力と功績とは相當に大きいと思ふ。外務大臣は一應公式の謝辭位は送つても罰は中るまいではないか。第一、あれだけ流暢な英文を自在に書きこなす才能が官學徒の間に幾人ゐるだらう。私、寡聞にして倉卒の間に一人も想起出來ない。勿論、今井氏

らない。世の母親たちにとつて自分の子を叱らずに育てることが如何に快樂であるかは想像以上だからだ。

叱らぬ教育と云へば、昨年十二月十四日の東京朝日家庭欄に宮内鎮代子氏が「西洋人だつて勿論可愛がる。しかし扱ひ方は日本人と大いに異つてゐる。ドイツでは『尻打ちを喰はねば子供は成人出來ぬ』と言つてゐる」云々と述べてをり、七月十一日同欄にはまた歸朝夫人たちの「風俗時評」の中でC夫人が、「英國人は他人の子供でもその親の面前で平氣で叱りますね。つまり悪いことをすれば誰からでも叱られるし、叱つてもよいと云ふわけなのです。日本人の子は大人を甘く見て馬鹿にしますね」云々と云つてゐた。叱らぬ教育主義者はこれに對して何とか一言反駁せねばならぬ義務がありはせぬか。

孟母斷機の意味

孟子がその母を慕つて學半ばで郷里へ歸つて來た時、孟子の母は折から織つてゐた機上の布を刀を以て裁斷し、何事も中道で放棄したらこの通り物にはならぬと敎へたので、孟子は悟つて母の許を斷念して遂に學を成就したと傳説せられてゐるのは有名な話で、誰で

は政府からの恩賞などは期待してゐないであらうことはよく分つてゐる。
私は氏に文化勲章を送れと云つてゐるのではない。併し民間學徒も國家のために盡さうと云ふ誠實にかけては官學徒にまさるとも劣らぬ位の事は考へてゐた方がよいと思ふだけである。
今井氏はほんの一例であるが、今井氏が英文をあのやうに堪能に書き得るのは實際生活の中に英語と共に暮してゐるからである。單なる教室や研究室の中で英語を小手先でひねくつてゐるのとは異るからだ。學問が身についてゐる。このやうに實際生活の中から萠え出た學問藝術は根が深くて活力が強い。單なる制度や組織の中で人工的に作つたものとでは底力がちがつてゐる。
だから政府が本當に科學を日本國内に長養しようと云ふ氣があるなら、單に大がゝりな制度を急造すると云ふやうなことよりは、民間に自然に萠え出た學問に肥料を施して、その實を刈りとると云ふ方法をとるべきだと云ふのだ。自然に發生したものを無視しておいて、官邸の庭に盆栽の棚を大袈裟に急造して能事終れりとするやうな輕薄な態度はよせと云ふのだ。
それ故に、私の提案したいことは官學、私學、民間學と云ふやうな階級的な區別は一切なしにしてしまふことが第一である。實際、國家がその世話にならねばならないのは、官僚よりはむしろ一般人間にあるのだからだ。殊に戰爭が長期に亙れば亙るほど、民衆の世話になる率は多くなるのだ。然るにいつまでも官僚獨善の氣風を保つてゐることは危險思想これより甚だしきはない。
で、まづ、一切の學校、學派を平等にあつかふこと、第二に、その何れにも自然發展の機會を與へつゝ、發展力の大小に應じて、學問分野の急不急に應じて、政府はそれ〴〵適當な庇護を與へることとである。
只今のやうに、學校の内容よりはその位置に依つて（同じ官學でも東京に近い

も知つてゐる。この場合の斷機は、意識的には學問を中道で放棄することへの誡めであるが、無意識的には母が子へのリビドーをこのやうに斷ち切つてゐるのだとの意味を傳へるための象徴的行爲であつたと私は分析者として解釋したい。
ところで、この行爲は叱らぬ教育主義者に云はせると叱らぬ教育の内へ這入るのだらうが、我等に云はせると叱る教育の内へ這入るのだ。言葉はどちらでもよい。とにかくこの行爲が毅然として子供の超自我形成に役立つたことに於いては疑ひはないのだ。甘い一方では男兒の超自我は出來上らないことだけは確だ。なほも一つ私はこゝに女性的去勢脅威の意味があることを云ひ添へたいのだが、今はその點についてはあまり立入つて論及しないでおく。

毅然たる教育

私の友人G博士の男兒（小學生）が算術の宿題帳を紛失し、朝の登校前にマゴ〳〵して泣きつ面をしてゐた。母親は心配して一緒になつてその帳面を搜してやつてゐたが、父親は、そんなにぐづ〳〵してゐては遲刻するから、ないものは斷念して早く學校に行けと命

程い丶ときめられてしまつてゐる）價値をきめてしまつては、各學校の特色などは出る筈はない、何とか中央に近く位置する機會もがなと、そんなことばかりに氣を揉んでゐて、學問に眞劍に打込む純粹な氣持などはなくなつてしまふ。

官學界に對し今一つの注意したいことは、姻戚關係を作つて學校內に於ける敎授等の職業的地位を確保しようと云ふ卑劣な手段はよせと云ふことだ。これは東京帝大に於いて特に著しく見られる弊風として評判が高いが、これは官職を私するものではないか。法令を以てこれを禁じたらどうか。も一つ序に注意したいことは、後繼者を選ぶに、學校內に自分の系統內に終始して來たもの丶內から選ぶと云ふ方法を變へることである。これも云はゞ官職を私するものだ。一度、校外へ出て自力で學界に地歩を確立したもの丶內から敎授を採用するやうにすべきだ。さう云ふ學者には實生活の背景があつて、單に學校と云ふ溫室內で育てた非常識な學究者とは選を異にするものがある。大學院などは廢して了つた方がよい。

私は全部を官學にすることにも反對なのだ。官學にすると云ふことは、學者を官吏にすると云ふことだ。官吏やサラリーマンはその限りに於いては生きた道具であつて、全的な人間ではない。人間にのみ學問藝術は可能である。科學院なんてものを作つても、要するに官吏と云ふサラリーマンの集團を作ることとなんだから、結局大して實績は擧らないと云ふことを私は失禮ながら豫言しておく。私が文部大臣なら敎學の一致などゝ云ふ抽象的題目を唱へてゐる間に、官私學の區別を撤廢して了ふ。政府と學校との關係を全部不卽不離にし、干渉の代りに庇護を與へて自由競爭の內に各個の特色を發揮せしめる。

泥棒が見えてゐるのだから繩を急造しなくてはならないなら、科學院も仕方はあるまいが、それを培ふ永久の策が他方になくては、やがて立腐れになるのだと私は警告しておく。（完）

じた。でもそんなことをすれば、學校へ行つて立たされると母親は抗議した。父親は、併しお前は宿題をやると云ふ義務を旣に果したのだ。それでお前の良心は滿足せねばならぬ帳面を紛失した罪の報いは潔く行つて學校で受けろと命じたので、兒は勇躍して學校に飛んで行つた。あとで母親は父親の苛酷を難じたが、父親はお前は男の兒の敎育法を知らぬとて逆にたしなめた。

私は、この父親の友人であることを誇りとした。男兒の敎育にはかう云ふ毅然たるところがなくてはならぬ。

御前サマの冷水摩擦

表紙に掲げた漫畫は昭和十年十一月十日、東京朝日新聞に掲げられた中根ガン坊氏作漫畫である。題して「御前サマの冷水摩擦」と云ふ。「チト寒くなりましたので、溫室の冷水摩擦場をこしらへました」と添書きしてあつた。溫室外に立つてゐるのは、家扶だとすると態度が傲然とし過ぎてゐるから、これは御前サマに相違ない。併しそれでは硝子張りの內にゐるのは御前サマでないと云ふことになりさうだが、若樣ならは若樣と斷りさうなもの。兩方とも御前さまであると解するのが

文藝時評

宮田戊子

「夫婦善哉」の惡戯

織田作之助氏の「夫婦善哉」は『文藝』第一回の推薦作であるが、文藝時評家の批評では褒貶相半ばしてゐたやうであつた。この作を褒める方の批評では達者な作であるといふに一致してゐるが、貶す方の批評では新人らしくないといふに凡そ一致してゐる。私はこの褒貶二樣の批評が共に當つてゐると思ひ、その背反性はこの作品のもつ矛盾にあると考へる。

矛盾とは何であるかといへば、こゝに採りあげられた蝶子とその夫惟康柳吉の倒錯ぶりである。蝶子は女中奉公をしたり、親のために藝妓の下地ッ子になつたりして大きくなつたが、その頃、安化粧品屋の息子である柳吉と知り合ひ、最初柳吉を頼母しい男だと思つて馴染になつたが、柳吉は家を勘當されると蝶子にヤトナとなつて働いて喰はしてもらふやうな甲斐性なしであり、三十一歳の彼が二十歳の彼の女を「おばはん」と呼ぶやうになつた。蝶子は柳吉を一人前の男にしたいといふ本望をもち、無駄な費用を惜しんで貯蓄したが、柳吉は昔の遊び友達に誘はれると、蝶子の貯金を引出して費消してしまひ、魂のぬけたやうになつて歸つて來る。蝶子は柳吉を折檻したが、柳吉は抵抗もしなかつた。その後彼らは金が貯まると商賣を初めるが、初めのうちは柳吉は商賣に身を入れるが、少し經つとグレ出して金を使ひ、家へ歸ると氣のぬけたやうに寢てばかりゐた。蝶子は腹を立て柳吉を毆りつけ、怒りを消すために千日前邊を歩いて歸つて來ると柳吉は子供のやうに鼾をかいて眠つてゐる。蝶子は荒々しくゆり起し、柳吉が眠い眼をあけると唇を尖らして柳吉の顏へもつて行つた。

斯ういふ二人の行動について見ると分るやうに、蝶子にとつて柳吉は良人でなく子であつた。最初に二人の關係を生じるところの描寫が不明瞭だが、蝶子は柳吉を頼母しい男と見た

自然である。併し兩方とも同一人だとすると溫室の內外に同一人が全然別々の風貌を具へて立つてゐるのはをかしいやうに思へる。併しこれが作者の機智の優れたところだと分析者は解したいのだ。卽ち、外なるは意識人としての御前サマ、內なるは無意識人としての御前サマ。意識人御前サマは立派な堂々たる老紳士だが、無意識人御前サマは頭部大きく手脚短かく完全なる幼兒である。幼兒は常に胎內（溫室）に憧憬し、現實（外氣）に觸れることを恐れる。冷水摩擦は外氣に觸れ風邪を引かない（現實生活に堪え得るための）用意である筈だのに、それを溫室內でやつてゐるのでは意味がない。そこにこの漫畫の諷刺的面白味が存するのだ。

良家や富家の子女は溫室內に引込んでゐて冷水摩擦をするやうな教育のされ方をするのが普通になつてゐるが、それは心理學的には結局幼兒的全能感とナルチスムスとをいつまでも保存することになつて、子供を大事にするのでなくて、事實上後で彼等を苦しめることになる。

近頃偶然、內務省編纂『兒童の衞生』（大正十年同文館）と云ふ古本を手に入れて披見してゐたら、內に巖谷小波氏が『賢か健か』と

のであるから、屹度蝶子の方で誘惑したのであらうと考へられる。柳吉はそのため勘當されたのだから、蝶子はそれに對して罪障感をいだき、柳吉を私の力で一人前にしてみせるといふことを、特に柳吉の父親に向つて呟く氣持をもつたのである。

さういふ譯で柳吉は蝶子に對して劣等惑をもつてゐる。が、面と向つては蝶子には何としても齒が立たないので安カフェーなどへ行つてそこに蝶子の代償を求め、彼らにサービスされることによつて、劣等感を補償させてゐたのである。蝶子はまた前記のやうな罪障惑からして、柳吉の父親への思惑を含めて、柳吉が病氣の時は金を仕送つて彼を溫泉に出養生させたりしたが、或る時溫泉へ行つてみると、毎日釣ばかりして淋しく暮してゐる筈の柳吉が藝妓をあげて散財してゐた。自分の仕送り位でそんなことは出來る筈はないのにとだん／＼聞いてみると妹から柳吉が無心してゐたことがわかつた。自分單獨の力で病氣を癒してこそ柳吉の父への誓言の手前もあるのにと、蝶子は眼前がまつ暗になるやうな氣がしたのであるが、柳吉は蝶子からうける壓迫感に堪へられなかつたのである。

蝶子が柳吉を一人前の男にしたいと考へたのはいふまでもなく救助空想であるが、彼の女のさうした態度は柳吉にとつて心の負擔であり、柳吉を勵ますことに躍起となる程、柳吉はその負擔を感じ蝶子の空想は逆な効果を生むことになつたのである。その結果彼の女は、未遂には終つたが、ガス自殺を企てることにさへなつたのである。男を救助しようとしたのが却てその男をも自分をも殺すことになるといふことは、女性の中に潛む母性と妖婦性とによるものであり、斯ういふ例は社會の到る處にあるらしい。その一例は、これとは少し事情が異るが、阿部知二氏の「冬の宿」の霧島嘉門夫妻の家庭にも見ることが出來る。

「乳の匂ひ」の思春期心理

加能作次郎氏の「乳の匂ひ」（『中公』八月號）も分析上興味ある作品であつた。これは思春期心理の作品として、この號と共に出る筈の『科學知識』にも書いたが、この作の主人公は十三歳の時、大阪の伯父を頼つて下阪し、そこでお信さんなる二十歳ばかりの女性を知り密かにお信さんに思慕を寄せる。作者はこれを伯父伯母に冷酷に扱はれる中で、お信さんだけが親切にしてくれるので、慕はしいものに感じたのだと書いてゐるが、それは作者の理窟

題して育兒心得を說いてゐる。その一節にこんなところがあつた。「先達亡くなりました或る立派な華族の殿樣が、餘所の家に行つて唐紙にぶつかつたといふ話がある。どうしてぶつかつたと云ひますと、唐紙といふものは獨りでに明くものだと思つてゐる。それはその頃、自分のお屋敷內を步いて行くときは、先に立つた者がズッと明ける。丁度、芝居で正面を明けると、殿樣が懷手をしてズッと出る、あゝ云ふ按排に誰かゞ明けるものだと思つてゐるから、餘所の家に行つても明けるだらうと思つて、ズン／＼行つたから、唐紙にぶつかつた。そこで殿樣は手を掛けて、洵に不自由な唐紙だ、と云つたかどうか知りません」云々と。

この場合の唐紙は現實生活の象徵だと解することが出來る。良家や富家の子弟はこのやうに現實の意義や性質をなるべく知らせないやうに、卽ち全能感とナルチスムスとを脹れらせるやうに育てられ、それが子供を大事にすることだと誤解せられてゐる。このやうでは結局、現實生活の敗北者になるより外に途はない。今後の人はどんな良家の人々でもかう云ふ非心理學的者育て方はしないやうにして貰ひたいと思ふ。

づけで、無意識では左のやうなことであつた。

元來私は、生れて間もなく母を失つて、溫かい母性的な情愛といふものこと知らず、常にさういつたものに飢ゑ渴ゑてゐて、少し年上の女の人などに親切にされると、すぐその胸にすがりつき、その情に甘えようとする傾向をもつてゐた。そしてそれが動もすると、戀愛的な感情にまで變化することがあるのだつた——

この主人公は、これを自分個人の特殊な心理のやうに書いてあるが、これは思春期の少年の誰もに共通な心理なのであり、卽ち、お信さんはこの少年にとつて母代償となつたわけである。或る日この少年はお信さんを俥宿まで見送つて行くことがあつたが、その俥宿に生憎俥が一臺もなかつたので、よそから俥夫が歸つてくるまで、二人で待つてゐるうちに少年は寒風に吹きつけられた砂が眼に入つてどうしてもとれない。お信さんは手巾を唾でぬらしてとつてくれようとするがどうしてもとれないので、今度は仰向けに少年を寢かし、乳を搾つて眼を洗つてくれるのである。お信さんにとつては、實は森田なる人の子を生み、乳が張つてゐたので、それを搾り捨てるつもりでもあつたのだらうが、少年にとつてはこれをさう感じとることは出來なかつたらう。爾來、この少年にはお信さんがまなかひに離れないやうになつたのである。その後東京で私立大學に學ぶやうになつたが、或る時京都に赴くとそこで或る人からお信さんが七條新地で娼妓をしてゐるといふことを聞くのであるが、彼はそれに引かれて七條新地をさまよひ步くと、そこの桝形の窓から白い首を出して客を呼んでゐる女が、どれもみなお信さんに見え、胸を轟かせながら用ありげに、端から端へ二度も三度も往つたり來たりするといふ處で終りになつてゐる。これが作者をして「乳の匂ひ」と題せしめたものであらうが、この題は作品の內容をよく象徵してゐるやうである。

「野茨」と「女體開顯」の洗滌强迫症

高見順氏の野茨（『改造』八月號）も分析上興味ある作品である。作家である「私」は、その愛人圭子のために、一旦新聞社に賣つた原稿を通信社の手を經て地方新聞に二度賣りする。當時彼は自分は原稿を二度賣りするのでなく、それを擔保に金を借りるのだ。そのうち金を工面して買ひ戾せばいゝと自分を納得させ（自己の超自我に言ひきかせ）て、新聞社へは默

新刊紹介

▼**『東北帝大醫學部精神病學敎室業報』**（昭和十五年四月號）——丸井淸泰稿、所謂偏執病性機制に就て。土井正德稿、滿洲人に見られたる依憑の異常心理に基く犯罪行爲丸井琢次郎、ヒステリー性發作の本態。山村道雄、人嫌ひの傾向に就て。土井正德、人格學序說。などの記事。何れ各論細詳の機會あらむ。（一圓　送料九錢）

▼**『書祭』**書物展望社編——「書物展望」誌上に發表せられた種々の重要論文隨筆を拔粹編纂したもの。「慈覺大師の入唐法巡禮行記」赤堀又次郞稿より、「方言書探査」東條操稿に至る三十二篇。內に長谷川誠也稿「漢文漢語の怨靈」大槻憲二稿「橋畔女怪考」などもあり。（二圓五十錢）

▼**『青春』**石丸梧平著——舊作長篇小說「船場のぼんち」は發行當時非常に廣く讀まれた作であつた。今讀んで見ても青年の胸に愬えるものが多いであらう。青年らしいナルチスムスや超自我が渦卷いて主人公を上下にこづき廻してゐる。卷末に最近書下された「小說の讀み方」との論文が添へてあつて讀者の指標を示してゐる。（人生創造社發行、一圓七十錢）

づてゐたが、地方新聞にその小說が題だけが違へて現はれたので、記者からその不德を詰問される。これをこのまゝおくと、新聞へもうどこでも原稿を書かしてもらへなくなり、自己の作家的生命も危くなる。そこで通信社の方へ交渉するが、通信社では原稿を買つたものだと主張して讓らない。そこで通信社へ金をそつくり返して小說を中止させ、其の中止したあとの原稿をたゞ書くといふことで漸く鳧をつけた。然しこの事件は彼に罪障感を植ゑつけたので、一月ばかり經つてその頃おでん屋をやつてゐる圭子の處へ行くと、丁度圭子と其姉とが椅子をテーブルの上に上げて掃除中だつた。圭子は彼にも手傳つてくれと賴むと、彼は大仰に跣足になつて、冬の水が手足にしみて切れるやうに痛かつたのも構はず、三和土をごし／＼とたわしで洗つた。その時の心持を彼は、さうすることによつて「自分の不道德をも洗ひ立てるつもりだつた」と云つてゐる。卽ち彼は自己の惡德を洗滌することを三和土を洗ふといふことで象徴してゐると見られ、洗滌强迫症に近い心理にあるものと考へられるが、これについて思ひ起すのは、岡本かの子氏の「女體開顯」に描寫された蘆花亭の女將菊枝の心理のコムプレクスである。菊枝はその父を樂さして永生きさしたいために、笹屋なる老人の、しかも肌合の全然違つた人の妾になる。然しその內的な欲求は、「夢みる時間を得たいためと勉强したいためとの二つの魅惑にとらはれて肉體を代償にする位は眼を瞑れると思ふのであつた。けれども彼の女の或る部分はその低調感に反撥し『文學界』などを愛讀するやうになり、家では老人を啓蒙しようとしてギリシャ哲學などの話をし、大空の星のやうな理想にあこがれたが、料理屋の女將になつてから、彼の女は身肌につけるぢかの物を人手にかけず自分で洗濯ししかもそれを毎日とりかへて着たので、口さがない店の者はヒステリーから來る潔癖だと陰口を云つた。このやうな潔癖は、彼の女の無意識が自分の行爲に汚れを感じ、それを日常生活の上で淸淨なものにしようとする象徴行爲であつて、高見氏の小說の主人公の場合と同じである。たゞ高見氏の作品の描寫は、この象徴行爲についての說明が如何にも唐突で、とつてつけたやうにしか見られなかつたといふ缺點があると思はれる。

野口富士男氏の「風の系譜」は曾て『文學者』に連載されて好評だつた作品だが、今度單行本になつた。舞臺は日淸戰爭頃の富士見町、津の守等であり、俥宿の主人から待合に轉向した寅造の後妻の蓮子として、其後妻の先夫の子で、先夫が亡くなつてから生れたといふ多代と、寺の梵妻の養子となり、寺の住職の死後は寺男を養ひ親として育つた新助の半生の苦鬪記であるが、この作品には多分に多代を讃美する心理が見られ、多代の子の松太郎がもし作者であるとするならば、作者の母コムプレクスが指摘されなければならない。が、それは姑くおいて、この中で、島村なる男が埼玉縣の方を流浪してゐる多代を六百圓といふ身代金を償つて救ひ出すといふところは、救助願望を示してゐるもので興味があつた。

近來文藝に表現される救助願望は、多くはこの島村の場合に見るやうに、金で女性を救ひ出すといふ形式のものが多いが、これは資本主義といふ外的條件が生み出したものであらうと見られる程類型化するに至つてゐる。それはこゝでは述べてゐる紙幅がないから、いづれ他の機會に書くことゝするが、この作品は心理的ではなく、リアリスチックなものではあるが、それにもかゝはらず救助空想が指摘されることは、この空想が如何に誰にでも存在するものかゞわかると思ふ。

（完）

内外彙報

獨文國際雜誌　本年度第二册

一、メヅサの首（フロイド遺稿）——一九二二年に書かれて發表せられずに終つたもの。去勢コムプレクスの問題として論じてゐる。

一、ヒステリー發作論（ブロイヤー及びフロイド遺稿）——有名なる『ヒステリー研究』の梗概の下書き。

一、分析に於ける慢性的沈默（マルヤツシユ）——抵抗及びそれに對する技法の問題。

一、男性的同性愛者に於ける口唇性感の要素（ビブリング）——

一、自我及び超自我の本能纏綿（イムレ・ヘルマン）——

一、分裂症及び躁病に於ける言葉の役割（カータン）——

一、遺精の病因及び素因に就いて（ヒッチマン）——

一、イスラエル・キリスト教史上に於ける不安及び强迫の解決法（オスカー・プフイスター）——

一、野蠻人の首狩り心理（マリア・ワイグル・ピスク）——

一、他誌所載論文時評——

米誌『精神病學』　本年一號

一、近代精神病學の概念（ハリ・スタツク・サルバン）——

一、運動神經生理學（デービド・マク・ライオク）——以上二論文共に極めて長編である。

一、時評數題——一、他誌論文批評。

『メニンガー診療所報』　七月號

一、メトラゾール療法への疑義（ウイリアム・メニンガー）——

一、精神分析精神病學（カール・メニンガー）——

一、精神病院に於ける患者圖書館の機能（デービー）——

一、新刊批評——

國內關係時事

▲宮田戊子氏『精神分析學から見た蕪村の藝術』——「南畫鑑賞」七月號。

▲大槻憲二氏は七月三日、拓植大學大講堂にて「現世界四頭目の精神分析」の題下に、ヒトラー、ムソリーニ、スターリン、蔣介石の心理についての講演を試みた。

▲大槻氏文筆近業一束——

一、「性感と性格」——「人生創造」七月號。

一、「軟弱性格の强化法」——同誌八月號。

一、「神經症の分析療法」——「通俗醫學」七月號。

一、「夏の犯罪」都新聞。

一、「職業婦人の男性化について」中外商業新報。

一、「蓮の華と日本人」合同新聞、九州日報、九州日々等。

▲本誌前々號（正誌）及び前號（册子）內容に關しては、本號所載廣告を參照ありたし。

研究會例會

七月例會は十五日夜、神田、アメリカン・ベーカリ階上で催された。

食前、大槻氏から前號「語彙」の解說あり、食後、新出席者平野直人氏の紹介があり續いて同氏の譯稿「一人つ子」につき解說と紹介とが試みられ、また氏自身の批評も加へられた。この論文は本號研究欄に揭げてある。續いて宮崎正路氏は或る一人つ子の場合を報告し、突飛すことの必要を力說した。田中虎男氏もハワード・スプリングの、「わが子よ」を紹介せられた。大槻岐美氏は子供の前には、寧ろ親の逞しいところを見せて、救助願望に訴へてはならぬと主張した。その他小杉長平氏は虚榮心、環境の効果に就いて語り、高木統他郎氏は山本有三作「子役」の話を試みた。また、長崎文治氏は夜尿に於ける括約筋の機能を論ぜられた。この話は原稿になつてゐるのであるが、餘白なく割愛した。

出席者は右言及七氏の外に小野田幸雄、瓶子喜己、大久保眞太郎の諸氏であつた。

講習會例會

七月例會は一日夜研究所で催された。『トーテムとタブー』の第四章第二節「トーテミスムスに關する諸學說」を精讀した。但し、この節は(A)及び(B)(C)の三項に分れてゐて、更に(A)はまた(a)名目論的學說、(b)社會學的學說、(c)心理學的學說の三つに分れてゐる。(B)(C)は事實上一つに合體し、「外婚の由來及びそれとトーテミスムスとの關係」と題を付けてある。部族内男女の結婚が禁斷せられるのは、トーテミスムスのためであり、トーテミスムスは種族的エディポスの故に發生したものであるとするのフロイドの見解である。

出席者は高木、小野田、瓶子、塚崎、田中、小林、宮崎、大場、馬場、高橋、大槻夫妻の諸氏であつたが、特に高木氏はその親戚の若尾恭子孃を連れて來られて非常に賑かであつた。若尾孃は和歌山縣にゐられる特別誌友であるが、所用あつて上京せられ、序に講習會に臨時出席せられたものである。お土産に結構なお菓子を澤山に頂き、一同有難く賞味した。初對面とも思へないやうな氣がした、とあとで手紙を下さつたが、我等の方もさう思ひました。

研究所だより

▲岩倉具榮氏は七月中旬葉山に避暑せられたが、併し同地から每日東京の役所へ出勤せられる。

▲大槻憲二氏は七月末一週間房州館山に避暑せられたが、これは水泳による心身鍛錬の二人の子息の監督旁々であつた。本誌卷頭論文は房州滯在中の執筆に懸る。

▲高橋鐵氏は精動本部の宣傳係員となられた。

▲大分縣別府市の特別誌友堀田和義氏は永らく御靜養中のところ、七月十三日に永眠されました由お通知がありました。同氏は永い間精神分析を御愛讀下さつた方です。こゝに心から哀悼の意を表しますと共に御生前寄せられた本誌への御支援を深く感謝する次第でございます。

▲長谷川誠也氏は膽囊炎の發作に襲はれ、八月十二日築地聖路加病院に入院せられた。經過は惡くないが、何しろ六十六歲の高齡のことゝて衰弱甚だしく、頗る憂慮せられてゐる。本研究所からは大槻氏夫妻が早速見舞に行かれた。快癒の早からむことを祈る。

編輯後記

育兒法など丶云ふものは從來いろいろの書が澤山ありますが、何れもみな一番大切なことを落してゐるのです。それは子供の身體を育てることばかり說いてゐて心を育てることを全然教へてゐないからである。佛作つて魂入れずとはこの事です。この點に於いて本誌本號は劃期的な文獻でありませう。因みに本特輯は文獻維持委員五十嵐榮一君夫人富江さん及び兵庫縣特別誌友菅井英雄君の要求に基いたものであります。他の誌友諸君も何かと暗示を與へて下さい。編輯部員は出來るだけ諸君の御希望に添ふやうに努力いたします。

本特輯は特に通俗的に平易に、分析を知らない一般の母親にも分るやうにと心掛けて、作りましたが、それでもまだ少しむづかしいところもあるかも知れません。

×

新執筆者平野直人氏は成城高等學校在學中の方、何れ東大心理學科に入られる由。ブリルの論は非常に有益なものです。譯者の勞を謝します。

馬場由子さんの譯されたアンナ・フロイドの講話も面白いものです。分析者の心持がよく書いてあります。それに譯文が流暢で、始めてとは思へない位です。

高木統他郎氏も新執筆者ですが、君は早大に在學中で、傍、某官廳に勤務してゐられます。

長崎氏の長論は終りました。あちこちから好い反響がありました。何れまとめて小册子にされるさうですから、御希望の方々にお頒ちします。

高瀨、大瀧兩氏が久しぶりの執筆を謝します。

×

巻頭に小野田幸雄氏のエスペラント文を掲げておきましたが、これは前號正誌所載土屋氏論文の要領。前號に載せるべく用意してありましたが、エスペラント文故、別の印刷所で組版してゐて間に合はなかつたゝめにやめたもの。前號正誌目次にだけ出てゐて本文になかつたのは誠に申譯なき次第、お詫び申上げます。

×

新特別誌友諸氏御芳名を左に報告申上げます。御支援を謝し、また御紹介下さつた方々の御熱誠を萬謝します。

▲大分縣……田北憲章氏
▲京橋區……和泉利藏氏
▲前橋市……青柳万二氏
▲淺草區……三澤三郎氏
▲兵庫縣……早坂長一郎氏
▲島根縣……三上光子氏
▲王子區……西澤正行氏
▲大連市……木原鐵之助氏
▲江戸川區……川野邊精氏
▲本郷區……鴨志田惇氏
▲岡山市……吉原正衞氏
▲秋田縣……秋田犬協會
▲水戸市……有馬秀雄氏
▲北海道……草野德治氏
▲本所區……淺野正義氏
▲荒川區……吉田正雄氏
▲朝鮮……鄭斗鉉氏
▲米國・シャトル…飯島貫實氏

▲滿洲國………是則正人氏
（森洋氏紹介）
▲名古屋市………瀨尾暹氏
（菅井英雄氏紹介）
▲神戸市………横田千代吉氏
（三留賴介氏紹介）
▲川口市………新井正治氏
▲本所區………根本榮一氏

なほ、引つゞいて誌代を御送附下さいました方々に厚く御禮申上げます。

×

フロイド全集中の第一卷『夢の註釋』、第五卷『性慾論』、第九卷『戀愛論』、第十卷『總論』は最近何れも重版が出來ました。定價は何れも二圓となりました。最近愈々フロイド全集の需要が增加いたします。

×

次號特輯は『**自由と個人**』と云ふ題にします。我等は現代が「統制と全體」の時代であることを知らないのではありません。併し頭の單純な日本人はもう個人と自由とは死んでしまつたもの丶やうに思つてゐます。我々はその短見に戰慄するのです。一寸觀點を變へれば今ほど自由主義と個人主義の盛んな時代はないとも云へるのだ。二者は永く死なせてはならない。たゞ時々に如何に生かすべきかが問題だ。さう云ふ問題に就いて科學的見地を嚴肅に守りつゝ研究して見ませう。神經症患者ほど自由と個性の問題に惱む者はないからです。

×

飯田龜代治氏がステーケルの「分析療法と暗示療法」と云ふ論文を本號に譯載して下さることを前號に豫告しておきましたが、譯者の個人的都合のために間に合はず、次號には載せられること丶存じます。お許し下さい。

昭和十五年八月二十五日印刷
昭和十五年九月一日發行
（月刊）定價 六十錢
（外地定價）六十五錢

編輯兼發行人 東京市本鄕區駒込動坂町三二七 大槻憲二
印刷所 東京市板橋區板橋町三ノ六四 帝都印刷株式會社

定價一部 六十錢（送料共）
半年分 一圓八十錢（送料共）
一年分 三圓六十錢（送料共）

御註文規定
・本誌の御註文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・切手代用の場合は一割增に願ひます
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所 東京市本鄕區駒込動坂町三二七 東京精神分析學研究所 振替口座東京七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂・大東館 北隆館・（大阪）福音社

合本 單册『精神分析』（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一巻・上

創刊號（昭和八年五月）「エディポス研究號」※
第二號（同　六月）「フロイド記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」※
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）※
（合本としては品切）

第一巻・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號（第一）※
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號「（第二）
（合本としては品切）

第二巻・上

第一號（同九年一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」※
第三號（同　三月）「傳說研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
（合本としては品切）

第二巻・下

第五號（同　五月）「ドストイェフスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」※
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」※
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」※
（合本としては品切）

第三巻

第一號（同　十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）※
第二號（同　三・四月）「宗教心理研究號」※
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
（合本としては品切）

第四巻

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と教育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金　三　圓（送料十五錢）

第五巻

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」
第五號（同　九・十月）「男女性格分析」
第六號（同　十一・十二月）「幼兒心理研究」
金　三　圓（送料十五錢）

※印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

第六巻（昭和十三年度）

號	月號	題目	種別
第一號	（一、二月號）	夢と象徴	（正誌）
第二號	（三月號）	文藝と繪畫	（正誌）
第三號	（四月號）	東洋醫學と分析	（冊子）
第四號	（五月號）	處女性の問題	（正誌）
第五號	（六月號）	斷種法と優生學	（冊子）
第六號	（七月號）	貞操の心理	（正誌）
第七號	（八月號）	受分析者の心得	（冊子）
第八號	（九月號）	自己愛の研究	（正誌）
第九號	（十月號）	分析學邦文獻	（冊子）
第十號	（十一月號）	神經症研究	（正誌）
第十一號	（十二月號）	分析學の勸め	（冊子）

第七巻（昭和十四年度）

號	月號	題目	種別
第一號	（一月號）	金錢心理	（正誌）
第二號	（二月號）	自尊心の再建	（冊子）
第三號	（三月號）	心理經濟	（正誌）
第四號	（四月號）	精神衞生	（冊子）
第五號	（五月號）	自慰の處置	（正誌）
第六號	（六月號）	全體主義	（冊子）
第七號	（七月號）	愛情と憎惡	（正誌）
第八號	（八月號）	國民精神保健運動	（冊子）
第九號	（九月號）	精神病への理解	（正誌）
第十號	（十月號）	ユダヤ問題觀	（冊子）
第十一號	（十一月號）	結婚の諸問題	（正誌）
第十二號	（十二月號）	知識階級の覺悟	（冊子）

單冊正誌五十錢・冊子十錢・各送料共

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

昭和十五年度より半年分一圓八十錢 一年分三圓六十錢（送料共）

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友は偶數月發行「冊子精神分析」の無代配布を受く。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、住所、姓名は勿論、年齡、職業その他を報告ありたし。（且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。）

VIII. Jahrgang, Heft 9-10—Sept.-Okt., 1940. Erscheint zweimonatlich.

Tokio Zeitschrift für Psychoanalyse

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse“

(Hefttitel: Die Kinderpflegungskunde)

INHALT

Preis des Einzelheftes, 60 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag

327 Dozakacho Hongoku Tokio Nippon

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可・昭和十五年九月廿五日印刷納本・昭和十五年十月一日發行・毎月一回一日發行

第6卷第10號
昭和15年10月

目次

自信を養ふ法

大槻憲二

一、才能の發見

自信とは何であらうか。自己信頼である。自己信頼と他人信頼とは、對象が他人にあるか自分自身にあるかの相違に過ぎない。我々は如何なる他人を信頼するかと云ふに、それは何らかの點で實力のある人間である。人間は神樣ではないのだから全能ではない。その能力には自ら限界がある。併し、全然何の能力もないと云ふ人間は殆どないと私は信じてゐる。が、併し人の能力には多少の相違があると云ふことも事實として卒直に承認しないわけには行かぬ。ところで、人の能力はこれを適當に伸ばせば相當な程度までに伸びるが、伸ばさないで置くと段々萎縮して行つてしまふものである。それ故に自信を得度いと思ふ人々はまづ自分の才能がどの方面にあるかを自惚れなく、併し卑下することなく、ありのまゝに發見することから出發しなければならない。さうして發見せられた才能は、よしんば如何につまらない才能であつても、虚榮心に囚はれることなく、それを伸長して行くことに人生の意義と幸福とを感じなければならない。折角ある自然の才能を抑壓して置いてありもしない才能を虚榮的に引き伸さうと思つても、結局あぶはちとらずに終ることは明らかである。

とは云へ、自分の才能が自然に伸長せられないのは、必ずしも虚榮のためばかりでもない。虚榮のために伸長せられない場合は無論ある。例へば、かの喜劇俳優古川綠波は貴族

出身の人であるが、彼が喜劇俳優としての自分の才能を發見して、伸長し度いと思ひつゝそれを實際に伸長させる可く努力するやうになるまでには、恐らく相當永い間苦悶したり、逡巡したりした事であらうと思ふ。その苦悶逡巡の理由の中には勿論虚榮心ばかりでなく社會的な顧慮（親戚故舊の中にはさう云ふ重要ならぬ——確かにあまり重要でない——仕事を喜ばぬもの、迷惑がるものも確かにあつたらうからその方への無理からぬ顧慮）もあつたらう。併しそれに依つて社會に弊害を及ぼさず、自らの生活が確立せられると云ふ目安がたつたなら何も遠慮することはないと思ふ。遠慮や氣兼ねのあまり、折角の才能を殺してしまつて一生をグウタラに過し、他人に迷惑をかけたり親戚の世話になつたりしてゐるよりは遙かに結構なことだと思ふ。職業に貴賤がないとは云はぬが併し柄にもない貴い職業に從事して成功せず、始終他人に迷惑ばかりかけてゐるよりは、寧ろ賤しい仕事でもいゝ、自分の柄に合つた仕事に從事して成功して、それに依つて社會に獨立の存在を主張し得る方がどれ程よいか分らない。

ところが併し、自分の才能を卒直に發見して、それに適した仕事をしようと思つても、世間の方ではオイソレとそれを直ぐに生かさせてくれるやうにはお誂向きに出來てゐない。例へば、古川綠波が自分の喜劇を生かすには、直ぐに綠波式喜劇を以て世間をアッと云はせるわけには行かぬ。そこには既に喜劇界には、曾我廼舍やエノケンなどの諸先輩があつて頑張つてゐるから、そこへ割り込むにはなかなか容易ならぬ苦心が要る。先づ始めに折角發見した自分の才能を殺して先輩の藝に迎合したやうなやり方をしなければならないこともあらう。これは併しあらゆる仕事に於いてさうなのである。

二、「三人片輪」の就職心理

私は近頃東京明治座で大阪文樂の人形芝居を見たが、その内に狂言の『三人片輪』と云ふのがあつて、これに分析的見地から非常な興味を持つた。求職者の心理を喜劇的に誇張寫したものとして極めて示唆に富んだ作品だと思つた。先づその筋を語つて見よう。

船岡長者と云ふ有德人があつて「ちと心願の御座つて片輪者を多勢召抱へようと存じ、此の程京洛中に高札を立てさせそのよしを知るさしめたれば」三人の片輪者——盲人、啞、躄——が罷り出て就職を願ふ。有德人は三人を採用する事に決し、盲人には寶物藏の鍵を、啞には酒藏の鍵を、躄には金藏の鍵を預けて「用事あつて山一つあなたへ四五日泊りでまゐる」ことになつた。その留守中に三人の僞片輪どもは馬脚を露はし、盲人は目を開き、啞は口を利き、躄は脚を伸ばし、酒藏から酒を引出して來て、大浮かれに浮かれてゐるところへ、主人が歸つて來て、この有様を見て驚くが自分も酒を飲んで片輪者たちの陽氣な踊に調子を合せつゝ口さきだけでは

「やるまいぞ〳〵」と追ひ蒐けて行く。こゝで主人までが酒を飲んで亢奮し、片輪者たちのディオニソス（ギリシアの酒神）的歡喜に合流してゐるところに特別な意味があるやうに私には思へてならない。もしさうせずに彼を冷靜に、或はたゞ憤激するのみにしておくならば、この戯曲の終りの場面は劇的な高揚を生じないであらうと云ふことだけは疑ひの餘地がない。何となれば、觀客の全部が既に三人片輪等と共にディオニソス的歡喜亢奮に醉はねばならぬのだからである。

　ところで何故に觀客たちは彼等片輪者どもと一緒に亢奮したのであらうか。片輪者は酒を飲んだが、飲まぬ内から彼等は既に亢奮してゐた。盲人は目を開いて晴々したと喜び、啞は自由に口が利けると云つて有頂天になり、躄は脚を撫でさすつて自得してゐるのであつた。彼等は片輪者の眞似をして主人を欺いて怪しからぬと人は憤慨するかも知れないが、併し傭主の方でも片輪者を要求したところに伴がなかつたと云へるであらうか。普通には身體完全で、才能豐富な人材を求む可きであるのに、故意に不具者を求めると云ふのはその動機に疑はしいものがないであらうか。不具者は就職に困難であらう。さう云ふ者に職を與へるのは「有德人」の慈悲であると云ふのが船岡長者の意識である。併し彼の無意識面には不具者は就職の機會が少なからうから職を正直に守るであらうと云ふ侮辱的な考へ方がなかつたとも云へない。その裏をかいたのだとすると、彼等僞不具者たちの欺瞞も滿更批難出來なくなつて來る。狐と狸のばかし合ひに於いて、不具者群の方が勝利を得たのかも知れない。

　併し翻つて考へて見ると、一般に人を傭ふ者は精神的な意味での一種の不具者を要求する傾きがあるし、求職者の方ではその相手の求めてゐる不具者のやうな風を多少とも裝つて行く傾きがないとは云へないことを我等は氣付くのである。さう氣が付いて來るとこの狂言の持つ心理學的意義は極めて重大であると云ふことを思ふ。この狂言に於ける不具者は勿論、肉體上の不具であるが、それは藝術一般の表現形式として具象性を採らねばならないからその法則に順應したもので、實は精神的不具者を求めてそれに應じた兩者の立場を鋭く皮肉に描寫したものとしてこの戯曲に深い意義と價値とが存することを我等は思ふ。

三、長短馬脚のあしらひ方

　思へば、人を求める傭主側にはその仕事の性質や種類に應じていろ〳〵の注文や條件があつて、いきなりそれにあてはまるやうな人物は絶對にあるわけはないのである。餘程その適格性に近い人でも、多少の時日と訓練とを待つてその適格性を完成して行くやうにしなければならない。それ故に傭主側はその適格性の條件を高く揭げて臨み、求職者側は自己の本然を多少とも伴つて、その適格性に近い者であるかのやう

な顔をして募りに應じて行くやうになる。その意味に於いて一切の求職者は或る精神上の片輪者を裝ふて行くのだと云つて必ずしも過言ではないのである。その裝はれたる僞の精神的片輪狀態は、從來の言葉でこれを「神妙にしてゐる」と形容せられるが、その神妙にしてゐる狀態は、併し長くは續かない。やがて馬脚を露して來る。が、露はす可き馬脚を多少とも持つてゐる人間ばかりでなく、全然馬脚のない人間もあるし、姑く馬脚のないやうな顔をしてゐるうちになけなしの馬脚が消えてなくなつてしまふ人間もあるし、始めからとても匿し了せない程に長い馬脚を持つてゐる人間もある。こゝで私は「馬脚」と云ふ言葉の分析解釋をして置くが、これは文字通りの「馬の脚」ではなくて象徴的なものであることは云ふまでもない。卽ち本來は馬の第五番の脚を意味したに相違ない。何となればそれは平常時は殆ど見えない程に小さいが、一朝亢奮した時には非常に長大なものとなり、如何にも男性的威力の象徴とするに適したものだからである。人間に馬の脚が具つてゐるわけはないからこれは人間の「不逞なる威力」の象徴として、普通には惡い意味に用ひられてゐるが、併し善惡は相對的なものであるから私はこゝでこれを善い意味にも解しなければならないのである。

　人間、殊に男子の生れながらに持つてゐる馬脚（象徴的表現を避けて判然と才能又は氣力と云つてもよい）の種類や性質は區々であるが、全然馬脚が無ければ、就職も問題でないが、併し馬脚があまり大きくても困るし、畸型でもいけないし、小さ過ぎてもいけない。丁度規格に合つた馬脚を持つた人を傭主は求めるのだから、求職者の方は自分の馬脚を何とか大きさうに、小ささうに、或は正常らしく神妙らしく裝つて傭主の前に持つて行つて試驗を受ける。試驗に合格しなかつた者は非常に劣等感を持つやうであるが、それはたゞ相手の求めてゐる適格性を有しなかつたと云ふだけの事である。自分の馬脚が異常ならば異常なりに育てるがいいし、巨大に過ぎるならば巨大のまゝに發展させるのがよいのである。異常なものが正常らしく裝つたり、巨大なものが小ぢんまりしてゐるらしく見せかけたりしてゐると終ひに神經衰弱になるか或は馬脚が漸次に萎えて來て脫落して了ふやうになる。

　勤續何十年と云ふので表彰せられるやうな人は、馬脚が丁度その職の規格に協つてゐる人なのであつて、何人もそのやうに行くことも出來ないし、またその必要もないのだ。何處へ持つて行つても適格でないと観じたものは、强ひて適格の個所を發見しやうとはせずに斷乎思ひ切つて自ら適格の個所を創造しようとするがよい。併し自分の馬脚の特異性に丁度適した規格の個所（仕事）を創造するのは容易ならぬことである。あり合せの個所に自分をあてはめて行くことの出來る人は骨折りは少いが、自分で自分の適格個所を創造しなけれ

ばならないものは非常な骨折りである。時には自分の生命も危ふくし、身邊の者等を悲慘のどん底に陷れなければならないであらう。その代りその苦鬪に堪え得て、美事に自分の適格個所を創造し得たものは喜びも大きいが自信も强くなるのである。實は自信とはさう云ふ人にして始めて持ち得るところのものである。それをはじめから適格の馬脚を持ち合せてゐて、適所にそれを置いて終始して來た人の自信などゝは固より比較にならないものである。

國家社會の事情があまり平和に永く確立してゐると仕事の適格性が形式的に固定して了つて、創造性や流動性がなくなり、あり合せの適格者（小型秀才）のみが幅を利かせて眞に大きな馬脚を持つて生れて來たものはその寶を持ち腐らせてしまふやうになり勝ちである。その意味に於いて現下の我が國のやうに社會の秩序が根柢的に動搖するやうなことが起きるのは眞に强健な馬脚を具へた者のためには喜ぶ可き狀勢であると云ふことが出來るかも知れない。

それ故に眞に自信力を養ひ度いと思ふ者は手を拱いてその臨降を待つてゐるやうな怠惰なことでは駄目である。自分の馬脚の力を自分で試し、自分の馬脚に適格した仕事を自分で創造するより他はない。併しこの道は非常に危險であるから萬人には勸めない。どこにも適格な個所が見付からないと云ふ人、または何人もその個所を與へては吳れないと云ふ人がのるかそるかで試みてみることである。但しさう云ふ冒險者には眞實の「自信」の榮冠が與へられるかもしれないと云ふ可能性が輝いてゐるのである。それ以外の者は眞の「自信」とは無緣である。よしんばその自信の質量の差はいろいろであるにしても……。

以上はあまりに理想的な場合のことをのみ云ひ過ぎたかも知れない。人に備はれてゐる者には本當の自信はないと云ふわけになる。實はその通りには相違ないのだが、備はれてゐても、自分の技術や才能や人格や識見に就いてその限りに於いての自信がないと云ふわけではない。併しその自信はやはり自力を實際に適用して見て得たもの以外ならぬし、またそのやうにして得たものでなければならないのだ。實證の試驗を通過せずして持たれてゐる自己信賴は自惚に過ぎない。自惚と自信の差は實證の試驗を通過してゐるか否かに存するのだが、併し何が實證の試驗であるかはなかなか識別に困難である。或る人は實證の試驗と認めるに足りないものをそれだと思ひ込んで一喜一憂し、或る人は試驗に外ならぬものを一見それらしい體裁を具へてゐないからとて試驗でないと思つて落第してゐるのに及第してゐると思つてゐる。この問題については何れなほ稿を更めて說く時があらう。（完）

『梅川忠兵衛』分析鑑賞

不老泉院主

『三人片輪』と同時に明治座で近松原作『梅川忠兵衛・冥土の飛脚』を見たが、典型的な墮落願望の心理劇であるので、私は特別の興味を持つた。殊に所謂「羽織落し」は心理描寫として鋭い技巧であることを思ふて、こゝにその分析的意義を説いて見たい衝動を禁ずることが出來ない。

主人公忠兵衛は大阪淡路町の飛脚屋（金錢取次業）龜屋の養子で律氣な青年（二十四歳）であつた。大和の新口村の大百姓孫右衛門の子であつたが、實母に死に別れてからこの龜屋の後家妙閑の養子に迎へられた。彼には愛人（新町の遊女梅川）があつたが、その梅川が田舍客に受出されさうになつたので、忠兵衛の救助願望と競爭心とは急に燃え立つて、友人丹波屋八右衛門の金五十兩を無斷融通して、梅川の身受を差留めておいた。八右衛が催促に來ると、忠兵衛は事情をありのまゝに述べ暫時の猶餘を乞ふ。八右衛門は忠兵衛の正直を賞でゝ乞ひを容れるが、養母妙閑の心配をなだめるために返金したやうに見せかけて鬢水入れを渡す。それを受取り受取證を書いて八右衛門は歸る。

そのあとで江戸から三百兩の金が到着する。それは堂島の方へ直ぐに屆けねばならない金である。忠兵衛はその封金を懷にして羽織の紐を結びもあへず出かける。ふと氣がついて見ると、堂島とは正反對の米屋町まで來てゐた。梅川の居る新町の方へいつしか足は向いてゐたのだ。梅川の顏は見たし、大事の金は屆けねばならず、心二つに身は一つ、苦惱の末に斷乎新町の方へ出かけてしまつて、そこで再び八右衛門に出會し、八右衛門が鬢水入れを出して女郎衆に見せて、忠兵衛の金につまつてゐる事を皆に披露してゐるのに赫となつて、遂にこの金の封を切つて犯罪者となるのだ。この封切りと云ふことが、禁斷を犯すことの端的な象徵となつてをり、封を切るか切るまいかの決斷は既に米屋町で逡巡した時に定められてゐたのだ。この米屋町に於ける逡巡と決斷の場面は「羽織落しの段」と云つて有名なものであるらしく、原作者近松はこれを次のやうに描寫してゐる。

「やあこれは堂島のお屋敷へ行く筈、狐がばかすか、南無三寶、と引返せしが、むゝ、我知らずこゝまで來たは、梅川が用あつて氏神のお誘ひ、ちよつと寄つて顏見てから、と立返つては、いや大事、此の金を持つては遣ひたからう。おいて呉れうか、往つてのけうか。いきもせい。と一度は思案、二度は無思案、三度飛脚、戻れば合せて六道の冥土の飛脚と……。」

この文章を少し分析的に鑑賞して見よう。自分の無意識願望のために意識的意圖の覆されることを「狐がばかすか」と云つてゐる。このやうに「我知らずこゝまで來たは梅川が用あつて氏神のお誘ひ」とあるのでは、梅川と氏神とが同じものであるかの如くに聞こえるが、恐らく忠兵衛の無意識では兩者は複合せられてゐるのであらう。それにしても結局は彼自身の無意識願望のさせる仕業に外ならぬものを「氏神のお誘ひ」とは都合よく責任を神に轉嫁したものだ。

私が劇場で見てゐた時、觀客の一二は流石にこゝで失笑してゐた。「おいて與れうか、往つてのけうか、いきやせい」と言ふ三句は、意識面の良心的理性の聲と、無意識面の墮落願望の聲との葛藤の結果遂に後者が勝利を得た過程を端的に描いてゐるのであるが、舞臺上で見た時にはこの場面は執拗に反復せられ、主人公は半ば失神狀態で、舞臺の上を數度も同じやうな調子で右往左往し、その度毎に「おいて與れうか、往つてのけうか」と淨瑠璃語りは叫ぶのであつたが、遂に決心して「いきもせい」の一語と共に、肩から羽織の滑り落ちるのも意識せずに半失神狀態で、新町さして驅けて行くのであつた。

早大演劇博物館長河竹繁俊氏に私は近頃會ふ機會があつたので尋ねて見たら、この場面で羽織を落すのは、昔の俳優の創案にかゝるもので、別に原作者の指定ではなかつたさうであるが、今では筋書本にも明かに、「羽織落しの段」とある位であるから、何れの俳優もこゝで羽織を落すことが動かぬ型になつてゐる事は明かである。さうして、私もこゝで羽織を落すことは如何にも要を得たる技巧であると思ふ。その意味を分析的に明かにして見るならば、羽織はこの際、主人公の超自我（良心）の象徴となつてゐるのだ。良心の聲は羽織と共にうしろに置いてきぼりにしたから、あとは自我とエス（無意識願望）とが馴れ合つて、いくらでも勝手な事（墮落願望）が振舞へるわけである。

私はこゝで必然的に一つの漫畫を想起する。押尾坊や氏作『心中奇譚』（昭和十一年五月四日、都新聞所載）である。（挿畫參照）。この畫に於いて投身者は「一寸待て」の立札を抱いて入水してゐるが、彼女の抱いた立札は彼女の理性や良心や現世的興味の象徴であらう。して見ればこの場合、この立札は彼女の別自我となつてゐる。立札を抱いて死ぬと云ふのは漫畫的な滑稽感を與へるが、これがもし彼女の子供をでも抱いて死ぬのであつたら滑稽感どころではないであらう。何となれば、子は彼女の「理性や良心や現世的興味」そのものであつて單なる象徴ではないからである。母子心中をする人の心理とこの立札を抱く女の心理とは實は同じである。

忠兵衞が羽織を落しておいて死地に赴いたのと、この投身者が立札を抱いて死地に飛込んだのとでは丁度正反對の現れであるが、併し共に良心や理性のために後髮を引かれて逡巡する心理に於いては同じである。併し一方が羽織（理性）を置去りにし、他方が立札（理性）を共に抱いたのは、その瞬間に於ける兩者の立場が相違し、一

方がまだ逡巡過程（即ち自我分裂狀態）にあつてなほ多少の餘裕があつたに對し、此方は既に自殺の決意が定まつてしまひ、今更自我の分裂を許さぬ程切迫したものになつてゐたからだと見るべきである。

最後の一句は殊に作者近松に於いて、この主人公の悲劇の動因が彼の墮落願望（死の本能）にあることを、殆ど明示してゐるかの觀があるではないか。「一度は思案、二度は無思案」とは第一回は意識的に考へ、第二回目は無意識に考へ、三度目には善惡を超えて飛躍（飛脚）する、その飛脚の先は「冥土」であると云ふのであるのだから……。（完）

講習會九月例會

九月例會は二日夜、研究所に於いて催された。當夜は『トーテムとタブー』の內第四章の第三節及び第四節を精讀した。第三章は前章のあとを受けて、即ちトーテム外婚の原因が二つありとせられ、一つは父親的强力者が部族內の全女子を壟斷したためであり、他は近親姦恐怖のためであるとする、これ等相容れない二說の調和が分析的研究結果に依りて可能なりとして、現代の幼少年に現れる動物恐怖がトーテミズムと密接の關係ある所以を明かにし、第四節に於いては「トーテム饗宴の古代的儀式」を紹介してその意義を暗示してゐる。更に第五、第六、兩節に於いて結論に入るのである。

精讀後は現下各方面の狀勢に就いて分析的研究を重ねたり、『三人片輪』に就いての大槻氏の分析鑑賞の披露があつたりした。出席者は宮本、田中、大場、高木、馬場、小林、小野田、塚崎、瓶子、大槻夫妻の諸氏であつた。燈火管制の夜であつたので、會員諸君の歸宅の途の無事であつたかどうかを司會者は案じた。

研究所だより

▲長谷川誠也氏重態の旨は前號誌上で報告したが、既に各新聞紙上にも報道せられたやうに、氏は八月卅日に品川區上大崎の自邸に於いて長逝せられた。新聞を見て、福田杲正、篠原正雄兩氏が早速弔狀を下さつたことを感謝する。告別式は九月一日、本郷區の麟祥院で營まれた。何れ、追悼の辭は來月號の正誌上で更めて述べます。

▲特別誌友長田耕一氏はその父君を九月八日に失はれ、十日午後二時告別式を江戸川區平井の自邸に於いて營まれた。心よりおくやみ申上げます。

編輯後記

本號は册子として第十六册目である。始めて册子を出したのは一昨年の四月であつた。册子八頁、正誌百頁內外の體裁を當分堅持して行くつもりである。

大槻氏新著『性格改造法』近く上梓せられる。

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
昭和十五年九月廿五日印刷
昭和十五年十月一日發行
（月刊）册子 定價 金十錢
東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人 大槻憲二
東京市板橋區板橋町三ノ六十四
印刷所 帝都印刷株式會社
東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所 東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番